

昭和62年度

No. **33** 部 報



北大馬術部

北大馬術部讃歌

作詩 三浦清一郎
作曲 滝沢南海雄

はるきたれば だいちひか-る
しろがねのえんざん ゆめぼうぼうたり
たからかにいま そいななけわれ
らしゅんめのほま-れあり
ほま-れあり ほく だいほく だい お
おわがほこう われらしゅんめの
ほま-れあり

北大馬術部讃歌

一、春来たれば、大地光る

銀の遠山 夢々たり

高らかに 今ぞ嘶け！

われら駿馬のほまれあり

二、時来たれば 旗をかざせ

青雲の旅路に 意気軒昂たり

高らかに 今ぞ嘶け！

われら駿馬のほまれあり

三、雲流れて 旅路遙か

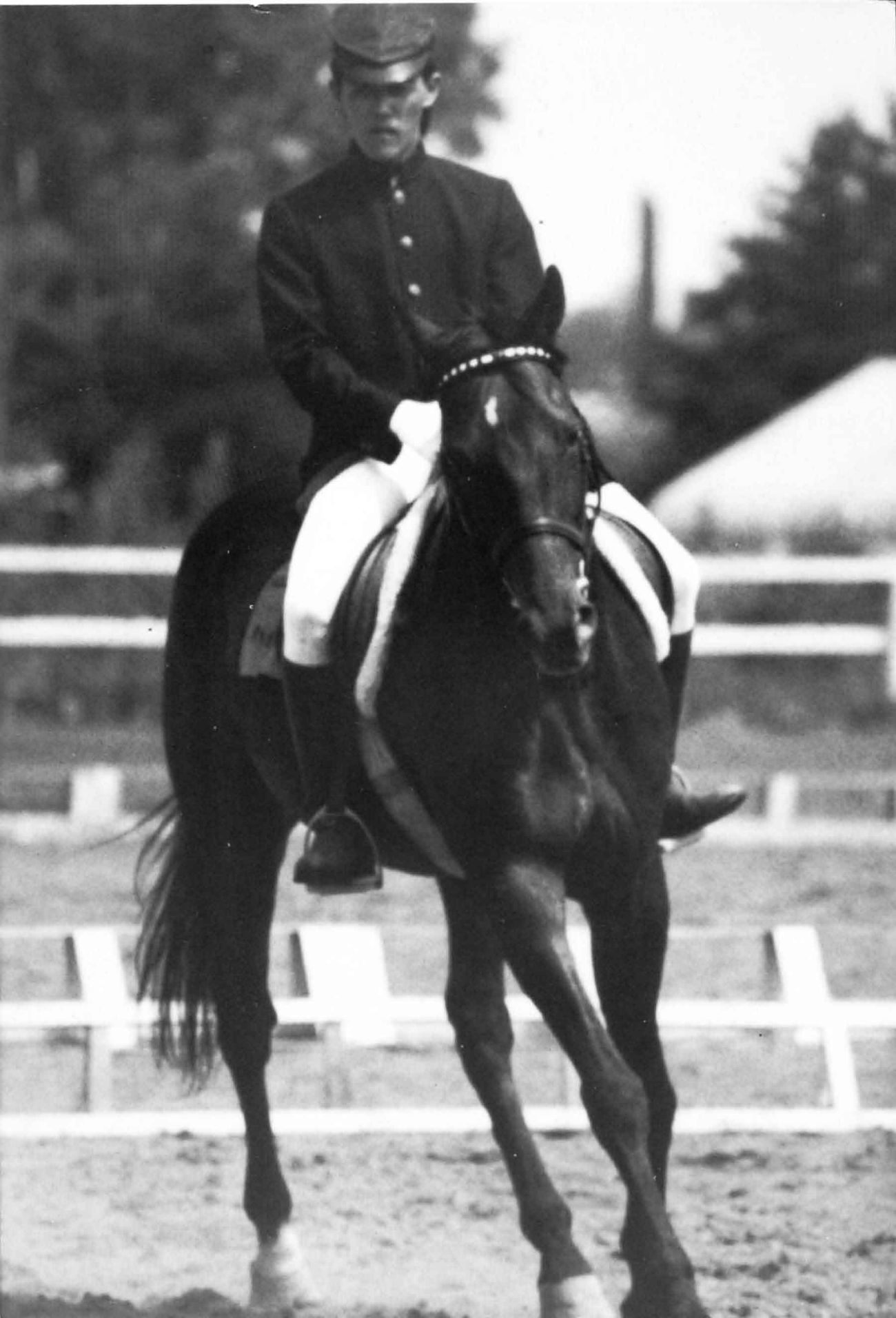
青春の孤杖 泥濘はほめど

凜然と 進みて行かむ

駿馬のほまれあるかぎり

北大！ 北大 おゝ我が母校

われら駿馬のほまれあり





目 次

巻 頭 言	小池 壽男	1
こ あ い さ つ	齋藤 善一	2
ス ラ ン プ	岡田 光夫	3
Canter Pirouette の調教法	半澤 道郎	4
前 主 将 か ら	服部 雅史	10
現 在 の ク ラ ブ 状 況		11
行 事 報 告		18
戦 績 報 告		20
全 日 学 観 戦 記	石川 信行	33
馬匹紹介、調教報告		
ドン・ホッパー号	服部 雅史	34
北 皇 子 号	中野 兼一	39
ノ エ ル 号		46
北 銀 号	高野 薫	47
北 玲 号	加藤ゆうこ	52
北 凜 号	服部 雅史	60
北 駿 号	長屋 清隆	64
北 英 号	半澤 道郎	68
馬 の 顔 写 真		71
新 馬 紹 介		
北 楡 号		73
離 厩 報 告		
北 姫 号	大歳 正明	74
	長屋 清隆	75
北 紫 雲 号	金田 克己	78
ス ー パ ー ボ ー イ 号	南部 孝一	81
北大水産学部活動報告	北川 知子	83
東京OB会便り		84
卒部にあたって	服部 雅史	87
自己紹介、他己紹介		88
北海道大学馬術部名簿		106

巻 頭 言

部 長 小 池 壽 男

昭和52年4月に前部長の河田先生の後を引き継いで北大馬術部の部長となって、いつの間にか11年を過ぎてしまい、この巻頭言を書くことになった。今年3月末で定年を迎え、北大で35年の生活を終わることとなったが、その後半の約 $\frac{1}{3}$ を馬術部部長として過ごしたことになる。馬術部との付き合いは、私が北大に転任してきた昭和28年4月以来で、前の $\frac{2}{3}$ は主に部馬の故障の治療が目的での交流であり、時には骨折などでやむなく安楽死させたこともあった。

馬術には全くの素人の私が長期間にわたって馬術部の部長であることは、けっして良いとはいえず、馬術の指導については半沢先生や監督の岡田先生ならびにOBの方々の御好意に甘えてしまったことは、慚愧にたえず、深くお詫びする次第である。ただ部馬の健康管理については、私の専門が家畜外科学でもあり、若干でもお役にたてたことで長年の怠慢をお許し願えればと思っている。

大学の課外活動としての運動部の在り方については、諸種の考え方があろう。そのなかでも、馬術部は生きており意思を持っている馬が部活動に大きな比重を占め、その管理など他の運動部とは異なった制約があり、かなりの負担が部員にかかるという難しい側面を持ち、その負担が課外活動の域を越えたり、馬による危険な事故などの問題を常に抱えている。そのため、馬術部員としては馬に乗るまえに馬を良く知る事が必要となる。

馬は哺乳動物の中でも頭の良い部類に属し、また家畜として人と共生するようになっての歴史も比較的長く、その習性などもかなりよく知られている。馬は軽快なスピードと強い力を持っているが、本来は温順であり自分から他を攻撃するような性格ではない。むしろ危険からは本能的にそのスピードを利用して逃げることで身を守る動物である。しかし、一般に考えられている以上に敏感であり、耳・眼・鼻の感覚が発達しているだけでなく、体全体の感覚が発達しており、大きな音や見慣れない物など周りの異常に驚き易い性質がある。さらに、賢い動物ではあるが、その能力の主体は記憶力であり、理解力は劣っている。このため、一度経験したこと特に嫌なことは良くおぼえており、粗暴な取扱いには不安感から自己防衛本能として性質が悪化し、咬む・蹴るなどの悪癖馬になりやすい。

ところが、現在の我が国では馬の数が全国で10万頭以下に成ってからかなりの月日が経過し、特殊な地域以外では馬を見たり触れたりする機会は少なく、新入部員の中には入学前に馬をよく知っているものは殆どいないといってもよい。一般に馬術部へくる学生は馬に親しみを持っているものの、馬の特性を知っている人は少なく、このために馬の意思表示を適確に汲取って対応することは不可能であり、この人と馬との意思疎通が欠けていることが事故につながる。このため、部長としては競技成績よりも馬との交流の良否や、事故のことが常に頭を離れることがない。私の在任中には2・3心に残る事故もあったが、なんとか今まで過ごせたことを感謝している。

馬術部にとっては、北18条の道路問題・馬場の老朽化など今後の問題がなお沢山残っている時に部を去ることは心残りもあるが、何も出来なかった私をもちたてて今日まで勤めさせてくれた各年度の役員や部員、さらに陰に陽に力を貸して下さったOBの方々、特に終始御指導とお世話をお掛けした半沢先生・岡田先生には心から感謝申し上げ、今後の北大馬術部の活躍を祈念する。

(昭和63年1月20日記す)

ご あ い さ つ

第9代部長 齋 藤 善 一

此の度、第9代部長を仰せつかったことは私にとって大変名譽なことであり、光榮に存じます。現部長小池壽男先生は学内の事情にも精通され、特に馬の為には家畜外科学教授としての腕を振るわれて、まことに名部長であられたと思います。名部長の後任ですから一層責任の重さを感じ、身の引きしまる思いです。私は昭和26年秋に馬術部が復活した折に早速入部したのですが28年に卒業しましたから、馬術部員であった期間は僅か1年半しかありません。しかし、卒業後研究室に残り乗馬同好会会員として馬に乗せて貰っていたので、馬術部を通して多くの方々と知り合いになり（これを馬徳というそうです）大変御世話になりました。弘前大学に転任して間もなく弘大馬術部が創設され部長となりましたが、その間にも名門北大馬術部のOBであるということで肩身の広い思いを致しましたし、いろいろと便宜を計って載ったことも少なくありません。部長は大学当局から云うと顧問教官であって、学内の教官でなければならぬのですから、そういう立場にあることを幸いとして、御世話になった馬術部の為に少しでも役に立つよう努力するつもりです。私が古巣に戻ったと云われますが、20年の空白は大きく、古巣も変って戸惑うことが多い状態ですから、行届かぬことがあると思いますが、部員諸君や後援会の皆様の協力を得て任務を全うしたいと思います。

私は随分多くの方々に馬の乗り方や扱い方を習いました。札幌競馬場で練習をさせて載ったので場の方々によく叱られもしましたが、細かい事まで親切に教えて貰い感謝しています。馬術部を復活させ、指導に当たった古谷、後藤、永井、下飯坂、渡植、齋野の諸兄は別個に馬術を習得していましたから、それぞれ特色がありました。第9回国体馬術競技の準備のために東京から招いた2教官のもとで貸与馬の調教を兼ねた長期練習に参加出来たのも大きな収穫でした。半沢先生や岡田監督にはその頃からいろいろと教えて載っております。当時の指導者は軍隊の馬術教範によって訓練された方々ですから基本的には同じなのですが、教え方、乗り方には長年の経験から会得した個性が感じられ興味深いものがありました。馬術を習得するには、乗る、見る、調べる、という三つの「る」が大切であると云われます。鞍数の多い程上達するのは当然ですが、漫然と乗るのではなく、他人の乗り方を見たり馬術書を読んで調べることも必要です。「考えて乗れ」というのも同様の意味でしょう。部員諸君の大部分は北大に入学して初めて馬に乗ったのではないかと思います。4年間は短いけれど、自分の乗り方を会得するための第1歩として、人の意見や批判にも耳をかたむけ、短い期間に効率よく進歩して下さい。

小池先生から厩舎の設計図などを引継いだ時に、先生は事故がないのが何より有難いと云われましたが、11年間いつも念じておられたことでしょう。すべての事故は不注意、油断に起因すると考え、いつも緊張して練習や諸作業に当って下さい。最後に、学生馬術では、立派な学生でなければ良い選手とは云われません。シーズンオフでのんびりするということがなく冬も忙しい馬術部の活動をしながら大変だとは思いますが、勉強の方もおろそかにしないで頑張ってください。

今迄は、部長交替の年は特に好成績を残しているようで、今年もそうあって欲しいと念願しています。

ス ラ ン プ

岡 田 光 夫

新聞・テレビの運動関係の報道には、今年のトレーニングキャンプを終えたプロ野球団のことが華々しく報ぜられている。紙面には、新人は新人らしくベテランはベテランらしく、希望に満ちた談話や予想で満たされている。しかしその陰で、何倍かの選手がスランプに陥り悩みながらなんとかはい上ろうとして血のにじむ様な努力をしている事は、容易に想像される。

何故こんな書き出しになってしまったのかと云えば、私自身が昨年来殆んど一年ひどいスランプに悩んでいるからである。それは馬術の基本である所謂鞍に坐れなくなっていたのである。昔よく云われた「きんたま乗り」になってしまって、頭の中では坐骨と縫際の三点で平衡を保たなければならないことはよく分りながらどうしても前傾してしまう。まあそれなりに乗っていれば昔の軍隊乗りとして笑い草にもなるろうが、いつも姿勢だ拳だとやかましく言っている我が身に取っては何んとかして少しでも姿勢を直したい思いにかられる。直したい第一の理由は、正反撞が受けられず、従って坐骨で推進する事が出来ない事にある。一昨年に軽い脳障害で入院したが、その後遺症で平衡感覚が浸されたらしい、と人に話したら、そんな馬鹿な事があるか、お前の姿勢は昔から前傾していた、と一笑に附された。

鞍の前をつかんで無理に身体を起しても腰だけが後ろに残り、情けない出尻の姿が鏡に映る。鏡を外して乗ってみても平衡がとれぬ為、かえって身体に力が入ってグラグラする。落馬しまいと膝にやたらに力を入れるために膝の皮をむいてしまう始末。傷絆創膏をはっても役立たずぶあつくほうたいを巻く始末。身体を起して正反撞を受けて、少し歩度が伸びると三十種も尻がとび上がり、馬の背中の負担を考えると可愛想になる。

何んとかならぬか、何かの機会に一つのヒントが得られて姿勢が直らないか、と模索しているうちに、昨年10月頃から頻頻と不整脈(心房細動)の発作に悩まされ、とうとう12月から今年の1月まで入院する始末になってしまった。病院の中で閑にまかせていろいろ考えたり本を読んだりしても、所詮馬は乗って見なければならぬ。自分自身の気の弱さか、スランプ中の鏡の中のぶざまな姿を思い直してか、人に注意する事も馬の話しをするのもつい臆病になる程落ち込んでしまった。

これではいけない何んとか脱却しなければ、と近頃は無理をしない程度に馬に乗りながら鏡から教わり、又、人の忠告はよく聞く様にしている。これから暖くなればもう少し馬にも乗れる様になるだろう。早く颯爽とまでは行かずとも少しはましな乗り方を思い出したいと思っている。

もしスランプで苦しんでいる部員諸君がいるならば、68才の私でさえ努力しようとする意欲に燃えているのだから、よく人の話しを聞き、いろいろ工夫して早くスランプから脱け出してほしい。私も及ばずながら手助けをするつもりである。スランプが馬に対する情熱を失なわせることがあることを銘記してほしい。

Canter Pirouetteの調教法

第6代部長 半澤道郎

Dressage & CT 誌の1987年2月号にReiten und Fahren誌に載ったProf. Alfred Knopfhart氏の記事のJoan H. Hunt氏による英訳文があった。興味があるのでその大要を述べてみることにする。

昔の戦場の一騎討で生き残るために、決定的に必要であった急激な方向変換——Pirouette（ピルエット）——は軍隊の乗馬技法として誕生した。形態は少し違うが類似の回転がCowboyや闘牛の演技の種目に見られる。馬術特に古典馬術の習得に於てPirouetteの熟達は誠に重要であることは昔から変わらない。

馬術は特殊な馬の個々の才能（技量）によって演ぜられる部分が非常に大きいので、乗馬の全分野に於て、何の運動が最も困難であると決める厳格な規定は無い。然し確かにPirouetteは馬場馬術に於ては最も困難な運動の中に入っていて、時にはPiaffe又はPassage又はChange of lead every stride（歩毎の踏歩変換）よりも難かしい場合がある。多くの馬は一旦それらの運動に熟達すると、それらの運動を恰も自発的に、自分の自由意志で動くように見えるようになるけれども見事なPirouetteを自分自身でやる馬は居ない。

Pirouetteの実施には収縮が要求され、後軀の真の屈撓、増大された前進気勢（推進力）、柔軟な後軀で増加された負重を支える弾発力、それに騎手の扶助に完全に協調していることが必要である。

多年の経験の結果からColonel Alois Podhajsky〔以前のViennaのSpanisch ReitschuleのDirectorで“Die Klassische Reitkunst”（1965年MünchenのNymphenburger Verlagshandlung GmbH出版）の著者で有名〕は簡潔に「歩毎の踏歩変換、Piaffe及びPassageができたならばPirouetteをやるべきである」と述べている。

昔戦場で戦の流れを変えた様に、Pirouetteは現在の平和な馬場の競技に於ても、Pirouetteには係数を与えて優秀な演技に対し、例外的に高い点が与えられtestの結果を決定的なものにしている。

Pirouetteに対する最もハッキリした説明はF. E. Iの競技会規程の412条に見られる。……（ここには再録を省略するので規程を熟読されることを望む）……最初の項は二蹄跡で正しい円を画く乗り方を説明している。馬の体長と同じ半径で二蹄跡で回転することが要求されている。これはPirouetteの調教の一般的な準備運動の方法に重要な方向を示している。

二蹄跡でする巻乗りの直径を次第に縮小して馬体の長さの半径で回転するまでにするのであるから、先づ初めに二蹄跡で完全な巻乗りを考慮を払って注意深く習得する必要がある。収縮駢歩で正しく隅角を乗れないようでは、両手前で行う6 meterの巻乗りなどは問題外で、無理にすれば著しくTempoを失なう、これは屈曲が不十分なためである。

騎手が無頓着でも長く乗っていると、細かい運動も出来るようになるけれども、最近では課せられた困難な運動を時間をかけて練習することによって進歩が見られるとされる。これは単にある種目の運動

そのものを練習、訓練するよりも、その運動を行うために必要な準備操作を無視しないで、十分考慮して注意深く練習することが大切であると思う。……「準備なくして完成なし」(筆者)……

馬が二蹄跡で小さい巻乗りを駢歩で行う以前に直線上で駢歩の横歩が出来なければならない。次に大きな円の輪乗りで行うことを学ばなければならない。円の径を段々に小さくして、もしも駢歩が不自然(のびやかでない)になったり、欠点が現われたり、駢歩をやめてしまうようならば未だ準備が不足である。蹄跡上で駢歩で肩を内へ(Shoulder-in)の運動を行い、内方後肢で体重を自ら支えるようにする。(これはPirouetteで要求される)。次でこの運動を円周上でを行い円周に沿って正しい形で回る様にする。その円周を大きくしたり、小さくしたりし、両側(両手前)でやる。こうすると両側の後肢の踏み込みを良くする。円周が大きい時には内方の後肢が働き、円が小さい時は外方の肢がもっと作用をする。円周の大きさを増減することによってPirouetteの準備作業を段階的に発達させる最も重要な構成要素である。

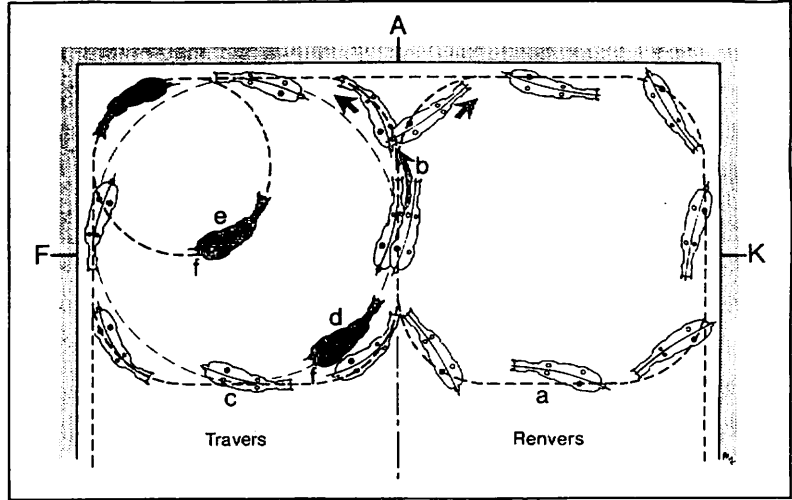
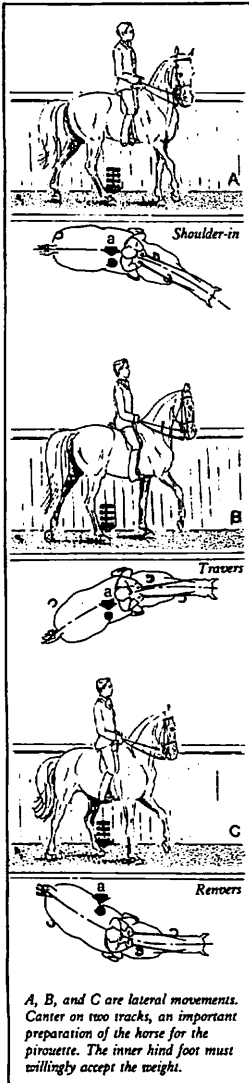
次で二蹄跡の巻乗りであるが、これには著者が推奨する方式がある。(余り取り入れられていないが、将来の応用に有効である)初期の作業としては約10mの直径で殆ど正方形に近い形で、軽快に方向を換えられる様にして、其処で僅かに腰を外へ(Renvers)の駢歩(Canter)で乗る。後軀は1歩又は2歩の歩幅より広くなならない様に傾かせて乗るべきで、歩調は変らない流動的であるべきである。特に偶角においてももしも正しい屈撓(Bend)に欠ける場合には馬は駢歩の腰を内へ(Canter travers)の時の様には屈曲が容易でない。馬は偶角を通して長い蹄跡上に正しく後軀を動かすことを学ぶ。これをするのには騎手は外方の脚にかなり強い力をかけることが要求される。一旦馬が収縮姿勢の駢歩で腰を外にした巻乗りを流動的にできる様になったならば、次の段階は通常の収縮駢歩で静かに落着いてやれる様にしなければならない。巻乗りの径を段々小さくし、偶角を僅かの腰を内へ(Travers)の姿勢で廻り、最終的には通常の巻乗りの全部を二蹄跡で通過出来る様にする。

何故初めから二蹄跡で巻乗りをしないで偶角を使って遠廻りをするのかという質問に対しては、次のような理由がある。偶角で乗ることは後で実施するFull又はWhole Pirouette(全ピルーエット、360°回転)の $\frac{1}{4}$ (90°回転)に相当する運動で角の無い巻乗りをする準備作業になる。

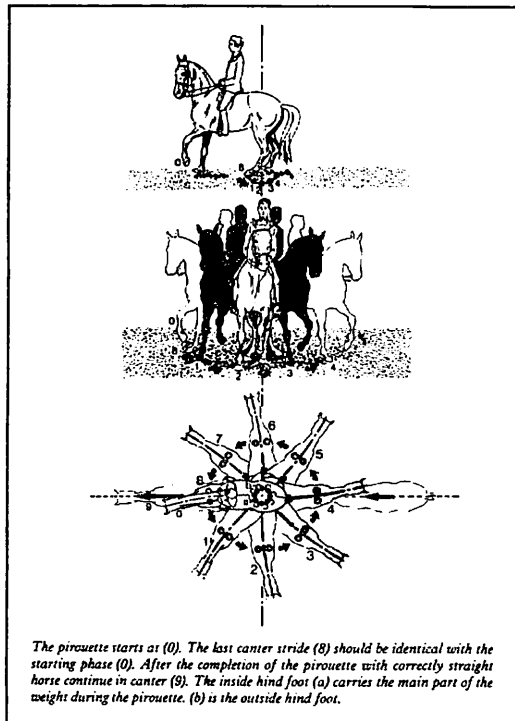
通常単にPirouetteと云えばHalf Pirouette(半ピルーエット)であって、二蹄跡で行う半巻(Half Volt)はWhole Pirouetteの前の運動として実施すべきである。

個々の馬によって、その馬に適合する簡単な練習方法は種々あるが、それを実施する能力は訓練された騎手の力量によるものである。その力を体得(master)した人は、彼の身体と同様心で乗ることが出来る。一例として二蹄跡の巻乗りとHalf-passとを組合せて乗っている。何故ならば馬は既に二蹄跡でHalf-passができるからである。Half-passは馬場の中心線に向う斜線の処から始める。其処は二蹄跡の半巻を始める処である。ハーフパスを中心線上で終るようにし、其処から斜線に沿って蹄跡に戻るよう実施する。斜線の終りでFlying Change(駢歩の踏歩変換)をして反対方向に向って運動を続ける。これは多くの運動のコンビネーションの一例に過ぎない。

一度馬が二蹄跡の巻乗りを安心して正しいリズムで実施することを学んだならば、円周を徐々に短縮し、要求する直径に達するまでにすることができる。真のPirouetteでは馬が単に回転するのではなく、確実に駢歩の踏歩を持続するものである。



The nearly square volte will help to establish the control of direction.
 (a) starting with canter in renvers position
 (b) change-over to canter in travers position (c)
 (d) rounding off the corners and gradual reduction of the volte to a normal size volte (e) on two tracks (compare (f) normal position of the horse on a volte).



このような漸進的な準備作業をしないで Pirouette を実施することは、予備的の調教をしないで 2 m の高さの Wall (壁) を飛越するようなものである。障害飛越の時の失敗は眼に見えたり、音が聴えたりするけれども、Pirouette の失敗は門外漢には何も感ぜられない。騎手にも見えないし、関節の音などは聴えないので、その運動が単に一点の上で回転(軸として回る)するだけのいい加減の Pirouette 類似の運動で、正しい優美で弾力のある軽快な真の Pirouette とは似てもつかないものであることに気付かないで居るのである。

上記の手順に従えば全体の作業を通して、馬は後軀を地上に固着して一点を回ることができないことを見出すであろう。馬は駢歩を続けなければならない。これが最も重要なことである。

もし調教が不十分な馬に一点上の Pirouette を要求すれば、習性を超えて騎手の要求する扶助に従って動くけれども、実際は何をして良いか解らない。疲労を伴う困難な運動を自分で力をセーブして駢歩で上手にくるっと回することを知らない。良い Pirouette は完全に一点上では行われぬ。常歩での Pirouette (後肢旋回) または Piaffe の様に Canter Pirouette (駢歩の後肢旋回) は、それが僅か 1 cm であっても常に地上を前進する。それで騎手は Pirouette の間中駢歩運動を持續し、後肢で円を描く様にすることを考えなければならない。たとえその円が最終的に要求される円よりも小さくないとしても。

Canter Pirouette の騎手の扶助は後肢旋回又は常歩の Pirouette に必要とする扶助に似た感じがする。唯異なる点は全回転の実施中駢歩を持續することである。

駢歩の Pirouette を実施する地点の前で数歩の収縮駢歩をする場合、その収縮の度合は一層強めなければならない。通常の短縮駢歩の歩幅は Pirouette の回転の円の直径には長過ぎる。また運動の開始に当って急な Half-half (半停止) をすることは馬のリズムを無くする。

この関係を明確にする為には真の駢歩の Pirouette の歩幅を、収縮常歩、常歩の Pirouette、収縮歩、Piaffe 夫々の歩幅と比較すればよい。

駢歩の Pirouette で後肢が直径 1 m で回ると仮定すれば後肢で画く円周は約 3 m になる。もしこれを 6 歩で回るとすると後肢の一步の stride (歩幅) は 50 cm の幅になる。もし直径を 0.5 m にすると後肢の各 stride は 25 cm になる。またもし同じ直径で Pirouette をする場合 8 歩の strides で行くとすれば、6 歩の strides で行う場合よりも歩幅を一層短縮することが要求される。(対称のとれた Pirouette をする場合、その歩数は偶数で成り立つことが一般に認められている)。

乱れの無い駢歩のリズムを保ち乍ら行う、このような極端な収縮を馬に教えることは非常に難しい。これは Piaffe に於て前進の無い正しい踏歩をする収縮に似ている。高度の収縮の下で行う Pirouette と Piaffe ではその跳躍と歩調は共通していて、何れも非常に大きい推進力(伸張と混同しないように)の下に行われる。

Pirouette の開始には外方手綱による明確な半停止を行うべきである。そして馬は正常の駢歩のリズムで 6 歩か 8 歩の stride で小さい円運動をしなければならない。また前肢の tempo は後肢の tempo と合わなければならない。外方の手綱は内方の脚と共に各々の stride を調節し、どの stride からでも前進(直進)ができるようにしなければならない。このようにすれば馬が自分勝手に回転することや、最後の stride の後に尚回転を続けるのを防ぐことができる。

騎手の騎座には特別の注意を払う必要がある。中央の座骨は前進させる位置で、特に内方の座骨は馬の各 stride を規制する。騎手の脚は回転の歩調 (gait) を支えることに関わるが、手綱は gait を支えることはできない。それで駢歩の strides を推進 (promote) するのは騎座に委せられる。座骨による推進の扶助を止めると駢歩は直ちのためらいがちになる。回転の終りに再び外方の手綱で半停止を行う。両脚は殆ど同等に使い、座骨で馬に要求する方向に進むように圧す。駢歩の歩幅を直ぐに普通の歩幅に戻し、短縮駢歩の歩調に戻すようにする。Pirouette をした後、数歩の駢歩をして flying Change をすることが FEI level で要求されるが、その場合もしも騎手が短い中間の伸張 (stretch) で推進しなければ踏歩変換はうまくできない。(不整になる)。

駢歩の巻乗りと同様に Pirouette に於ても前進氣勢が失われるが、目立って down することは大きな欠点である。最も悪いのは駢歩の崩壊である。馬に要求された歩様でないので Bad に近い判定がなされる。Pirouette の回転が適当な大きさであれば幾分大きくても駢歩で行なわれた方が高い点がつけられる。

不整の Pirouette では見苦しい図形が画かれる。後肢は殆んど一点から動かないで泥の中に刺ったようになり、前肢は挙揚され空中で回転して下される、このようなことが直進を要求されるまで繰返される。この様になる理由は、小さな巻乗りを二踏跡で行う準備調教が行われていない為に起るのである。過剰な収縮と、騎手の後方への姿勢によって後軀が過重になり、体重を適当に支えられない為である。誇張された高揚された stride は騎手の技術的の名声に対する評価を妨げることになる。余りに多い歩数、rhythm が余り早かったり、遅かったり (throwing the horse around in pirouette) することも演技の欠点である。tempo が不整になって遅いのと速い stride を繰返して続けるよりも寧ろ停まった方がましである。

次に馬体の体重の配分に注意をする必要がある。不十分な収縮で前肢で回るような Pirouette は後肢の屈曲を目的とする Pirouette の馬場馬術としての要求に反するので評価されない。また前肢を余りに高く揚げるのは背の活動を妨げるので欠点と見做される。少ない energy で後軀の弾発が見られても、跳躍や空持ちの期間に欠けているものも欠点である。

Pirouette において騎手が単に手綱の扶助で側方効果を強制する傾向は防ぐべきである。これは単に前肢の回転を援けるのであって、騎座と低い脚の扶助が最も効果的であることを知らない為に起る。馬を spot に保とうとして前進運動を拒止しようとして手綱の扶助を強く使うことは駢歩の弾発を破壊する。後肢は地上を離れることなしに馬の前進氣勢を減少するために、手に抵抗して立ち上るか後方に倒れることになる。

Piaffe に於て手による強い対抗の扶助が効かないように、Pirouette に於ても手は各 stride 毎に譲らなければいけない。(柔軟でなければならない)寧ろ軽い Contact が十分な推進をもたらすのである。

誇張された体重の扶助も馬の balance を乱す、訓練の不足を力で代替することはできない。

Pirouette は後軀で traverse-like (腰を内へに似た) の回転をするのであるから、準備調教の時から馬に縦方向の屈曲をすることと、完全に回転する間、極く僅かに馬体を内方に保たなければならないことを教えないといけない。そうしないと特に Pirouette の終りの方で後軀が倒れるとか肢を交叉するか回転の終りに跳ねる様な危険がある。

次に実際に二蹄跡とする駢歩運動と half-pass とを組合せてやる場合馬場の何処で実施すれば良いか、二蹄跡とする半巻きや巻乗りの乗り方、turn をする場所等について記されている。

半ピルーエットを3～4歩の strides でやる練習をする。もし収縮と縦方向の屈曲が不十分な場合には巻乗りをする。Prix St. George の課目にある様に対角線の出発点から腰を内へで進み半ピルーエットをして腰を内へで蹄跡に戻る方法や、馬場の半分を使って長い蹄跡に入る前一馬身のところで半ピルーエットやる方法は柵を利用し、前進氣勢の旺盛な馬には非常に良い方法である。

磨かれたWhole pirouette (全ピルーエット) を望む騎手は一段階で Pirouette から全 Pirouette に進まないで、寧ろ中間に $\frac{3}{4}$ Pirouette (270° 回転) を実施した方がよい。腰を外へ (Renvers) の駢歩を馬場の長い蹄跡で行い、次の偶角で少し収縮を強め、外方に $\frac{3}{4}$ Pirouette で回転して、次の偶角に向かって進み次に移る。

以上の様な練習の最高点で馬場の対角線上で完全な Pirouettes ができるようになり、最後に中心線上でやれるようになる。特に注目すべき顕著な問題なしにやれるようになる。最初に後肢によって画かれる小さな半円は進行線からそれで次に再び戻ってくる。

この Canter Pirouette がよくできるように訓練された馬は暫々騎乗者を騙して double Pirouette または繰返して Pirouette をやることがある。これは確かに馬術として印象的ではあるが、これは過大評価すべきではない。騎乗者の手練と訓練、馬場馬術の稽古は既に所謂芸能事業から余り離れていないと云う世評があるが、馬術はサーカスの領分に流れるべきものでなく、固定(確立)された古典的の境界に停るべきである。

以上が Prof. Alfred Knopfhart 氏の説の大要ですが、省略したところもあって誠に要領を得ない点があります。更にまた自分で実際にやって見る段階ではありませんので、勉強だけで実験して居りませんので何れ実際試してから自分の体験を加えて訂正したいと考えています。

馬術用品専門店
ジャパングランプリ
東京都世田谷区桜3丁目2-13
TEL (03) 426-9985

前 主 将 か ら

服 部 雅 史

後輩に言いたい事は、「自分の良いと思うように思いっきりやりなさい」として終りたいところだが、それだけでは余りにも無責任で一人よがりのような気がするので、僭越ながらやはり何か書かねばなるまい。

自分が主将になったとき、一番思ったことは、このクラブの団体意識をもっと高めたい、ということであった。各個騎乗ということが、個人レベルの考え方の原因となり、また結果でもあるというこの悪循環をなんとかしなければ、という思いの一方で、だからといって乗り手の技術、馬の調教段階を考え、また、馬の調教というものの性質上、乗り手をころころ変える訳にもいかないというジレンマをどう解決するかというのが大きな問題であった。

団体としてのクラブの馬の調教者に求められるべき姿というのは、愛馬を心から愛するけれども、しかしいつにいつ自分が乗れなくなるかわからない、という状況の中にあると思う。自分が乗れなくなると言うのは、即ちその馬の命を見放したと同じ事だと考えるべきである。それを皆が理解し納得した上で、それでも今の騎手が本当に妥当かどうかお互いに常に監視し合って、非情なまでもミーティングでぶつけあうべきである。これはシビアで苦しいことだ。しかし、慣れ合いの表面的な人間関係に固守して大きな甘えを許しては先は明るくないだろう。

北大馬術部の目指すものは何か。試合で勝つ強いクラブになる事か。或は、一頭の馬を心から愛して悲喜を共にする友を育むところか。或は、馬を通しての部員相互の和をつくる場か。もちろん、これらは同時に成立し得ないものでは全くないし、また、これらの全てを持ち合わせたクラブが理想であることはいうまでもない。しかし、それにもかかわらず、最上級生達には、これらの選択について考えなければならない日が訪れるかも知れない。クラブの運営方法に正解はない。しかし、巧みなリーダーシップによってうまく導かれなければ決して良くはならないだろう。

クラブにとって一番大切なのは雰囲気だと思う。その雰囲気作りの大半は主将に任されているといっただけで良いだろう。時には、悲しいときにも笑わなければなるまい。言いたくないことを言わねばならず、言いたい事を言えない時もあるだろう。しかし、我々のクラブは、雰囲気次第で120%のパワーが発揮できるのだと信ずる。

クラブは馬よりまず部員である。部員あってのクラブである。部員がやる気に燃えていれば、必ずクラブは良くなる。反対に馬がいくら良くても、部員がだめなら決してクラブは良くはならない。当り前の事のようにだが、忘れてしまいがちなことでもある。

自分が主将としてやってきた1年間、自らの能力の無さから多くの人たちに迷惑をかけてしまった。小池部長、岡田監督はもとより、どうしたらよいか途方に暮れているとき、こころよく相談にのっていただいたOBの方々には、本当に色々お世話になった。そして何より、ついて来てくれた後輩達には心から感謝している。

北大馬術部に今後なお一層の栄光あらんことを祈りつつ。

現在のクラブの状況

— 主 将 中 野 兼 —

< 起 >

前主将の残してくれた功績を胸に、去年の九月より我々はクラブ運営にあたっている。我々四年目は、二年前にドンホッパー、北耀、北皇子の三頭での数年ぶりの全日学団体出場を、新入部員として見た代である。低迷を続けてきた北大馬術部に、そして下級生に、その実績を示してくれた。その後二年という月日の中で、我々は常に心に、『大きな使命』を背負いながら、クラブという流れの渦中で生き、その変化を見てきた。馬の入換も、旧世代から新世代へと。さらに来年の夏に控えた北海道で開かれる64年はまなす国体に向けての道内馬術界の盛り上がり。刻々と移り行く状況と変化の中で、我々は、何度か、学生としての立場、そして学生馬術のあり方を本質的なところから、見失いかげ、つぶれかかった。(クラブバイトの増加、部馬の増加と部員の減少等)こうした危機も、半沢先生、岡田監督を初めとするたくさんのOBの方々からの様々な御助言、御援助を頂き、何とか脱してきた。一体、このような状況に陥いった原因は何であるのか。我々は真剣に考えなければならない。そして伝えなければならない。二度と同じ誤ちを繰り返さないためにも。

< 承 >

さて、ここ数年、全日学において、関東の私立大学が各種目の成績上位にひしめきあう中で、我々北大がその中にくい込むために、どのような練習をすべきなのか？そしてどのようなクラブにするべきなのか？おぼろげながらも、その姿ははっきりと見えてきたと思う。服部前主将のとっていたクラブの指針によって、我々の前にはそのレールが軌かれた。

もう一度、去年一年間の練習体系をここで再確認し、改善すべき点、不十分な点も考えつつ、以下にあげてみる。

まず毎日の練習において、騎手のレベル、馬の調教程度を考えた内容で、騎手が号令者の意図していることを馬に理解させる部班運動をその中心とする。

そして部班そのものを馬の調教という問題に含め、下級生が乗っている時でも、調教の一端を担っていると考えること。

又上級生の乗っている馬にしても、乗りかわりや、日頃からお互いの騎乗を注意して察することなどによって、上級生同士でも、お互いの馬の調教過程に関心をもつこと。つまり一頭の馬に固執して自己満足的な練習に陥らない様にする。そして下級生においては、上級生の騎乗をもっとよく察することである。一体、上級生は何を馬に要求しているのか？それに伴う馬の動きはどのようなのか？ぼけっと見ても得られるものは何もない。他人の騎乗を察て、理解できる目をはやく養えるように努めなくてはならない。下級生が上級生を見る目こそ、上級生にとって、大きな刺激になっているのだということも考えて。

とにかく、部員全員の考えの中に、互いの切磋琢磨ということが無意識のうちに存在できる様な練習

をしなくてはならないと思う。つまり学生馬術の特徴でもある馬の組織的な調教を日々の練習の基本的考え方に取り入れることによって、我々の前に道は開けるはずである。

< 転 >

ところで、我々が北大馬術部の作りあげてきた歴史の過程を顧みる時、まず心に留めておかなければいけないことは、クラブの流れとは決して惰性で築き上げられたものではないということ。そして、今我々が、常に注意を払わなければいけないことは日々の活動が惰性であってはならないということである。つまり我々は、クラブの現状というものをしっかりと把握した上で、新たな創造を少しずつ取り入れ、その方向を修正し、目標に到達しなければならない。しかし目標ばかりに気をとられ、現状の把握を愚かかにしては決して、進歩も、維持もない。常にこのことを最上級生である我々が戒めなければならないのだ。そして、その上で部員一人一人が、団体という概念に甘んじることなく、自分なりのクラブ内での存在・役割をはっきり、見出し、部活動を行なえば、協調というものが生まれ、一体感というのを感じ得るのではないか？先輩と後輩の関係の中で、そして同輩同士で、今一度『北大馬術部という組織をどうしたら後退させることなく発展させられるか？』君が部の主将であるという仮定のもとで、いろいろと考え話し合ってほしい。

< 結 >

昨年、夏、北大は2年ぶりに全日学二回走行に団体出場の権利をとることができ、馬事公苑においても、全馬がゴールを切り、団体八位という成績を収めた。馬の顔ぶれも変わり、もはや、この成績が、まぐれなどと考える暇などない。前進あるのみである。そしてその前進に費やす我々の努力、気迫は、今迄以上のものがなくてはならない。しかし恐れることでは決してない。我々が作り出すページの前にはたくさん諸先輩方の栄光と失敗の記録があり、そしてOBの方々の御助言・御声援がある。これらも前進の糧として我々は胸を張って、力一杯、精一杯、活動しなければいけない。我々の夢に向かって。

— 副 将 高 野 薫 —

昨年、全日学二走に団体出場した。

北日学の二走において確かに団体をねらっていて、当然であるが選手も見守る部員もみんな緊張していた。しかし少し厳しい見方をすると、この団体出場権は、ねらって取ったというよりは終わってみたら三頭権利を取っていた、という感じではないだろうか。そして悪いことに、二走以上に団体をねらっていた総合において一頭しか権利を取ることが出来なかったにもかかわらず、二走の成績に満足し、問題視されなかった。二走と総合の順序が逆ならば少しは変わっていたかもしれないが、原因はそれだけではないだろう。はっきりした形で表われたのは全日学である。総合で団体二位になった畜大と二走で凡記録に終わった北大の違いとして。

どうも雰囲気殺伐としているような気はしないだろうか。馬のチーフのみが頑張ってもクラブは強くならない。調教のみの問題ではなく部の運営においても同じである。実際に代表となるのは幹部であっても、部を構成するのは下級生を含めた部員全員である。特に僕等上級生は自分達が先走りをしないうちに注意すべきだろう。チーフ一人の考えによる調教には盲点があるし限界が近い。又、下級生にお

いても、部や馬の状態を知ろうとしないのは甘えである。自ら調教に参加しようとしなければライダーとしての成長も鈍る。下級生を含めた部員全員がそれぞれの馬に対する今シーズンの期待を持って、騎乗ぶりを見ていかねばならない。「このままで本当に大丈夫なのだろうか」「この調子なら……」といった目は自と騎手へのプレッシャーとなってくるが、そのプレッシャーが日々の練習を充実したものとしてくれるのではないだろうか。試合の時には負担となるだろうが、それに打ち勝たねばならない。打ち勝つと見込まれてチーフとなったのであるから。

自分も調教の一部を担っているという意識があれば、先輩の成功、失敗は下級生にとって他人事ではない。こういった先輩後輩間、同輩同士、まずはとにかく互に関心を持つところから一体感が生まれる第一歩が始まるのではないだろうか。

— 主 務 金 田 克 己 —

昨年9月に中野より主務を引継ぎました。引き継いだ当初はあまりの仕事の多様さにとまどい、ただでさえ学校の忙しさに悲鳴を上げているのにどうなることかと思いましたが、今では資料の整理も一応終わらし、また事務的な仕事は副務に頼りきりながらも、やっと落ちついてきました。現在、部の運営に関してはそのほとんどを3年生総勢5人毎夜頭を寄せあって決定しています。ここではそこで話し合われた事の中の主務に関する事項をもとにして自分なりにまとめてみたいと思います。

〇〇Bとのこと

〇〇Bとの関係についてはその理想像が見えていないのが現状です。しかし、年に1度の部報（それもかなり時期はずれの…）と、形だけの年賀状、あとは役員交代の挨拶状を送り、〇〇Bの方からは後援会を通してお金の援助をして頂くだけという多くの〇〇B（勿論ここに含まれない〇〇Bの方は多勢いらっしゃいますが）との関係は寂しすぎると思います。それに昨年〇〇Bの方から手を差し伸べて頂いたにもかかわらず、結果的には事の重大さをまるで把握していなかった現役（入院中の前主将の代理となった私が張本人）の態度があやふやだったために、一時的な金銭的援助という形に留まってしまったということもあり、代が変わるまでには何か改善のきっかけになるものを残していきたいというのも本心です。

具体的には、今はこちらからの連絡を量的にも質的にも密にし、そして〇〇Bの言葉を聞きとれる機会を造っていくことで活性化していくしかないと思っています。今後は“金に困った時だけ連絡してきて”と言われることだけは避けたいと思います。また現役の方で部の活動の基調となるものを確立していればどんな意見でもそれをいい方へと活用していけることと思います。

11月に〇〇Bに送付した手紙をきっかけに多くの御意見が寄せられました。多くの激励の言葉に奮起するとともに、“〇〇Bは口を出さずに金だけ出していければいい”他、考えさせられるものもありました。どのお手紙もこれからの活動の糧とすべく活用させていただきます。返送くださいました〇〇Bの方々どうもありがとうございました。またどんな小さな事でも御一筆頂けると非常に嬉しく思います。

現在、部報の住所録の空白を埋めることと並行して、シーズン中忙しい時にも連絡しやすくなる様にと住所録をワープロに入れる作業を進めています。また、折からの財政難、1つ1つの郵便物を大切にということで、時候の挨拶状も少し考える必要を感じています。今年の年賀状はいかがだったでしょう

か。手が回らなかったことにその重要さの認識が薄れかけている部報の問題（これだけ重要な物の編集を1年生に任せきりにするという自体、問題があると思います。）、準備不足で内輪で終わってしまったOB戦があります。これらは来年、今の副務らが中心となつてうまくやってくれることと期待しています。

○学生部のこと

馬術部は活動資金のほとんどを自分達で調達しているという自信からか学生部を軽く見、また学生部は学生部で馬術部に対する信用を全く持たず、勝手にやれという感じがありました。原因はさておき、濃厚飼料の援助もままならず、電球その他厩舎の備品に関してと、年一度馬場に砂を入れてもらうくらいしか援助されていませんでした。それが、ドイツ・ステューベン製総合鞍8騎をいただいたのを始めだんだんと関係改善の方向へ向かってきています。また、昨年春学生部課外活動助成係の係長が新しい方となりました。これを機に、信用をとりもどさんと努力しています。原則的には物品援助のみなのですが、七大戦、インカレ（全日学）の足代などは援助されるそうです。（いつから利用しない様になったかわかりませんが、古い部報を見ると載っているのに、学生部から聞いて初めて知りました。）また、老朽化したボロ場は今期の予算に組み込むとのこと。何はともあれ頻りに話をし、無理だと思うこと、些細なことでもぶつけることの大切さが最近よくわかってきました。義務さえきちんと果していれば一施設利用の日誌は週ごとに提出することを約束しました—学生部にとって施設の状況を把握することも仕事の1つなのですから…。

いくら1人の人間がやった事でも相手からみれば、馬術部がやったことなのです。また1人の人間がつきあう期間はわずかかもしれないですけど、部としてはずっとつきあっていく相手なのです。怠惰からくる信用喪失は言うに及ばず、感情による亀裂なども絶対に避けていくべきだと考えています。

○財政について

昨年は、バイトを減らすという方針の基、冬の朝日バイト、夏の中央競馬に現金収入のためのバイトを絞り、その他に長岡さん、乾草バイト、モモセさんは例年通りおこないました。一昨年と比較すると多い部員数も手伝って大部個人の負担は軽減した感がありました。それでも部の財政が苦しくなかったのは、国体強化指定馬の強化費を筆頭にいろいろ予算外の金が入ったことと、主管した試合による収入が大きかったためです。

今年度は馬匹は9頭を維持することが決定しています。これは、人間の数が多いからといって馬の頭数を増しその分をバイトを増すことで補なうという考え方が、金が足りなければバイトを増しさえすればいいという考え方に発展する恐れがあるということと、もし試合を主管しない場合、団体強化指定馬強化費などの不確定要素を予算からはずして概算すると、9頭繁養するのも赤字となってしまうことによります。これは今年北日が東北大学でおこなわれること、セレクションの会場が蒲河にうつるため、仮厩建での収入が期待できないことなどが上げられますが、何よりも昨年の幸運だったことを物語っています。基本的に昨年の方針は世襲しますが、対策として、各の朝日バイト10万円増、夏の競馬場バイト30万円増を考えています。これは昨年と比較した場合、試合の準備がないことなどから負担としてはあまり変わらないと思われます。

道自馬を主管した場合、昨年ほどでないにしろ充分余裕が持てる収入が見込まれますが、北星乗馬ク

ラブが名のりを上げていること、大切な時期に主力となる選手つまり上級生にどうしても負担が集中してしまうなどの問題点と、競技の上で有利であることや、来年のことなど考えあわせて今の2年生も含めて慎重に決定すべき事項として残されています。

一方支出を抑えることについて、車両管理費とガソリン代を抑えるためにノートを作り責任の所存を表らかにすることによって経費の節約とならないか、電話代に関しても私用電話による出費を防ぐためノートを作るなどの試策を試みています。またこれから文化、薬品各役職に対しても浪費を抑えるべく対策を施すつもりです。

以上、半分は未来の上級生のために、そして半分はこれからやっていく自分のために書いたような文章になってしまいました。最後になりましたが、OB諸兄、関係者の皆様、これからもいろいろ御迷惑をかけることと思いますが、御指導、御支援のほど宜しくお願い致します。

追伸

3月の北日本幹事会に於て北日の会場の変更が発表されました。これで少し余裕ができたこととなりますが、S64年には収入の大半を占める競馬場の開催が半期になるということで、かなり苦しい財政となることが予想されます。

— 馬 匹 加 藤 ゆうこ —

昨年度に引き続き、今年も馬匹をすることになりました。『馬匹が馬体管理の尻ぬぐいであってはならない』というのは、諸先輩の言っておられた事で、私も同感です。そのために、昨年度は、月1回のペースで、馬体管理に役立つような内容をプリントにして配布する事を行っていました。今年、人数の関係上、プリント配布を定期的に行う事はやめましたが、注意喚起は常に心がけて行こうと思います。一頭一頭の馬体管理責任者とも、なるべく話し合い、全員が、全馬に目を向けられるような環境を作っていきたいと考えています。

部馬達が、心身共に健康で、ハードな練習も気持ちよく受け入れてくれるようにするのは、私達人間です。こちらの精神状態を気遣うことなど、馬達がするはずもありませんから、私達が彼ら彼女らに合わせてやるべきだと思います。部馬の馬添いが悪い原因が、私達にないとは言い切れないと思うのです。

馬体そのものに、そして馬達を取り巻く全ての環境に、充分注意して行くべきだと考えます。またそのためにも、部員の作り出す雰囲気にも注意してほしいと思います。

小池先生、OBの皆様には、これからも御指導して頂ければと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

— 飼 料 前 田 武 己 —

飼料代はクラブの予算のうち大きな割合を占めています。いままでも先輩方が触れていることではありますが、できるだけ良いものをできるだけ安く入手し、そしてそれをいかに能率的に給与していくか

が大きな問題となります。

現在、燕麦が1袋(30kg)あたり1,900円、麩が同(25kg)あたり850円、ヘイキューブが45kgで2,000円前後と、近年の円高のため、価格は比較的安い所で安定しています。乾草については、馬の頭数が9頭と少なくなったことに対し、ほぼ例年と同じ量を確保したことにより、今年は充分に与えることができると思います。

夏期は主に構内で草刈りをして馬に与えるのですが、昨年は近年稀にみるアワヨトウの大量発生により、学校側と草刈りのイタチごっことなり、苦勞しましたが、部員数が多かったのでさほど馬には影響を与えずにすみました。そして何より乾草の値段に影響しなかったのはラッキーでした。

飼料の効率的給与については、リン-カルシウムの比率をはじめ全般的に計算をしてみたいと思っております。バランスの悪い飼料給与は長い間には重大な疾病を引き起こすものとなるので、それを未前に防ぐべく細かな点までチェックを入れてみたいと思います。

以上、現在の飼料の状況とこの1年の抱負を述べましたが、なにぶん勉強不足で、もし良い本などがありましたら教えていただければ幸いです。

— 作 業 石 川 信 行 —

9月の役員交代で作業になりましたが、中野兄や高野兄に言われて初めて気付く事が多く、作業隊長としてはまだまだ至らない点が多いことを反省しています。現在クラブには総勢26名、去年の同じ時期に比べ倍近い人数がいるわけで、例えば除雪作業一つとっても、去年よりも広い面積を短時間で終わらせることができます。従って、如何に効率的な人割りをするか、という歴代作業の中では贅沢ともいえる悩みも出てきます。大人数の問題点は、どうしても一人一人の作業に対する自覚が今一つ欠けること、そして、作業の個人間格差が出てきてしまうことです。

今後の課題としては、部員の貴重な時間を奪ってしまう休日の全員作業をできるだけなくすために、部員一人一人に、普段から細かい点を意識して後には事を溜めないように促していくことです。

未熟ではありますが、一年間よろしくお願いします。

会計報告 昭和62年1月～12月

収 入

		年小計	計
部 費		343,000	343,000
ア ル バ イ ト	札幌競馬場	1,065,540	2,186,400
	朝日新聞社	204,860	
	仮厩建て	150,000	
	その他	766,000	
補 助	学馬連より飼育補助	940,000	2,667,694
	道馬連より国体強化馬その他	1,137,754	
	後援会より	364,990	
	輸送補助	147,200	
	寄付金その他	77,750	
滞 納 金		1,298,949	1,298,949
私 用 電 話 料		9,882	9,882
企 画	道 自 馬	561,203	1,379,707
	半 沢 杯	96,210	
	教 養 祭	122,304	
	そ の 他	599,990	
そ の 他		454,749	454,749
合 計			8,340,381

支 出

		年 計
飼 料		1,031,340
蹄 鉄		1,261,100
薬 品		266,590
輸 送 費	ガ ソ リ ン	184,081
	遠征・馬運車代	1,197,860
	車両維持費	696,890
作 業		143,410
馬 具 ・ 備 品		95,650
文 化		267,530
乗馬登録料・連盟会費等		273,000
部 報		200,000
電 話 料 金		167,675
事 務 費		125,808
雑 費		375,001
た て か え	エ ン ト リ ー 料	434,000
	そ の 他	1,537,993
合 計		8,257,928

1988. 1. 20

会 計 大 歳 正 明

昭和62年度 行事報告

- 3月
29日 対東北大学定期戦(於東北大)
- 4月
5、6日 第26回七大戦(於東北大)
13日～19日 馬術講習会
馬のいろはも知らずに過ごした1週間
- 5月
5日 第15回半沢杯記念馬術大会(於北大)
7日～10日 21日～24日 新歓合宿
10日 お花見コンパ
A嬢いわく、「桜があんまりきれいだから、うち、帰らへん。」
16、17日 第3回選考審査会(於碧雲C)
24日 新歓コンパ
OBのN氏いわく、「向こうの方にいいのがあるナ。」
29日 北姫号、北紫雲号離厩
31日 北日本学生馬術選手権大会(於畜大)
- 6月
10日 リンドクラウン号入厩
27、28日 第22回北海道自馬馬術大会
(於碧雲C)
- 7月
18、19日 第12回北海道地区馬術大会
(公認)(於北星RC)
29日 北楡号入厩
OBの水野さんと懇意の栗東の坂本さんの紹介で競馬会より入厩
- 8月
7日～10日 第23回北日本学生馬術大会
(於北里大)
14日～20日 日高合宿
きれいな空気と大地の中で若さ発散!
- 30、31日 第34回北海道馬術大会
第42回北海道地区予選(於畜大)
- 9月
6日 札幌市民体育大会(於北星RC)
フロンティア牧場祭
スーパーボーイ号離厩
10日 役員交代コンパ
12日 お返しコンパ
普段はたくましい男の子の艶姿に先輩もとても満足。幾多の伝説が生まれました。ずっと女の子でいて欲しかったな一みたいな。
18日～21日 第23回東日本馬術大会
(於小淵沢国体記念馬場)
21日 リンドクラウン号離厩
函館の東山乗馬クラブへ
27日 北海道馬場馬術選手権大会(石狩RC)
29日～10月4日 全日本学生馬術大会
(於馬事公苑)
- 10月
10、11日 第4回44国体選考審査会(於浦河)
10日 駅伝大会
キュロット、北大ジャージ、長靴、狐騎帽、鞭…みごとな馬装で走ったね。
25日 OB対抗戦
- 11月
1日 山下杯(於酪農大)
14、15日 FMC
はじめはシブシブ、帰ってニッコリ、よかったネ。やっぱり食わずぎらいはいけないネ。
- 12月
5、6日 卓球大会
かっこよかったね。馬術以外でもおまかせよ。例年陰気だという大会を華やかにしたのは何をかくそう私達。
12日 馬術講習会

18日 忘年会

1年のしめくくり。気合いの入ったかくし芸?!

23日 もちつき

隠れた才能発覚。愛媛娘に新潟男。本当においしかったね。

25日～31日 冬合宿(前半)

寒かった、つらかった。でも雪中サッカーは最高?! 佐代ちゃん VS 前田兄は伝説に残るだろう……へへ。

○1月

2日 初乗り

恒例の北海道神宮での御祓。今年も1年間、よい年でありますように。

3日～9日 冬合宿(後半)

暗黒の日々……。あの西田の笑い声もう聞こえない。その分コンパで爆発?! ガラス窓がドンゴロス窓にと変貌。

30日 ラグビー大会

あんなにはりきっていたのに身も心もズタズタに……。

○2月

5日 雪まつり外乗

国民より一足お先に。

○3月

8日 追コン

服部兄、本当にお疲れ様でした。

17日 北大馬術部々長歓送迎会

小池部長、11年間どうもありがとうございました。斎藤新部長、これからどうぞよろしくお願ひします。



リンドクラウン号離職式

昭和 62 年度 戦績報告

★対東北大定期戦（於東北大 3月29日）

緊張の中の開会式。前触れもなく、いきなり選手宣誓の指名を受けたN。「宣誓、我々は…」言い出したとたん、突然沈黙がおとづれた。彼は悟った。大罨蹙（だいひんしゅく）をした…と。華々しい今シーズンののはじまりである。

使用馬匹〈貸与馬〉……尾白鷺、杜貴、杜舞姫、滝右衛門、阿久里

選 手 北 大 ……石川、友久、小嶋、森、仲村

東北大 ……石川、中村、西山、兼松、松坂

戦 績 準優勝 最優秀選手……友久

★七帝戦（於東北大 4月5、6日）

北大選手……中野、加藤、高野

戦 績……優 勝 最優秀選手……高野

★国体馬術競技強化指定馬選考審査会（於 モモセファーム 5月16、17日）

〈総合（複合）馬術競技〉					馬場得点	障碍減点
1位	中野	北 皇 子	北 大 (3)	297	0	
2位	布施	タイストーム	札幌 R C	290	-13.25	
3位	村田	柏 神	帯 畜 大	311	-17.75	
	高野	北 銀	北 大 (3)	300	失 権	

★第15回太妻杯・半澤杯・河田杯記念馬術大会（於北大 5月5日）

雨有り、風有り、ついでに雪有り。そしてほんのちょっとだけ、申し分けなさそうにでてくるおてんとさん……という天候の中、物見台にいた人々は毛布にくるまり震えていた。

が、ドン・ホッパー、服部兄の優勝で、心の中は一気に快晴！

でも、やっぱり体は寒かったのです。

<複合馬術競技>（太妻杯）

				馬場減点	障害減点	総減点
1位	久保	パッシングハヤテ	札幌競馬場	-118.00	-0.5	-118.5
2位	佐藤	カナディルホース	彗星乗馬会	-114.67	-5	-119.67
3位	掛川	騾関光	酪農大	-125.67	-0.75	-126.42
4位	服部	ドン・ホッパー	北大(4)	-128.00	0	-128.00
9位	高野	北銀	北大(3)	-154.00	0	-154.00
11位	中野	北皇子	北大(3)	-158.67	0	-158.67
13位	高野	ノエル	北大(3)	-145.67	-14.5	-160.17
15位	金田	北紫雲	北大(3)	-159.67	-14.5	-174.17
	大歳	北姫	北大(3)	-175.33	失権	

<中障害飛越競技>（半沢杯）

				Time	障害減点	総減点
1位	服部	ドン・ホッパー	北大(4)	1.05"38	0	0
2位	佐藤	ベンハーレ	彗星乗馬会	1.08"23	0	0
3位	斉藤	J・J	石狩RC	1.12"22	0	-0.25
	中野	北皇子	北大(3)	失権		

<小障害飛越競技>（河田杯）

				Time	障害減点	総減点
1位	佐伯	マドラス	北星RC	43"79	0	0
2位	友久	ドン・ホッパー	北大(2)	43"07	0	0
3位	鈴木	ノースワンダー	ゼロライディング	42"85	0	0
4位	森	北皇子	北大(2)	41"82	0	0
9位	北川	艶飛	北大(3)	41"05	-4	-4

<新人新馬障害飛越競技>

				Time	障害減点	総減点
1位	浦野	ヘンリーシンボリ	北星RC	43"23	0	0
2位	川口	ボギーダール	札幌競馬場	44"13	0	-0.25
3位	大林	ノースワンダー	ゼロライディング	49"42	0	
	石川	北銀	北大(2)	失権		

★第22回北海道自馬馬術大会（於 モモセファーム 6月27、28日）

加藤姉の北玲号が第3級馬場馬術<婦人の部>にて四位と好成績。もはや障害だけの北大ではないことを実証。またその他の競技においても数々の好成績をおさめました。この日のために仮厩作りをはじめ、いろいろな作業をやりました。みなさんおつかれさまでした。

<第三級馬場馬術競技(婦人)>				得点	得点率
1位	鈴木	サクラプリンス	酪農大	358	49.72%
2位	増元	トカチムサシ	十勝柏友会	333	46.25%
3位	西岡	ウィンディ	十勝柏友会	332	46.11%
4位	加藤	北玲	北大(3)	325	45.14%

<総合馬場馬術競技>				得点	得点率
1位	佐藤	カナディルホース	彗星乗馬会	396	55%
2位	布施	ゼファー	札幌RC	373	51.81%
3位	安藤	雷雲	虫の会	340	47.22%
14位	中野	北皇子	北大(3)	293	40.69%
20位	高野	北銀	北大(3)	269	37.36%
22位	大歳	ドン・ホッパー	北大(3)	259	35.97%

<スピード&ハンディネス>				Time	減点
1位	中野	北皇子	北大(3)	1'02"61	1'02"61
2位	佐藤	カナディルホース	彗星乗馬会	1'05"21	1'05"21
3位	鴛田	柏星	帯畜大	58"22	1'05"22
	金田	ノエル	北大(3)	失権	

<L級競技(1部)>				減点	Jumpoff
1位	安田	コジロウ	帯広農業高校	0	22"98
2位	島田	マドラス	北星RC	0	24"55
3位	月岡	コジロウ	十勝柏友会	0	24"87
	大歳	北姫	北大(3)	失権	

<L級競技(2部)>				減	点	Jumpoff
1位	小松	柏	星	帯広農業高校	0	23"86
2位	高橋	飛	勝	帯広農業高校	0	26"46
3位	目黒	サム	シング	帯畜大	0	30"27
11位	石川	ノ	エル	北大(2)	-15.5	

<飛越回数競技>				合	計
1位	品田	コ	ジロウ	十勝柏友会	32
2位	谷	インター	スペシャル	北星RC	30
3位	中野	北	玲	北大(3)	28
"	布施	カリ	スタヒーロー	北星RC	28
"	長屋	ビク	トリーエース	札幌RC	28

<M級B競技>				減	点	Jumpoff
1位	武笠	フェ	ニックス	碧雲クラブ	0	31"39
2位	山田	ア	パッチエース	岩見沢RC	0	36"59(-3)
3位	佐藤	カナ	ディルホース	彗星乗馬会	0	28"01(-4)
	中野	北	皇子	北大(3)	失	権
	服部	ドン	・ホッパー	北大(4)	失	権

<新人障害飛越競技>				減	点	Time
1位	浦野	マ	ドラス	北星RC	0	61"72
2位	仲村	北	銀	北大(2)	0	61"52
3位	月岡	ト	カチムサシ	十勝柏友会	0	60"59

<M級C>				減	点	Jumpoff
1位	加藤	北	皇子	北大(3)	0	35"35(0)
2位	原	ト	カチムサシ	十勝柏友会	0	35"82(0)
3位	高野	北	銀	北大(3)	0	38"36
10位	加藤	北	玲	北大(3)	-9.25	
	金田	ノ	エル	北大(3)	失	権

★第12回馬術連盟公認北海道地区馬術大会（於 北星R.C. 7月18、19日）

待ちに待ったスプリングのデビュー戦/普段よりリラックスしてにこやかな服部兄と、何も考えていないのか、昨晚馬房を脱出し、ふすまをたらふく食べたスプリング。
たてがみもそろえて、準備万端!
さあ出番。「スプリ飛べよー」「がんばってー」の声におくられていざ出発。
七番単一落下、続いて八番のかまぼこで彼女は一瞬ためらいをみせた。「あまた……。」
誰もがそう思った。その時、場内にどよめきがおこった。やはり彼女は並の馬ではなかった。
生まれながらのパフォーマンス精神を持っていた。彼女は見事、かまぼこを、またいでしまったのである。

<第3級馬場馬術競技>				得点	Time
1位	安藤	シャングリラ	碧雲クラブ	389	7.04"
2位	山口	サクラプリンス	酪農大	364	7.25"
3位	小宮山	ループルスター	帯畜大	345	7.14"
5位	高野	北銀	北大(3)	327	6.41"
8位	中野	北皇子	北大(3)	308	7.15"
10位	金田	ノエル	北大(3)	293	7.22"

<標準中障害飛越競技>				Time	減点	Jump off
1位	布施	カリスタヒーロー	札幌光星高校	77"34	0	30"47
2位	山田	アパッチエース	岩見沢RC	76"58	0	32"65
3位	中野	北皇子	北大(3)	74"32	0	33"97
14位	加藤	北玲	北大(3)	73"79	-8	
	金田	ノエル	北大(3)	失権		
	高野	北銀	北大(3)	失権		

<中障害飛越選手権競技>				Time	減点	Jump off
1位	山田	アパッチエース	岩見沢RC	71"73	0	32"25(-0.1)
2位	布施	マドンナ	札幌光星高校	62"15	0	36"56(-0.2)
3位	長屋	マドラス	北星RC	60"61	0	35"99(-4.3)
5位	加藤	北玲	北大(3)	71"24	-4	
12位	中野	北皇子	北大(3)	76"41	-7.25	
	高野	北銀	北大(3)	失権		

<中障害スピード&ハンディネス>				Time
1位	布施	マドンナ	札幌光星高校	70" 42
2位	中野	北皇子	北大 (3)	70" 45
3位	斉藤	アールグレイ	石狩 R C	74" 63
18位	高野	北銀	北大 (3)	75" 42

<新馬障害飛越競技>				Time	減点
1位	布施	リュウコウキネン	札幌光星高校	80" 25	-2.25
2位	小内	フジオオヤマ	酪農大	80" 77	-2.25
3位	斉藤	ハッピーヒーロー	石狩 R C	78" 54	-5.75
4位	服部	北凜	北大 (4)	83" 82	-7

<小障害飛越競技>				Time	減点	Jump off
1位	佐伯	マドラス	北星 R C	65" 38	0	32"12(0)
2位	帰山	イブリース	浦河高校	60" 06	0	32"76(0)
3位	平井	柏星	帯畜大	69" 93	0	34"03(0)
5位	石川	北玲	北大 (2)	57" 73	0	29"94(-4)
	仲村	ノエル	北大 (2)	失権		

★三大学定期戦（於 帯畜大 4月29日）

服部監督とともに、北大精鋭の友久、石川の両選手は酪農選手団と一緒に畜大へと出発した。しかし畜大についてみると畜大も酪農も3選手を用意していたのであった。朝になっても試合方式が決まらず、結局試合直前になって上位2名戦にすることに決定。結果は服部監督のくじ運のおかげで優勝。昼食をとりながらの表彰式の後全員でのサッカー大会で三大戦は幕を閉じた。

使用馬匹<貸与馬>……柏星、柏稜、飛勝

選手 北大……友久、石川

酪農大……松下、大儀、竹島

帯畜大……近藤、小田切、鈴木

戦績 1位 北大 2位 酪農大 3位 帯畜大

★第23回北日本学生馬術大会（於 北里大 8月7日～10日）

一年目にとって初めての長期遠征で、北日学独特の雰囲気を感じることができた。
 二回走行では、北玲、北皇子、北銀の三頭が全日学の権利を得た。特に初出場ながら堂々三位となった北玲と加藤姉の頑張りが目を引いた。全日学団体出場の権利を得たのは二年ぶりのことである。一方総合では、ドン・ホッパーが惜しい失権、北銀が1点差で全日学の権利を逃すなど残念なことが重なった。
 試合後のレセプションでは異様な北日独特の盛り上がり恐怖を覚えた。ジムカーナでは服部兄の女装+人参キュロットといういでたちに会場が沸きに沸いた。

<障害飛越競技(二回走行)>

							第 一	第 二	
1位	上 山	カ ム イ	弘 前 大				0	0	} Jump off で順位決定
2位	鷺 田	柏	星 帯 畜 大				0	0	
3位	加 藤	北	玲 北 大 (3)				0	0	
5位	中 野	北 皇 子	北 大 (3)				-7	0	-7
7位	高 野	北 銀	北 大 (3)				-8	-4	-12
	服 部	ドン・ホッパー	北 大 (4)				失 権		

<総合馬術競技>

							調 教 減	耐 久	余 力
1位	鷺 田	柏	星 帯 畜 大				-199 $\frac{1}{3}$	0	0
2位	加 藤	北	玲 北 大 (3)				-194 $\frac{2}{3}$	-20	0
3位	上 山	カ ム イ	弘 前 大				-241	0	0
8位	高 野	北 銀	北 大 (3)				-205 $\frac{2}{3}$	-40	0
	服 部	ドン・ホッパー	北 大 (3)				-199 $\frac{2}{3}$	失 権	0
	金 田	ノ エ ル	北 大 (3)				-210	失 権	失 権

<新人・新馬障害飛越競技>

						減 点	Time
	服 部	北	凜 北 大 (4)			0	
	大 歳	北	凜 北 大 (3)			0	

<M級C障害飛越競技>

						減 点	Time
1位	武 田	Roland Express	岩 手 医 科 大			0	1' 08" 47
2位	松 本	カ ム イ	弘 前 大			0	1' 11" 61
3位	北 川	北 銀	北 大 (3)			0	1' 12" 71

<第3級馬場馬術競技>						Time	得点
7位	仲村	北	玲	北大	(2)	7'48"	307
8位	石川	ノエ	ル	北大	(2)	7'01"	305
11位	大歳	北	凜	北大	(3)	8'02"	280
13位	服部	北	凜	北大	(4)	8'11"	259.5

★北海道馬術大会（於 帯畜大 8月30日～31日）

帯広の大きな空、広い平原、大きな馬場、広い馬房。すばらしい環境の中で大会が始まった。ノエルもスプリングもお嬢も戻ってきた。みんな明るく、のびのび飛んでいるみたい。
あいにくの天気で、ステイプルコースの内の「川越え」は取り辞めになってしまったけれどコースはまだまだ険しい森の中。大きな木に、人馬一体となってぶつかって、木を切り倒していった豪快な選手もいたっけ…。そして、銀と高野兄、箱番をしながら、いまか、いまかと待っている。来たノキヤ、ぎんノノノ 普段は無口(?)の高野兄が、「えいっ！」と力強いかけ声をかけながら、さっそうと飛んで行く。銀と高野兄がすごく大きくみえた。そして見事完走。夏の終わりを思わせるすばらしい大会だった。

<成年総合馬術競技>						調教減	耐久	余力
1位	鷺田	柏	星	帯畜大		-121 $\frac{1}{6}$	0	0
2位	川久保	トカチム	サシ	十勝柏友会		-123 $\frac{1}{6}$	0	-10
3位	諏訪	柏	秀	帯畜大		-140 $\frac{5}{6}$	0	-5
	高野	北	銀	北大		-144 $\frac{1}{3}$	-76	失権

<馬場馬術第三級課目>						Time	得点
4位	金田	ノエ	ル	北大	(3)	6'42"	325
8位	湯浅	北	玲	北大	(2)	7'10"	309
15位	前田	ノエ	ル	北大	(2)	7'17"	288

<L級競技(一般、少年障害)>						Time	減点
9位	金田	ノエ	ル	北大	(3)	61 45	0
11位	石川	北	銀	北大	(2)	63 37	0
14位	大歳	北	凜	北大	(3)	67 51	0
21位	服部	北	凜	北大	(4)	84 51	-3

★第28回札幌市民体育大会（於 北星RC 9月6日）

冷たい雨の降っていたこの日、1年目初めての試合、市民大会。先輩方に貸りた白いキュロットや上らんが何となくうれしいやら恥ずかしいやら。やはり緊張はかくせず、ぎくしゃくしていたものの、よーしやるぞという気合いを入れてのぞんだ。逃避もあった、ゴールしてからの落馬もあった。しかしゴールをしたときの感激はどれほどのものだっただろう。

規定タイムに強い五味姉。よし、これは勝ったと思った大歳兄をあっさり抜いて優勝してしまいましたね。湯浅姉はもどってくるのがはやすぎて……。

冷たい雨の降っていたこの日、みんなそれぞれの思いでその夜をすごしたに違いありません。それにしても五味姉、大歳兄はさすがですね。

<一般障害飛越競技>

						Time	減点
1位	五味	北	銀	北大	(2)	66" 65	0
2位	大歳	北	凜	北大	(3)	64" 56	0
3位	桜田	メジロマーティン		北星RC		62" 90	0
4位	湯浅	北	玲	北大	(2)	61" 42	0

<ジムカーナ B>

					Time	
1位	網河	ジョージ		日本生協連	41" 67	
2位	高橋美	ゼファー		八軒東中学	44" 37	
3位	高橋咲	ゼファー		八軒東中学	45" 40	
5位	岸本	北	銀	北大	(1)	46" 72
7位	小山	北	凜	北大	(1)	49" 22
8位	清水	北	凜	北大	(1)	49" 79
9位	岡崎	北	玲	北大	(1)	52" 67
11位	伊藤	北	銀	北大	(1)	53" 59
14位	小林	北	玲	北大	(1)	57" 79
15位	大村	ノエル		北大	(1)	80" 39

★フロンティア牧場祭（9月6日）

フロンティア関係者の中で小さくなっていた北大も、前田兄、真鍋の健闘で首位独占！
「泳げ！たい焼き君」の子門真人（あまりの変貌に一同絶句したが）のウェスタンルックも見られ、まずまずのいい一日でありました。

<ジムカーナ B>

1位	真鍋	クロスサハラ	北大	(1)
	美口	クロスサハラ	北大	(1)

<L級競技>

1位	前田		北大	(2)
5位	中戸川	クロスサハラ	北大	(1)

★第1回北海道馬場馬術選手権大会（石狩RC 10月27日）

北海道で初の馬場馬術のみの大会ということで、なかなか意義深い試合だったようです。
小さな巨人(?)北英のデビュー戦でもありました。

<第三級馬場馬術競技>

				得点
1位	布施	タイストーム	札幌光星高校	364
2位	谷口	ジंकエイト	フロンティアRC	329
3位	水上	シルバーキング	旭川RC	321
10位	仲村	ドン・ホッパー	北大(2)	297
12位	湯浅	北英	北大(2)	288
20位	大歳	北英	北大(3)	248

<総合馬場馬術競技>

				得点
1位	鎌田	ユーグレイ	石狩RC	339
2位	鈴木	ノースワンダー	ゼロライディング	333
3位	宮浦	ジュン	彗星乗馬会	323
4位	金田	北英	北大(3)	291

★第37回全日本学生障害飛越競技会（9月29、30日）

★第30回全日本学生3-DAY EVENT（10月2日～4日）

<二回走行>一個人					一走目	二走目	
1位	久保田	ハシビゴラス	明治大		0	0	} Jump off で 順位決定
2位	鴛田	柏星	帯畜大		0	0	
3位	塚田	桜伯	日大		0	0	
33位	中野	北皇子	北大	(3)	-19.75	-7	
44位	加藤	北玲	北大	(3)	-16	-21	
45位	高野	北銀	北大	(3)	-11.25	-28	

<団体>			一走目	二走目	計
1位	日大		-4	0	-4
2位	専修大		-8	-12	-20
3位	慶応大		-4	-34.25	-38.25
8位	北大		-47	-56	-103

<総合>					調教	耐久	余力
1位	村上	メジロクレイバン	明治大		-169.5	0	0
2位	細野	桜鈴	日大		-172.5	0	-7.75
3位	伊藤	桜四郎	日大		-172	0	-10
13位	加藤	北玲	北大	(3)	-212	-199.2	-5

★第23回東日本馬術大会（9月18日～20日）

★内国産馬障害飛越選手権競技（予選）

<内国産馬スピード&ハンディネス>					Time
1位	山下	富士川	山梨県馬術連盟		66' 66"
2位	桜井	ザ・キング	桜井ステーブル		67' 42"
3位	佃	クレイマーコダカ	浜松RC		72' 41"
12位	中野	北皇子	北大	(3)	88' 74"
15位	加藤	北玲	北大	(3)	93' 71"

<予選競技>				減点合計
1位	桜井	ザ・キング	桜井スティーブル	-0.5
2位	佃	クレイマーコダカ	浜松 R C	-3
3位	山下	富士川	山梨県馬術連盟	-4
12位	中野	北皇子	北大 (3)	-15
20位	加藤	北玲	北大 (3)	-21.5

<内国産馬障碍飛越選手権>				Time	減点	Jamp off
1位	川俣	サイレント	ミカモ R C	91"75	0	40"38(0)
2位	山下	富士川	山梨県馬術連盟		0	36"58(-4)
3位	長屋	アールグレイ	石狩 R C	86"32	0	38"75(-4)
19位	加藤	北玲	北大 (3)	99"58	-8	
20位	中野	北皇子	北大 (3)	96"83	-11	

<標準内国産馬障碍飛越>				Time	減点	Jamp off
1位	佃	クレイマーコダマ	浜松 R C	64"27	0	43"34(0)
2位	佃	ジュリアン	浜松 R C	64"30	0	44"36(0)
3位	中馬	バトルアレス	藤沢 R C	63"45	0	46"65(0)
16位	中野	北皇子	北大 (3)	59"19	-4	
19位	加藤	北玲	北大 (3)	64"28	-8	

★第9回山下杯記念馬術大会

よく晴れた秋空の下で行われた、今シーズンをしめくくる、最後の試合でした。
 結果は北大の快挙！三年ぶりに酪農大から優勝カップをいただいてまいりました。しかし、
 一年目の方はジムカーナで惨敗……。上位はほとんどが酪農大で占められてしまいました。
 そんな中で、一人光っていたのが福庄君でした。北玲に乗って酪農大の馬場を大疾走。
 「は、速い！」「これはもしかすると……。」試合の後のレセプションで酔いつぶれて、
 「おじょうーっ、ありがとーっ」と何度も叫んでいた彼の姿が印象的でした。
 それにしても、この不甲斐ない一年目をカバーして、優勝を勝ち取った二年目、三年目の先
 輩たちはスゴイ！と思うのです。

<ジムカーナ>

						Time
1位	福庄	北玲	北大	(1)		42"0
2位	近藤	ブラックランバー	酪農大			43"2
3位	鶴巻	フジオオヤマ	酪農大			44"5
5位	小林	北凜	北大	(1)		46"2
7位	清水	北玲	北大	(1)		47"4
8位	平井	北銀	北大	(1)		48"0
9位	真鍋	ドン・ホッパー	北大	(1)		
11位	堀崎	北凜	北大	(1)		

<L級競技>

						Time	減点
1位	前田	北玲	北大	(2)		49"96	-4
2位	酒井	駿龍	酪農大			53"10	-4
3位	湯浅	北銀	北大	(2)		1'07"37	-8
	大歳	北凜	北大	(3)		1'49"94	-7

<M級C競技>

						減点
1位	高野	北銀	北大	(3)		-8
2位	山口	駿龍	酪農大			-8
3位	仲村	ドン・ホッパー	北大	(3)		-8.75
	金田	ドン・ホッパー	北大	(3)		失権

全 日 学 観 戦 記

石 川 信 行

9月27日、運ちゃんの計算ミスによって急遽、AM1時半にたたきおこされた北銀は酪農学園大学経由で駿駿・駿龍とともに、東日本出場のため一足先に出発した北皇子・北玲の待つ馬事公苑へと出発していった。

今年、我北大馬術部は北日本学生馬術大会において、2回走行で3位・北玲を初めとして北皇子・北銀の3頭が全日学出場の権利を得、又3-DAY-EVENTでは北銀がわずか一点の僅差で権利をおしくものがしてしまったものの、北玲が準優勝をするなどなかなかの健闘だったと思う。特に2回走行では2年振りの団体出場を決め、又馬の内わけも12年連続全日学出場を続けていたドン・ホッパーを欠きながらも、北銀・北玲という2頭の新馬が新たに権利を獲得したという点は評価されてもよいと思う。

9月29日、2回走行1走目、北皇子の馬付きで準備馬場にいた僕の耳元に、「北海道大学、高野選手御入場して下さい。」とのアナウンスが入った。数分の緊張の後、今度は「ただいまの高野選手の成績は-11.25です。」とのアナウンスが入ったときえらく感激したのを覚えている。結局2回走行の総減点は-103、1回の失権もなく団体8位を決めるという近年稀にみる好成績をおさめれたと思う。また10月2～4日の3-DAY-EVENTでも北玲と加藤姉は失権することなくゴールをきる事ができた。

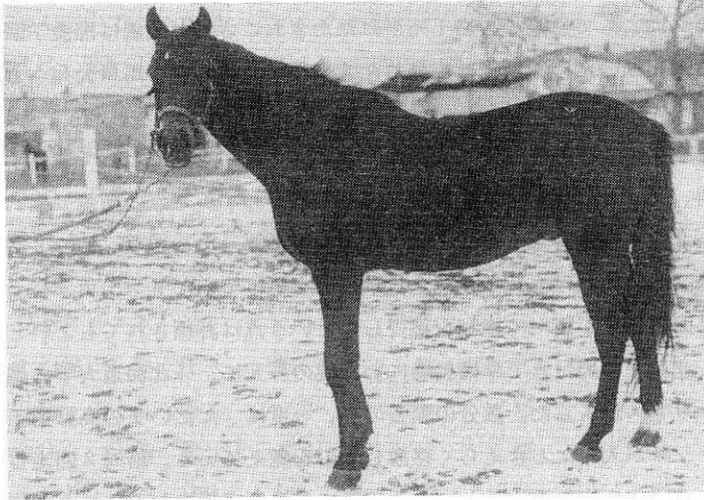
しかし、全国レベルから見ると見劣りするのも現実である。特に2回走行での上位10人中1年生2名、2年生3名という数字に表わされているように、中央の大学などでは優秀な馬匹に馬歴の豊富な下級生をあてるため、経路のほとんど変わらない2回走行などではどうしても有利になるのは否めないであろう。

しかしその中であって畜大の鷺田主将と柏星、酪農の田中主将と駿龍が2回走行1走目を満点でTV出演を果たし、特に鷺田主将は2走目も満点でゴールし、ジャンプ・オフの結果準優勝となった。又、畜大は3-DAY-EVENTにおいて準優勝、3種目総合でも第5位という健闘ぶりをみせた。

このようにさほど我々と条件の変わらない北海道の他大学が中央の大学と互角に戦っている姿は是非とも見習うべきだと思われ、我北大馬術部も負けずに頑張っていくべきであろう。

馬匹紹介・調教報告

ドン・ホッパー号



騙 中半血 黒鹿毛
昭和46年6月30日生
勇払郡早来町産
父 オーシャ(サラ)
母 ハゴロモ(トロ)

ドンは9頭の中で最長老であり、威厳のある風格をしている。(このさい、あの、大口を開けたまま呆けている姿は忘れて下さい。)そのプライドの高さ故に(?)他の馬が接近するのを許さない。要するに、すぐけろろとする。しかし、人はけられない。(そのかわりに鼻先でどつくのだけど……)飼付けの時でも、お嬢が叫び、チャンプが吠え、ぎんとスプリングが必死で前がきするあの騒ぎの中で、ドンは悠然と飼いが運ばれてくるのを待っている。律義な奴で「ドン爺」「じーさん」などと呼ぶと、こっちを向いておじぎをする。にんじんや角砂糖が欲しい時もひたすらおじぎをする。いくらやってももらえない時は態度を一変させて頭突き攻撃にでるのである。

ドンはもう年である。いくら曳馬の時に若ぶって見せても、練習後の疲れが隠し切れない。ドンじーさん、いつまでも元気で馬場を駈け回って下さい。

服部 雅史

都合により、昨年の分と併せて2年間のドンについて書かせてもらうことにします。

ほぼ、まる2年間ドンに騎乗させてもらった訳だが、正直なところ、自分がドンに教えてやれたことなど何一つ無かった様な気がする。せいぜい、曳馬で、春になって雪が解け始めたとき、一番早く草のあらわれる場所を教えてやれたぐらいで、調教に関しては何もすることができなかった。だから、調教報告などというのは余りにもおこがましいのであるが、どうこう言っても仕方がないので、与えられた

題に甘んずることにする。

<3年目のとき>

ドンに乗り始めたのは、2年目のときの12月23日だった。この年の全日学では、やむなく馬体はかなり無理を強いて出場し、このときは長い馬休明けであった。したがって、駈歩は殆どやらず、1日10分程度の速歩を行なう程度で、あとは常歩だった。雪が降らなければ下が固く、雪が深く積もれば肢に負担がかかるということで、このころは、運動をする場所捜しに一番苦労した。

このころの最大の課題は、銜受けと伸縮であったが、まだ、銜受けがどんなものか全然判らず、当然のことながら悪戦苦闘した。障害などなかなか飛べる馬体ではなかったこともあって、馬場の経路回りなんかを勝手にやったりしていた。ドンは非常に賢い、そして非常に怠慢な馬なので、低レベルの騎手の要求には卒なく応えてくれる一方、騎手のレベルに応じて要求されること以上のことは絶対にしない。だから、日頃の練習では、一通りのことは大抵できてしまうし、何をしたら良いのかわからなくなってしまったりした。馬場の経路回りなんかをしたとき、日頃一人で乗っているとときかにか妥協を許しているかを痛感させられた。とにかく何かをしなくてはならないことは分かっていたが、何をしたら良いかわからず、無闇に高い障害を飛ばして止まられたりした。いま思うと恥しい。

雪が解けてから調整を始めて、半沢杯では、馬体を気にしながらも中障害と複合に出て、まあ無難に終わったという感じだった。6月に入ってから、どうも疲れがたまっているようで、馬体の調子が良くなり、加えて人の方も、障害に関して自信をなくして、人馬のコンディションは最悪の状態だった。このころは、馬とのコミュニケーションがどうもうまくいかず、馬体、特に肢については、ガラスの一本橋を渡っているかのような感覚で、非常に心許ない毎日であった。こんなことから、道自馬は棄権することにした。それにしても、調教者の運動の計画が悪かったとはいえ、どういうわけか、この2年間をみる限り、6月あるいは7月という時期は、ドンにとっては苦手な時期であるように思われる。

帯広での公認大会は悲惨だった。この時は、冬にも来ていただいた高須さんに再度わざわざ来ていただいて、色々お世話になった。標準中障害で1反3落。準備馬場ではまあまあかなと思ったのに、本馬場へ出ると障害前でぐっつまる。こんなはずではなかったというのが正直な感想だった。審判長の久保田さんに頼んで選抜中障害にオープンで出させてもらったが、3反失権だった。惨めだった。

それから北日までの2週間弱は真剣だった。馬体の調整を考えてあまり障害は飛べなかったが、障害前での馬の押し方と銜受けの練習をした。そして、大きな不安を抱きながら再度帯広に向かった。二回走行の第2走目の走行中に障害前での馬の押し方が見えてきた様な気がした。調教審査では、綺麗な演技はできなかったが、馬の前進氣勢など、その頃の自分なりに納得のいった試合ができた。耐久、余力審査は問題なかった。

北日が終わった頃から、やっとドンの至らないところ、改善すべき点が見えてきたような気がし始めていた。それまでは、まずい点も、自分の技術不足のせいかなんか悪いのかわからないことが多かったけれども、次第にドンの調教の疑問点が見え始めてきた様な気がした。すなわち、口が非常に固いこと、特に駈歩で前のめりになって体が起きにくいこと、速歩の伸長をしようとするグッと前に出る感じはよいが、やはり前のめりでリズムを崩してしまうこと、馬がやる気になって障害に向かうとき、自分の

ペースで突っ込んで行き騎手を無視してしまうこと、などである。シーズンも終る頃になってやっと、調教の第一歩を踏み出す準備ができる場所に到達できたのであった。丁度そんな矢先にバイクで事故を起こしたのだった。選手として皆に申し訳ないと思うと同時に、悔しくてたまらなかった。このときは、特に加藤妹には代理として迷惑をかけた。

<4年目のとき>

脚のギプスが取れたのが半沢杯も間近かの4月の下旬だった。半沢杯では、人の姿勢はひどく馬の状態も余り良くなかったが、ドンにカップをやれたことだけが救いだった。

道自馬は、北大が主管で百瀬さんの馬場をお借りして行った試合であった。この頃は、試合の準備とドンと北薬とで非常に苦しかった。結局2頭ともうまくいかず、自分でつくった経路ながら、ドンはM級Bで3反失権した。このとき、自分の下手さもさることながら、馬がどこか変わったと思った。確かに馬のパワーの衰えを感じた。

公認大会は、体力回復のため、北日本に向けての調整を考えて出場しなかった。

北日本は悲惨だった。馬体の調整はほぼうまくいった。しかし、二回走行では、1番障害の単一色のバーを見てしまい、1つの障害も飛ばないうちに失権した。目の前が真っ暗になった。落ち込んだが気を取りなおして総合にかけることにした。調教審査はまずまずだった。馬体面から一番の気がかりだった耐久では、ドンは本来の力を発揮して、自らの老体を顧みることなく果敢に走り、飛び越え、駆け抜けてくれた。感動を抑えることが出来ず、障害がぼやけて良く見えなくなった。ゴールも位置しかわからなかった。後で関門不通過と聞いた。ドンには泣きながら、ひたすら心の中で謝り続けた。翌日の余力は満点だった。関門さえ通過していれば2位になっていた。

ドン、ごめん。

<運動の組み立てと課題>

毎日の運動の組み立ては、色々迷いながら試行錯誤してきた。読む人のためになるかならないかは別として、自分のやっていたことを書いてみる。

まず、練習の最初に、15～30分程度、常歩で、“大きく”体全体を使うように歩かせる。馬体が老化している分だけ準備運動と整理運動には時間をかけるべきだと思い、これを欠かしたことはなかった。もちろん試合場でも然りである。

その後、収縮を要求しないで、最初は軽速歩で少し早めのペースで前に出しながら、大抵左手前から輪乗りを行い、“輪乗りを換え”の反復によって大きな8字乗りに移る。この馬の場合、前に出さないと前進氣勢があらわれにくいこと、右手前の方が若干固いことの原因による。このとき、衝突に関しても余り要求はしないが、ただし突っ張らせてはよくない。こうして次第に体がほぐれて、やる気が出てきたところで次の運動に移る。このあたりは至極オーソドックスだと思うし、全くルーティンであった。肩を内へなどをやってみたりしたこともあったが、これは自分にはさほど効果のあることとも思われなかった。

その後は日によって異なるが、普通は正反撞をとって、じっくりと馬を起し畳み始めることにとり

かかる。うまくいけば、正反撞の反撞が推進になって都合がよい。このときは、ペースが遅い分だけより一層、前進氣勢を保つのが難しくなる。だから、脚を、有効な脚を、とにかく使い続けなくてはならない。

始めは、斜め横歩や前肢旋回、後肢旋回などの軽い横運動を入れて、馬体の柔軟性や脚に対する反応を高める。とにかく、少しでも脚に対する反応が鈍い瞬間があったら、すぐに、拍車なり鞭なりで注意する。そうしないとどんどん脚に鈍くなって重くなっていくし、馬になめられて緊張状態を上げられない。銜のコンタクトは、口が半分馬鹿になっているので、かなり強くても問題はないが、前のめりになって銜にかかってくる傾向があるのでそれには注意を要する。頸全体が銜にのっかかっているような重さを感じたときには、左右の拳で合図してやめさせるのが良い。フワフワと浮き上がるような柔らかい反撞が得られるようになったら、馬の背中が丸まってきた証拠である。言葉で書くのは簡単だが、これが大変である。

これが満足のいくようにできることはなかなかないが、ある程度できたところで次はいよいよ伸縮に移る。

ドンの得意とする伸長速歩は、頭を少し下げてちょっと前のめり気味で、体を伸ばしきって、若干急ぎ足で、銜をグイグイ引きながら走る速歩だが、これは、ドンがやる気になっているという意味からは評価できるだろう。なぜなら、そんなとき、ドンの得意気な様子が騎座から感じられる気がするからである。しかし、これは伸長速歩としてはどうも良くないと思う。なにも本格的に馬場をやるわけではないので構わないだろうという意見には賛成しかねる。障害の経路で、騎手に注意を向けさせてシャープな伸縮を要求しようとすれば、これは大切なことだと思う。

リズムを変えずに歩幅だけを伸ばし、前のめりにさせない。ドンに新しいことを覚えさせることは難しかった。調教者と呼ぶには、余りにも未熟な自分だった。いっそのことこのまま何もしようとしないう方がよいような気さえしたりした。

毎日乗っていれば、跨って少し歩かせれば、その日は体の調子がいいか、それほどでもないか、なんとなく感じられるものである。たとえ確信が持てなくとも、その感覚は大切である。だから、その日の一番最初に少しでも跨ることは非常に大切なことだ。運動を続けてみてコンディションの良さを確信し、また試合や馬休などのスケジュールを考えて、今日はいける、と思ったら障害を飛ぶ。

障害への運動の入り方だが、キャバレッティーから始めて、キャバレッティーバー、垂直あるいはオクサー、そしてコンビネーションというのがおさまりのコースのようにやっていたが、ある日村上捷二先生の講習を受けて、キャバレッティーはやる必要がないことに気付いた。下手な人間がやると弊害が多いときえいう。また、ドンは低い障害はなめてかかって、本気にならないところさえある。体さえ十分にほぐれていれば、あとは出来るだけ少ない飛越回数でいい飛越をして終わりにするのがベストだ。いきなり120cm飛んでも構わない。人の不安解消のために馬に無駄な運動と時間を強いるべきではない。

そして騎手は、障害前で出来るだけ遠い位置から踏切が合うか判断できるように努力する。その馬の走り方によって変化する完歩を感覚で把握していなくてはならないことだ。シャープな馬を作るには必

要なことだろう。

練習は、馬は状態が山の頂点にきたときにやめるのがベストだが、つついやりすぎてしまうこともある。そうしたときは、一度レベルを下げて上り調子にさせたところで打ち切る。一度出来たのだからと、しつこく続けない。とにかく、馬がいい気分の状態であげる様に努めた。

整理運動は十分にすることがある。馬体だけを考えれば乗ったままで、大きく、リラックスして歩かせるのが良いのかも知れないが、それよりも、馬をいい気分にさせることを第一に考えて、良い飛越をしたときにはすぐに鞍を降ろして餌をやり、曳馬で長く歩かせるようにした。非常に疲れているときや、ぼかぼかと温かい日などには、砂に寝ころんだ後立ち上がらないで座り込んでのんびりしていることがよくある。

<最後に>

自分が乗っていた2年の間にも、ドンの体の老化が少しずつ進んでいることがはっきりとわかった。それに対する自己防衛手段としてか、頭の方も少しずつずるくなっている様だ。以前にくらべ、図太くなったというか、緊張しにくくなっているところがあると思う。

ドン・ホッパーの全日学連続出場の記録に12年でピリオドを打ったのがこの自分であることについては、ドンにも、部員の皆にも、本当に申し訳ないことをしたと思っている。今年は、3年目の仲村が乗るということで、彼こそがドンを活躍させてやってくれるだろうと思いを託している。しかし、いずれにしても、老化のすすむ馬体を見るにつけ、ドンの引退の時期はそう遠くはないだろうと思われる。そのときには、のんびりとしたところで、ほんとうに安らかな余生を送らせてやれたら、と思っている。

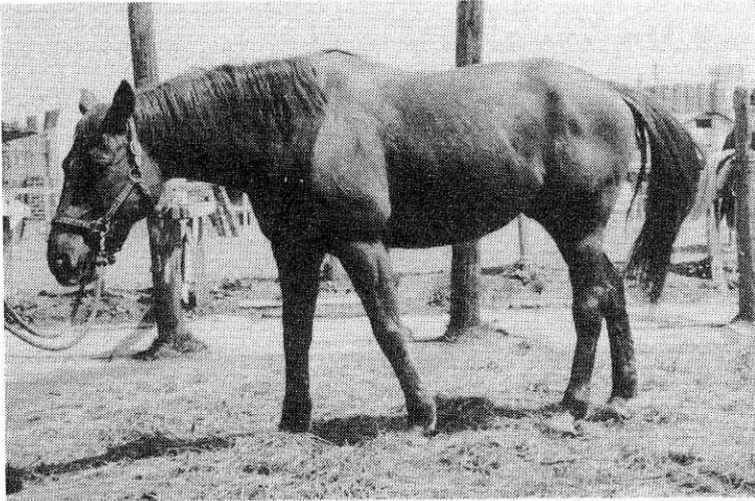
社会保険 国民健康保険 指定医
老人医療 生活保護法

庄内歯科

歯科医師 庄内貞夫

札幌市白石区本通2丁目北81番37号 ☎861-2504

北 皇 子 号



騙 サラ 栗毛
昭和51年5月12日生
新冠郡新冠町産
父 アストラルグリーン
母 ハーバーガール
競走名 ハーバーギャラン

どんな障害に向けられても一生懸命、走り、跳び、大会に出場しては次々とすばらしい成績をおさめる北大の黄金の馬、北皇子号も北大に帰れば愛嬌のある可愛いギャラン。そのギャランも今年で12才になりました。過敏症でブラシがけが大嫌い。本当は暴れてでもイヤイヤしたいけど、中野兄に「ギャラン、がまんだ!!」と声をかけられると歯をくいしばってがまんのギャラン。ブラシかけの前には、んーと大きなびを1つ。これは「ボク、ブラシがまんするよ。」という合図なのです。人がいると近付いてきて顔や手をなめまわすギャラン。時にはいたずらっ子で部員の作業着のすそを引っかきとくわえ、首を上下にふって服をビリビリにしても、その澄んだ無邪気な目を細めて笑っているのを見ると「もー、ギャランたら♡」と許してしまいます。誰からも愛されるそんな性格をいつまでも忘れずに、これからも大活躍してほしいと思います。

中 野 兼 一

最近の調教報告の内容に関して、OBの方々から様々な御意見を頂き、いざ自分が一年間乗ってきた北皇子号の調教報告を書かねばならないという立場になって（いやそんなことは当然で、一年前にはわかりきっていたはずなのだが）、わずか馬歴1年半たらずの人間が馬に乗って、何を馬に対して教えることができたか？ 乗っている時はいつも一生懸命であった。しかし、本当に北皇子が自分と過ごした一年が彼にとってどういう一年であったのか、考える時、なんという計画性のなさ、騎手ばかりが焦り、どれだけ馬の気持ちというのを感じ彼を動かしてきたかという疑問、ただ反省すべき点しか、思い浮か

ばず、さらには、その反省すべき点が、本当に自分の血となり、肉になったのかという不安があり、一年間、自分に北皇子を任してくれた主将をはじめ、現役部員、OBの方々、特に、今迄の北皇子のチーフであった方々には、申し訳ないと思っています。そして、もう一年、北皇子に乗ることに決まった今、去年とは違った意味で本当にやらなければならない。後一年しか、残されていない。夢中に乗るのではなく、冷静に乗らなければならない。余裕をもって乗らなければならない。今、自分に課せられた問題はこのことではないかと思っています。とにかく、以上のような現在の心況を踏まえて、彼にその時々でどのようなことを考えて乗ってきたか？恥かしい限りではありますが、決して調教報告などというものだと、自分でも思えないのですが、これから一年間のことも踏まえて、一つの区切りとして、書いていきたいと思います。

2年上の陣川さんが半年間乗った後を継いで、61年の9月から10月中旬までの全日学まで下乗りという形で、最初は乗った。右肩の状態がおもわしくなく、北日学後、全ての試合を棄権し、馬休も約一カ月、全日学に照準をあわせ、全日学まで常歩中心の運動を行った。自分は、あくまで、下乗りという形であったため、速歩も放棄手綱で、口を持つことをできるのは、常歩だけ。それでもやるべきことは、たくさんあるはずなのであるが、たいした騎座も脚も持っていないのに、ハミ受けのことばかりに気をとられ、止まらない、頭は上がる、馬は騎手に注意をむけない。それでも、何かにとりつかれたように、口ばかりを考えて乗っていました。元来、乗り方が雑であると日々から先輩にはいろいろと注意されている自分であったので、毎日、折り合いがつかず終わっていました。しばらく、彼には乗らず、全日学に同行し、北皇子の試合を久しぶりに観戦しました。総合のみに出場で、試合前から、肢の状態がよくないため、心配ばかりが先立ち、冷静に試合を見、その内容というものを吟味することはできずじまいだった。馬も久しぶりの試合で緊張のためか、常に試合中は興奮を帯びていました。それでも最後まで頑張り、ある程度の成績を残し、帰札。帰札後、一ヶ月間馬休。その間、なんとかして、騎手の技術上達をと、他の馬に乗りながら、回復を待ちました。冬場に入り、雪の積り始めの頃から騎乗を開始。馬体に気を使い過ぎ、積極的な乗り方をできず、脚に対する反応を単なる焦りからくる、ちょこまか動きと感違いをし、馬の首のこと、口のことばかり、気使いながら乗っていた。確かに脚を使えば前に出る。左右の内方脚を使えば一年生でも手綱を使わずに曲げることができる。しかし、これは脚に対する従順な反応ではなく、反抗と考えた方が正しいのでないか。真の脚への反応とは、脚を常に馬体につけ、ゆっくり大きなテンポで歩かせることができた時に生まれ、こうした条件の上で初めて馬のハミ受けということを考えなければならない。今思うと、最初からこのような基本的な問題を忘れ、小手先だけのハミ受けにごまかされていたように思います。その上、騎手の馬上でのバランスの悪さ、騎座の不安定さなど、騎手の基本的な改善を忘れ、全くの一人よがりであった時期がこの時期であるということも付け加えなければなりません。自分の未熟さをはっきりと認識しなければ、次へのステップが始まらない。

最初のつまづきから脱し、冬合宿。部班による騎手の問題点を改善すべく、前半、後半と両方の合宿に参加したが、北皇子に乗った時の問題は全く改善できず。冬合宿後も、単なる騎手の自覚のなさにより、相変わらず強引に、無我夢中で、自分でもわけがわからなくなり、長屋さんに騎乗をお願いし、馬の問題点、人の問題点を注意してもらった。見ていた限りでは、短時間で馬を手の内に入れなければ

ならないためか、(いや他にも村上捷治さんに乗ってもらった時をそう感じたのだが)手綱を短く、コンタクトはかなり強めで、強引な形から、運動を始め、徐々に馬に緊張感を与え、それと同時にリラックスさせ騎手に注意を向けさせるような状態を求めているように感じていた。これを見て、様々な迷いが生じた。馬の首は伸ばした状態から丁寧に口をもって、たたませなければいけないとこの頃から感じ始めた。長屋さんの騎乗を見て、北皇子はこういうやり方でもいい状態はつくれると思った。この「つくれる」を「自分でもやればできる。このようなやり方が良いのではないか?」と思い、その迷いからぬけきれず、後々、シーズン中迄、こうした騎手のいい加減な考えが尾をひいて今シーズンこのような惨々たる成績がでたのではないかと今、考えています。馬歴一年半足らずの人間が馬をもらってやらなければいけないことは、上手な人の騎乗を見て、同じことをやろうとすることではなく、自分の騎座、拳の安定、脚扶助の強弱など基本的に問題のある点を理解、認識し、その上で自分にできることをし、馬の注意を自分に向けさせることなのである。そう認識しなければ、誤解が誤解を生じ、単に理論、結論ばかりが先走り、そんな目で上手な人の騎乗というのを見てしまいがちになってしまふ。

何をするにも基本が大切であるというが、真にこの事を実感しないことには、一からの出直しも無いのではないかと考えます。話は少しそれましたが、北皇子に乗っての問題点は、前に少し書きましたが、脚を使うと焦ってしまうことです。顕著になって表われるのは左右の単独脚を使う時で、必ず首を上げ反抗し、全く理解をしていないという感じでした。前々から障害以外にも馬場の三級、調教審査レベルの試合はシーズン中は出なければならぬと思っていましたから、課目の中の二蹄跡運動は確実にこなせるようにと考えていました。いざ乗って見ると、ほとんど力づくでしか二蹄跡運動が出来ず、左脚を使えば左に移動するなどということは全くわかっていないようでした。力でなく、一步一步丁寧に合図で単独脚を教えるようにと心がけていましたが、どうしても上手くいかず、正直な話、シーズンが終るまで単独脚をわからせるということではできませんでした。単に二蹄跡運動のためにと、考えていたわけではなく、左右の柔軟な動き、単独脚を使うことによる後肢の動き、それに伴って馬がバランスをくずさずに運動することを求めているのですが、左右の柔軟性、バランスのよさは天性のものがこの馬にはあるので、それを考えるとあまり固執をする必要はないのでなかったのかなどと考えています。しかしやはり側対、斜対扶助による横への動きというのは準備運動の中で、取り入れなければいけない。とにかく、自分なりに試行錯誤を繰り返し、長屋さんをはじめとするたくさんのOBの方々の話を聞きながら、できるだけ、自己中心的な乗り方はしないようにと心掛けて乗ってきました。しかし、もう一つ、冬場にしなければならなかったこととして、いい加減であったと反省するのは、もっと部報をはじめとする書物を読まなければならぬということです。読んでいるようで、かなり、いい加減な読み方しかしていないのは、本当にもったいなかったと言うしかありません。シーズンオフである冬場は、寒くてつらいが、やらなければいけないことがたくさんある。そして長い目で見て、2年目の冬に自分がどういう面で成長するかは、どれだけ書物を読むかと、他の人間とのコミュニケーションで何を感じることが出来るかにかかっていると思う。恥ずかしながらそれに本当の意味で気付くのはシーズンを終えた今であったのかと思っています。

シーズン直前、障害練習を始めてから北皇子という馬は、障害に向ければ黙っていても飛んでくれる、そういう意識が強く、調教計画の中において障害に対して、馬のために何かを特別な練習をするという

ことは考えることができず、もっぱら騎手の練習に重点をおいて、練習を取り組んだ。しかし現実にはフラットワークの段階で人間が息づまり、たとえ割り切ったとしても、満足のいく障害練習というのはできずじまいだった。運動の組み立て方として、この馬は障害というものをどの段階で、どのくらいのレベルで、どういう前後のつながりで運動すべきなのか、迷いがあり、この時期に中途半端な乗り方しかできなかったことは、本当に悔やまれる。今、その原因というのを考える時、やはり一番問題だったのは余りに小さなこと、レベルの低いことに人間の頭が振りまわされすぎたことであった。冬場の練習というのは確かに重要で、馬の体力的なことについてもじっくりと考えて乗ることのできる時、しかし一日一日の練習で、今日は何を求め、全体の運動として、どのレベルまで行い、その日の練習をどう終えるか。そのことを毎日に頭に入れて騎乗できなかったことは、わかってはいましたが、本当に恥ずべきことだと思う。

とにかくシーズン直前に、障害に対して人間が特別視していたことは、後々まで響きました。さらに人馬の折り合いもつかず、騎手の焦り、不安が、騎乗において常に先行し、馬の心理を読むことなく、自分本意な乗り方しかできないことは、シーズンに入っても変わらないということをつけ加えます。こうして、一組の人馬が再び、未知のまま、シーズンに入るわけです。試合を一つ一つ振り返って反省してみると、最後まで騎手の緊張というものが、良い時も悪い時もその結果を大きく左右し、冷静な状態で経路をまわるといことができなかった。固い体、曲った背中、遅れる随伴、譲れない拳、試合を追うごと、大きな試合になるたびに、その症状が悪化していったことは否定しようがない。気をつけてはいた、しかしそれがかえって体を緊張させ、どの試合をみても、情けないぐらいに、格好が悪い。柔軟に馬の動きについていけた試合というのはシーズン最初の半沢杯ぐらいで、他のどの試合を見ても、その騎手の固さが馬に伝わり、障害前においても脚に対する反応が鈍い。脚が使えない分、座骨の推進に頼り、上半身を振りながら、推そう、推そうとはするが、必ず随伴には遅れる。拳を許して馬の首を伸展させることができない。本当にどうしようもなかった。馬を動かすということ以前に、このような精神面での弱さが馬に通じてしまったということは、試合のたびに馬に対して申し訳ないと思っていました。とにかく、こうした運命的欠陥を負いながら、波乱に満ちたシーズンを送りました。

半沢杯の中障ではいきなりベル前失権、続いて道自馬では初日のハンティングでは優勝したものの、次の日のM級Bでは三反抗失権、落馬までおまけでつき、本当にどうしてよいかわからなかった。道自馬までの試合での準備運動をみみると、馬は完全に人間の拳の外にあり、興奮したまま、或いは怯えながらの状態、馬が一方向的に試合の結果を決めていたという感じで、最初はとにかくこの馬の興奮にうまく乗じて、経路を回っていた。しかし、所詮、このような馬の心理を無視した騎乗では、後に続くわけもなく、道自馬後は、公認に向けてできるだけ計画的な騎乗をと心掛けて練習に臨んだ。

公認は北星で開かれたが、馬場も広く、経路も余裕をもって回れた分、馬は以前より前に行けた。ハンティング、標準中障と共に満点で、勝負は2日目の中障選手権であった。道自馬の時も感じたのだが、初日には前進氣勢が感じられるか2日目になるとどうしても馬を初日の状態にもっていくことができない。同じ失敗を繰り返してはならないとこの試合には気合いが入った。しかし初日には飛んだりバプーで一拒止をくらい、冷静さを失い、最後トリプルの一番で一落。どうしても騎手に力が入ると走行にめりはりがなくなり、飛越に際しても、障害前での追い出しが早すぎるため、直前でつまったり、

飛越後のバランスの悪さから、次の障害に向けるまでの誘導でハミが空になる。問題はまだまだ残されました。加えてこの時からその後の試合においてもリバプルーで反抗を招くことが何回もあり、水濛及び乾燥に対する馴致の不足も痛感しました。公認直後から右前肢に破行がみられるようになり、北日を2週間後に控えていたこともあり、大事をとってしばらく馬休にした。しかし破行の状態は全くよくなり、右前の球節にできていた軟腫を相当痛がっていた。馬体だけには無理がないようにと、最低限のレベルで馬体には常日頃から気をつけていたつもりだったが、やはり自分のいい加減さが元でこうなってしまったことは悔んでも悔みきれない。今までの目標としてきた北日を前に、馬に対してすまないと思う気持ちで一杯だった。十和田への遠征直前にOBの水野兄の紹介で、札幌の獣医さんに肢をみてもらい、やはり状態はよくないということで、二走一本に照準を合わせました。一走目も減点が多いようなら二走目は棄権して、総合にかける。そういうつもりで北里大学にのり込みました。北里に着いてからも試合の前日だけ少し運動しただけで、ほとんど、ぶっつけ本番、準備運動も馬が前にかかって、脚への反応も感じられず、最悪の状態で本番に臨みました。一走目、いきなり一番で拒止。本当にもうダメなのかと思いながら祈るような気持ちで一つ一つの障害を飛んでいきました。高さが120cm止まりであったこともあって何とか一反一落で帰ってこれたものの、走行自体は今までになく最悪。二走目はとにかく馬の能力だけを信じ、前日より準備運動を控え、試合の雰囲気の中で、馬が緊張感を見出すことにまかせ、障害前では我武者羅になって追い出しました。満点ではあったものの走行自体は一走目にも増して最悪の状態。よくぞこんな下手な騎手を乗せておまえは還ってきた。ただひたすら、馬に感謝すると同時に、彼に対して何もすることのできなかった自分がとても腹立たしくなりました。二走を終え、北大の全日学の団体出場が決まり、この上もない喜びを。一昨年何年かぶりに、団体出場した時とは違う馬の顔ぶれで、そして当時一年目であった自分達が今こうして、団体を組んで、馬事公苑に行ける。しかしその喜びとは裏腹にやはり総合は棄権せざるをえませんでした。野外の下の状態が、梅雨時のためにぐちょぐちょでとてもギャランの今の肢の状態で耐久を出ることはできない。無理はできるが、その後の試合のことも考えると今、無理はできない。自分一人欠けることで、総合も団体を組めるかどうか決ってくることは承知していましたが。他の部員に、ギャランに申し訳ない気持ちで一杯だった。北日後道体を控えていました。総合のエントリーだけはしておいたが、結局これも棄権。自分の馬で試合に出れないことに対して改めて悔しさを痛感。こうして道内の予選は全て終わり、残るは9月中旬の東日本、下旬の全日学のみとなりました。日程的につまっていたため、北皇子と北玲の2頭は山梨での東日本大会終了後、そのまま馬事公苑に特別な計らいで連れて行くことができたことは本当にラッキーでした。9月に入り、何とか右前肢の状態も回復にむかい、もう一度、一からやり直しの気持ちで運動を始めました。しかし、この時までに結局、一組の人馬として、何かの約束ごと、規律など1つも作ることはできず、馬の心理を半ば無視した騎手本意の乗り方、理論、やり方ばかりに振り回され根本的な所で大事な事が欠けている。そんな事に気づき始めました。道内の試合においても、その後の東日本、全日学と、本当に自分が満足いくような走行などというのは一つも見当たらず、空回りしながらも北皇子に対してもっていた自分の情熱だけが、何とか結果を残してくれた様な気がします。馬休後の騎乗した時の馬の感じは、前肢、後肢の踏み込みも共にあまりよくなく、ハミを受けた時の感じに、前より力強さは感じられず、どうしても馬が前にかかり、焦り、最初から最後まで馬をある程度手の内に

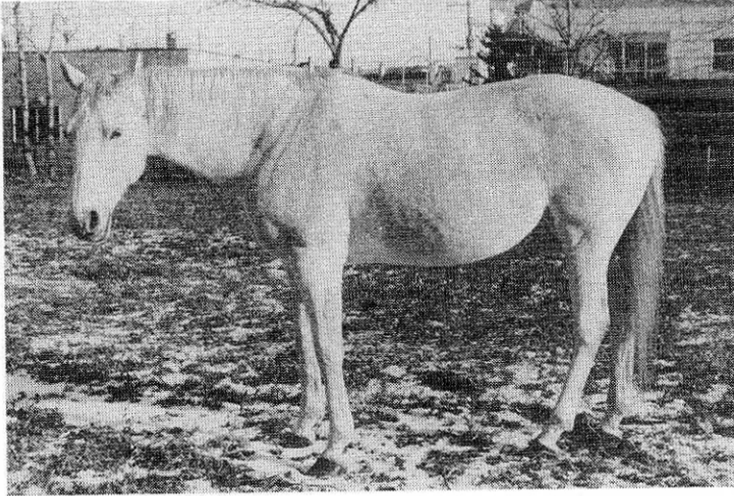
入れて運動させることはできませんでした。不安もつゆり、かえって騎手の騎座・拳が相当、いい加減になっていたことは当然です。人馬の折り合いをつけることなく、東日本大会に行きました。試合は3日間でしたが、前日にフレンドリー・シップという馴致を兼ねての経路回りを行うことができ、馬体的に不安がありましたが、試合前に、一度経路を回り、調子を見ることはとても意義のあることと思ひ、出場しましたが、結果は惨々。馬は興奮し、場内に入ることも嫌い、人間の焦りも伴って、リズムも何もない、唯、前に出すことだけ勢一杯という状態で、2反2落、タイム減点もあって最悪の成績でした。次の日のハンティングはそれだけ、逆に開き直りの気持ちで試合を行いました、変に馬をつめすぎ、いつものペースを変えてしまって前に出すことができず、本来なら勝てる試合ではありましたが、時間はかかり過ぎ。2日目の標準中障は、初日の教訓を元に、久しぶりに、ギャランらしい走行ができたが、3日目の選手権では完全に準備運動をやり過ぎ、試合前に、もう試合が終わってしまったような感じを馬に与えてしまい、緊張感の抜けた試合になってしまいました。準備馬場での周囲の雰囲気騎手が飲み込まれ、騎手の緊張と不安をギャランに強引に押しつけていたことは後々まで反省すべき点であると痛感した。そしてその影響がそのまま彼の右前肢に。馬事公苑に着いた時は気付かなかったが、翌日に破行がみられ、相当、馬も痛そうでした。二走の前日迄、馬休にし、ひたすら肢を冷し、痛み止めの薬を飼いにまぜて食わせる。右前肢に手を触れるだけで肢を上げ、痛そうな顔をするギャランを見る度に自分を責め、本当に情けない限りであった。しかし、ここ迄来て、試合を棄権するわけにはいかない。またもや、自分が開き直るしかないという状態まで、追いつめられてしまいました。一走目の準備運動では結局、回転・伸縮での推進が馬に伝わらず、障害に向けても力強さを感じ取れない。しかし懸命になって走る彼にこれ以上何もすることができなかつた。本番はいきなり、一番障害で拒止。北日の一走目と全く同じ。障害を直している間に、それまでの緊張の糸がプツリと切れた。もうやるしかない。その後障害に向う感じはとても良く、馬場も広いゆえか、馬は伸び伸びと走行を続けたが10番のリバプールでもまたもや逃避。人間の明らかな油断であった。もう後がない。冷静などという言葉はもうどこかに吹っ飛び、そのまま、なんとかゴール。結果はよくなかつたものの、こんな肢の状態でもゴールを切れたことが半分、信じられなかつた。二走目は一走目のペースを忘れないよう心掛けて走ったが、やはりリバプールでは逃げられまいと気持ちが先走り、落下。最終障害では、焦りから追い出しが早すぎ、踏切りを馬が見つけれず、拒止。満点で還ってこれるはずだったのにと悔まれてしょうがなかつたが、ここまで頑張ってくれたギャランには本当に頭の下がる思いで、改めて自分の愚かさに気付いた。こうして長い遠征を終えて帰札するわけですが、この遠征で得られたことは、大試合での慣れということもさることながら、準備運動のやり方、馬をいかに沈静させて騎手に注意を向けさせるか。たくさんの人馬の試合・準備運動を見て、アドバイスを受けて、勉強になったこと。『来シーズンこそは絶対に』という強い思いなど。たくさんありました。そしてもう一つ、馬術部のOBの現役に対する思いも実感でき、本当に心の支えとなりました。本当にありがとうございました。

以上シーズンを振り返り、簡単に失敗の記録を書いてきましたが、やはり全ての原因は騎手の技術不足もさることながら、頭脳の点においてまだまだ未熟であったことにあると思ひます。高すぎる要求も意味もなく馬に押し付け、そのことに気付くことなく、悪循環を繰り返す。裏をかえせばこうしたことは日頃の練習に望む態度が甘すぎたこと。このことに尽きるのではないかと思ひます。自分の騎乗に酔

うことなく次々に変化する人馬のおかれた状況を適格に判断し、何を為すべきなのか判断すること。そしてそんな感覚を養える様な練習を毎日すること。

北大が強かった時の部報を読む度に、自分はなんていい加減であったのかということを感じさせられます。64年に控えたはまなす団体に向けて道内の馬術界はいまや急ピッチにそのレベルを上げており、我々、学生の立場として、その機会をうまく利用していくことは大切な事ではありますが、そのことばかりに振り回され、一番大切な事をおろそかにしていた事は、落とし穴であったような気がしてなりません。来シーズンも北皇子にのる私がしなければいけない事は、少しでも馬の心理を読み、その上で自分の脚で拳で、そして頭で、調教をする事ではないかと思えます。一昨年より普段の練習体系も以前と変わり、部班を中心にして、一年目から四年目までが騎手の訓練と並行して各々出来る範囲で馬の調教に携わるという考え方になりつつあります。そういうことも頭の中に入れながら、何とかして来シーズンは胸を張って北皇子は自分が調教した馬なのだと言える様頑張るつもりです。もう今シーズンの様なつらい思いは他の部員にも、ギャランにも、自分にもさせたくありません。最後の最後までいいから、北皇子に一花咲かせて、未完の大器を全国にその名を響かせて、去年の償いをしたいと思っています。今シーズンは特に、日常に騎手の筋力・体力アップを図るトレーニングを取り入れると共に、常に北皇子のチーフとして、彼の信頼を得、彼をひっぱっていけるよう、精神的な面での強さを大事に持ちながら、実質、後半年、北皇子と共に全力を尽くして、駆け抜けていきたいと思えます。

ノ エ ル 号



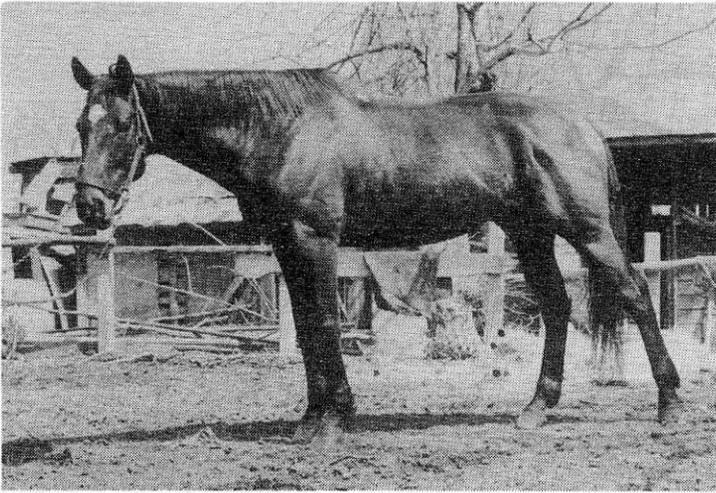
牝 サラ 芦毛
昭和50年4月22日生
浦河郡浦河町産
父 フォルティノ
母 シンクイン
競走名 スパークコルト

大きな鼻、大きくせり出した腹、動きののろさ、まるで蹄のふたつある乳を出す家畜のようだといわれています。しかし、この一年ほど彼女とつきあってみて、なんていい女なんだろうとつくづく思います。他の馬のようにえさをねだったりして露骨に人に甘えたりはしません。人には無関心をよそおっていますが、彼女の目と顔を見てやって下さい。人の方をじっと見つめているじゃありませんか。じ〜んときてしまいます。曳き馬にいて放牧してやります。草を食べます。しかし人間の方をいつも意識していて、の〜えると呼びかければこっちを向いて目で甘えます。他の馬を“動”ととえるならば、のえるは“静”といえるのではないのでしょうか。典型的な昔の日本の女といった感じです。

のえるはもう14才になりました。競馬ではおいやめいが走っています。昨年最優秀3才牝馬に選ばれたシノクロスはのえるのめいになりますし、春の天皇賞の有力候補のタマモクロスはおいになります。めいやおいに負けず、ひと花咲かせてやりたいところです。

馬体的には昨シーズンずっと患った右前肢の骨瘤はよくなったものの両前肢の慢性的な腱炎、また最近になって左後肢の破行をするなど、疲れがみられています。春先に人間の不注意で一週間ほど馬休にしたことをのぞけば、極端に悪くはならないようで、管理面で気を付けてやれば、まだまだ大丈夫だと思います。かといって慎重になりすぎるとは未熟な屋根をのせて試合に出ることはできなくなるのでその辺が頭の痛いところです。引退後は斉藤勝雄さんがまた仔馬をとりたいとのことなので、それまでに、大きな白い花を咲かせるため、努力します。

北銀（しろがね）号



騙 サラ 鹿毛
昭和55年 4月28日生
上川郡新得町産
父 ヤマブキオー
母 ソーゴータカラ
競走名 トカチャマブキオー

吾が輩は馬である。ネームは「北銀」と書いて「しろがね」と読む。通称「ギン」と呼ばれておる。しかし、何時も試合に出る度「はくぎん」と呼ばれる。これは、吾が輩に対する侮辱である。

吾が輩はヒョーキンである。それに男前である。それ故、人間の女の子にも持てる…とっておる。吾が輩の顔には2つの星が有り、鼻に有る星を指で押して行く奴がおる。ニンジンを与えるのかと思うと空の手の平を見せる。だから、まえかきをする。すると、何時も「ギンノ」と叱られる。世の中世知辛いものである。

吾が輩に対する期待も自慢ではないが大きい様である。今年は、吾が輩、馬にとって一番名誉な大会で東京に行った。負けまいと必死で頑張った。皆も喜んでくれ、吾が輩も満足である。

まだまだ、やるぞ！ 吾が輩は！

高野 薫

今ある北銀は去年の陣川兄、その前の半沢先生・名越兄の調教報告と、去年の僕の乗り方の表れだと考え、当然だということも、間違っているかもしれないということも、みんな書いていきます。

乗り始めてまず困ったことは、速歩でびよこびよこ飛びはねることである。どこか痛いのか扶助が悪いのかもわからず消極的になると増々破行していった。半沢先生や陣川兄が乗ると何ともないのに僕が乗ると破行した。「脚と拳のかねあい」「いわゆるハミ破行」だと言われ考えながら乗るのだがうまくいかない。放棄手綱でもびよこびよこ飛びはねた。常歩や駆歩ではなんともなく、又、駆歩や障碍など

大きな運動をやった後だと速歩も良くなる。それならば（心肺や運動機能に無理がこない程度で）どんどん運動の組み立てを変えてやっていけばよかったのだが、頭の堅い僕は、「速歩をやってから駆歩」「キャバレッティをやってキャバレッティバーをやってから障碍」と変に固執してしまって速歩ができない状態では全く先に進めなかった。どうしてよいかわからず、やみくもにキャバレッティを繰り返したりしていた。

原因はやはり脚と拳のかねあいだろう。それと脚への反抗。口をいじりすぎていたことも。脚を使ったら必ず前に出ることを徹底してから徐々にコンタクトを強くして丁寧に乗るよう心がけていくうちにいつの間にか直っていた。

12月の中旬に馬事公苑で総合馬の合宿があり、44国体に向けて道馬連から派遣ということで北銀も参加させてもらった。講習会では系統だてて「総合馬をつくるには…」といったことはなく、あくまで基本的な運動から、必要なトレーニング、方法、考え方、それが全てだった。騎手のバランスの問題など東京のトップライダーの人たちも同じトレーニングをさせられ驚いたが、それだけ大切なのであろう。12日間の講習でガラッと変わってきたわけではないが、その後の運動の基本や指針となり、それにそってシーズンに入っていた。

冬場の運動は練習時間の半分を外乗に費やしていた。構内いたるところで速歩や駆歩をして馬体をよく伸ばしてやるようにした。その後伸縮などもやったのだが、歩度を伸ばすとすぐ興奮して乱れるためあまり長くやれなかった。又、一度興奮すると詰めようと思っても引っ張り合いになり、リズムが乱れていった。こんな状態ではスティーブルを走ったらどうなるのだろうと不安であったが、どういう訳か夏になった頃にはこのような不安は忘れていた。力づくでも押え込めると考えるようになったのかもしれない。ただ伸縮に関してだが、今でも（しかも馬場内でも）急に伸ばそうとすると興奮して踏歩をかえたりして乱れる。全日学遠征中に練習を見てくれた名越兄に言われてハッとしたのだが、乱れるならばそれは突然すぎるわけでもっと徐々に徐々に丁寧にやっていくべきだった。当然のことなのにそれを無視して、馬が乱れると馬のせいにしていた。心がけているつもりなのだが、今でも練習中時間に追われるときなど時々やってしまっちは後悔することがある。常に基本に忠実に。

馬場では主に調教審査のための練習をしていた。今考えると、この頃のうちにもう少し様々な間歩や構成の低いコンビネーションをやっておくべきだったと思うのだが、変に調教審査にばかり固執していた。駆歩の思い通りの発進や、一定のリズム・ペースで走らせられるようになってきたのはこの頃であるが、重いと感じることは四苦八苦した。1月末から3月始めにかけて何度か、学生3dayの調教審査の経路回りをしたのだが、いつも前進氣勢に欠けることばかりが問題で、それ以外のことはあまり考える余裕がなかった。

3月の合宿は乗り換わりを目的としてやったが、乗り換わるとやはり北銀の重いことを実感した。又、他馬では騎手のバランスの悪さや扶助のいい加減さが馬の反応として顕著に表れるが、それが北銀の場合表れにくいので、騎手はついつい脚の強弱やバランスなどいい加減になりがちで、それが更に馬を鈍くしていく原因となっているのだと気づいた。

雪が溶けた頃になると、もう半沢杯や国体強化馬の審査会は目の前だった。どちらも複合に出ることになっていたの、それを意識した練習をしていた。相変わらず馬を推せないことで悩んでいたが、障

碍は興奮することなく自分から向かっていくようになりよくなった。コンビネーションに力を入れようと思いつつ、いつもフラットワークの段階でうまくいかになく時間をとられていた。坂やバンケットなどの昇り降り馬なりに行ってはじめて気分転換とした。乾擦ではよく止まれた。がむしゃらにやっても嫌気がさすだけなので、始めの数日は乾擦の上にバーを何本も置いてあまり中が見えないようにして跳き込まないように飛ばし、少しずつバーを抜いていった。それでも止まるときには止まった。あとはアプローチでいかに馬体を起こして跳き込ませないようにするかという問題であったが、これがわかってきたのはもう少しあとのことだった。

半沢杯。複合の馬場は悲惨であった。人も馬も初めてで緊張してただけでなく、馬が騎手を全く信頼してなく、脚も全く無視されていた。近くにあった乾擦やカマボコ障碍の陰にいた使役を見て一歩も動かなくなったりもした。もう競技どころではなく、いつ失権のベルが鳴るかヒヤヒヤしていたので、課目ごとの運動がどうだったのかあまり覚えていない。障碍は、乾擦に水がたまり乾擦が省かれた。3番バンケットでちょっとためらったのを感じた以外はスムーズな走行だったと思う。

10日後の審査会ではトラケーンで2反し、最終のリバプールでも止まって失権してしまった。トラケーンは十分に馴致していたし、リバプールも水をはっていたわけではないのでショックだったが、一方で他の障碍はすべてクリアし、120cmのコースもまわると自信をもった。調教審査は準備馬場ではわりと落ちついていて、調子もよかったのだが、練習馬場に一回で入ったとたん馬が変わってしまった。本馬場でもあまり思いっきり乗れなかった。しかし半沢杯の時のようなことはなく無難にまわった。

その後の馬場の競技に関して。

場数をこなすにつれて興奮することは少なくなっていった。しかし落ち着きがないと必ず回転で肩から内に入った。そういう時にあわてて内方脚を使ってもかえって反抗するばかりなので、とにかく一度馬体を起こしてやらねばならない。道自馬では明らかに推進不足で、ひどい成績だった。その反省や全日学選手権で感じたことを参考に公認大会ではとにかく前に出し、手綱を短く持った。長くなっても持ち直す。馬が息抜きをしないようにと、弾発のある動きを出そうとした。動きが短節になっていたかもしれないし、伸長速歩の課目になってもそれ以上出なかった。何よりも馬体のリラックスという点において大きく欠けることである。しかし、その時点において最も得点できる方法だと考えてやった。

障碍に関しては相変わらずトラケーンやリバプールで止まっていた。道自馬では十分に馴致していたので、バンケットでちょっと詰まった他は難なくクリアし満点だった。バンケは普段は全く問題なく飛ぶので何ともないはずなのだが、半沢杯でも少し躊躇しており、ちょっと不思議だが、事実として慣れた馬場で二度も躊躇しているので少し気にかけておいた方がよいかもしれない。公認大会ではリバプールで3反失権した。馬との信頼関係がまだまだ出来ていない。更に悪いことに一度止まった後の対処もうまくいかになく、懲戒しても馬がいやけをさすだけでかえってこだわりを持ち、段々近づきさえしなくなった。障碍間一分なんか気になっていたのだが、冷静に善後策を考える余裕がたりなかった。北日のリバプールは小さくて問題なかったのだが、道体ではトラケーンで失権した。全日学の一走目はリバプールで一反。「アプローチでよく馬体を起こし、絶対に跳き込ませず推進」——春からよくそう注意を受けてきたのだが、感覚としてどうしたことなのかやっとわかってきた。全日学直後の秋の審査会では馬事公苑のと同じ大きなリバプールがあったが、一度で飛んでくれた。脚の絶対とか騎手への信

頼というよりは「もう慣れた」といった感じてあった。遠征前に馬場のあちこちに穴を掘ってはシートを敷いて水を入れてリバプールを作ってくれた一年生には感謝している。

ストライドの調整もできなかったが、単一障害に関しては踏切が多少合わなくても脚を使えば遠くから大きく飛んだ。しかし連続障害だと必ず落下につながった。特に17～18mの連続だと3歩半くらいになってしまい、3歩で次の障害を大きく飛ばすとその次の障害をひっかけてしまい、強引に4歩で飛ばそうとしても詰め切れず目の前にせまった障害にやはりひっかけてしまった。練習中にやるときちんと4歩で飛んだ。しかしよく考えると練習中は分速350mも出ていないような気がする。競技のときはやはり突っ込みぎみになっていたのだろう。それをダメだと教えなければならなかったと今になって思う。

運動の組み立てについて。

いろいろ試行錯誤しながら、7月頃になって確立してきた。日々の練習でも試合の準備馬場でも運動の組み立て方はいっしょだった。手綱をとったらよく歩かせる。ゆっくり大きく歩かせるべきなのだろうが、そうするとどうしても馬がだらけてしまい、それを防ぐために脚を使っているとだんだん鈍感になってきたので、多少速めに歩かせた。しかしあせらすのは絶対よくない。巻き乗りなどで少しずつ内方と外方を意識するようになっていく。そのあと前肢旋廻又はその要領で半巻きし、後肢をよく動かすようにした。同じ目的で斜め横歩。うまくはできなかったが、あまり気にせずとにかく肢をクロス。頻繁に後肢を動かさせた後、後肢を体下に踏み込ますために巻き乗り。それから後肢旋廻またはその要領で半巻きし、馬体を起こすようにした。

常歩・速歩・駆歩共、伸縮によって脚の強弱を使い分けて緊張させようとしても難しいので、停止、発進、移行によって脚には従わなければならないということを徹底させるようにした。先にも書いたが、特に駆歩では突然伸ばそうとするとすぐ興奮して乱れるので一定のペースで走ることに十分時間をかけた。

障害は専らコンビネーションばかりやっていた。コンビネーションに入ると挙は柔くついていくだけで全く操作せず、馬が自分自身で身のこなし方を習うようにした。だから構成もどんどん変えていきかけたのだが、時間配分の悪さなどであまり出来ず、今考えともっとオクサーを多く組み込むべきだったと思う。全く操作しなかったのも、騎手は自分の姿勢・バランスの練習のつもりでやった。

キャバレッティバーは飛越後すぐよれるので、まっすぐ向かい、出てからもまっすぐ進むように注意して乗らねばならない。障害に慣れてきたら、オクサーに斜めに向けて、それぞれの後肢をよく引きつけるようにした。斜めに向かうと騎手も馬も踏切りを迷ってしまうので、一歩手前に地上横木を斜めに置くべきだったが、波に乗ってきたところでリズムを崩すまいと思い、そのまま向かっていた。

これらの日々の運動を顧みて思うこと。

第一に馬体の伸展についておろそかにしていた。丸めようとする前に十分に首を伸ばさせ体を伸展しなければならなかったと思う。

体が前後左右ともかなり堅いが、前後伸縮はともかく、左右の柔軟はあまり求めなかった。単独脚の誤解をまねくとまずいと思い二蹄跡運動は斜横歩、肩内くらいしかやろうとしなかったのだが、左右の柔軟といってすぐ二蹄跡にとびつかなくとも、輪乗り・8字乗り・輪乗りの開閉などをしっかりやって

おけば、今はもっとよくなっているはずだと思う。その辺の認識も足りなかったし、総じて地道な運動が欠けていた。

グリッドワークでは先にも書いたが、オクサーをどんどん組み込むべきだった。馬体の伸展をおろそかにしていたことも重なって、あまり首を使わずに飛ぶ傾向もみられた。飛越の弾道はやや低い。原因はスピードで飛ばせていること、騎手が先飛びすること、障害を尊重しないことだろうか。他はわからない。首を使わせるためにも、筋力をつけるためにも、弾道を高くするためにも、これからは小さな障害にゆっくり向かうようにする。ただしそのために緊張不足になるかどうかはフラットワークでの問題。今は地面(雪)の状態がよければキャバレッティバーやキャバレッティオクサーをやっている。

最後に去年の練習で最も欠けていたのは、馬の注意を騎手に向けさせることと、騎手を信頼させる努力である。騎手に充分注意を払い信頼してさえいれば乾擦も飛んでいるはずだと思う。頭ではわかっていたのだが、いざ日々の練習の場で考えると最も難しいことなので、すぐ筋肉トレーニングや技術トレーニングの方に走り、精神的なつながりを無視しがちになった。

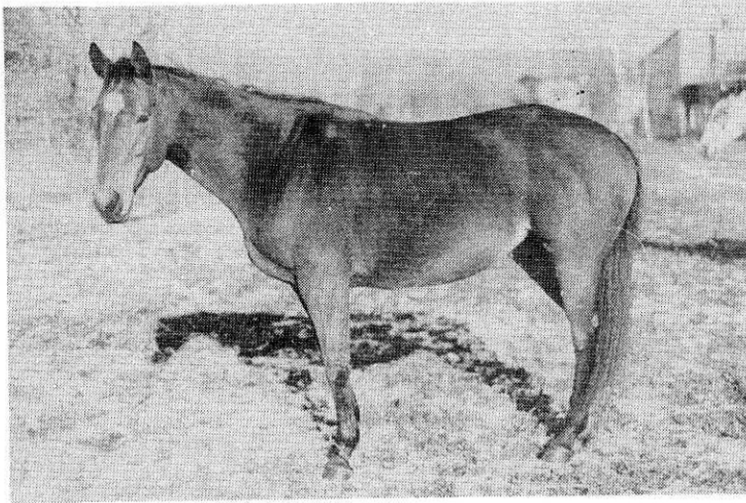
昨シーズン中、不安で仕方なかったときはいつも名越兄の調教報告にあった「積極的に乗っていく限り北銀は絶対に後退しない」という言葉に勇気づけられた。今考えると「積極的」という言葉をずいぶん都合よく解釈していたのだが、十分に吟味した上でのことなら自信をもってやるべきだと思う。今シーズンも引き続き北銀に乗せてもらえることになったので、昨年の経験やこれからの計画をよく吟味して思いきりやっていきたいと思う。

太田装蹄所

☎782-6084

札幌市東区伏古10条1丁目15番5号

北 玲 号



牝 サラ 鹿毛
昭和56年4月8日生
幌泉郡えりも町産
父 ノーザンアンサー
母 クレメンタイン
競走名 クイーンクレメン

お嬢は手入れがたいへん楽で、馬房で治療をしてもいやな顔はあまりしない。曳き馬に行くと突然左手前の巻乗りをして同じ所で草を食う癖がある。いつも馬房でも左手前の巻乗りをやっているのであらうか。臆病なところもあるが、三角地ではスケ番的存在？で、一番偉い馬である。また飼付けの時はぶひぶひと大きな声で鳴く。こういふところから考えると、人間に対して従順でかわいいが、実は心が強い馬なのではないのだろうか。そういえば、去年を振り返ると、試合ではギャランをも追い抜きつつあるような成績をあげている。そしてお嬢はまだ若い。つまりこれからますます成長し活躍する馬であることは間違いない。ところでお嬢は年をとったら何と呼ばれるのだろうか……おぼんorおぼさんor……そんなことはどうでもいい。今年は更に成長し大活躍するお嬢です。

加 藤 ゆうこ

1. はじめに

北玲は、私が北大馬術部に入部するよりも半年早く入厩した馬で、部報№30より調教報告が掲載されている。1年目のころの北玲の印象は、“神経質そうな牝馬”だった。そして“こういう馬とは自分は（相性が）合いそうにないな”と思っていた。初代のチーフはOBの長屋さんで、2代目は佐多姉が引き継がれた。2年目の時、道自馬の新馬障害と、道体の婦人障害（L級）に北玲で出場させてもらった。1年目のころ抱いていた印象はやはり変わらなかったが、でも、一度落ち着くと妙に度胸が座るところがあるのに乗って感じた。その頃から、少しずつ北玲に興味を持ち始め、代が替わり馬配希望をする時

期に、当時主将の服部兄には、「北皇子か北玲に乗りたいです。」と言った。北皇子はドン・ホッパーに次ぐ看板馬で、私が乗せてもらえる可能性はほとんど感じなかったのも、そう言ったものの本命は「北玲」だった。北玲には戦力としての魅力もあったが、牝馬らしくない牝馬という感じがこの頃は強くあり、何となく共感を覚えたからだった。かくして私は北玲の調教担当者となったのだが、私自身、技術的にもさることながら、精神的にもあまりにも未熟すぎ、大切なシーズンオフの冬場に、単なるエネルギー消費のための運動しかしていなかったように今思う。馬を調教するというために一番必要なことは、騎手のメンタルなリードだと思う。それは、馬と接している全ての時に行われるべきもので、それが最も行いやすいのが、騎乗時なのだろうが、乗り始めた頃の私は、ただ時間を食い潰すだけで、計画性も系統的なものも練習の中に見られなかった。その何ヶ月かの騎乗は、周囲の人達にもかなりの不安と悪影響を及ぼしており、悪循環の中にあった私はそれを素直に反省できる気持ちの余裕もなかった。この場を借りて御迷惑をかけた方々にお詫び申し上げます。

2. 毎日の練習

日々の練習は、まず最初に十分に馬体の筋肉をほぐすことを心がけた。北玲は右腰による跛行のみられる時があるからだ。練習最初の30分を外乗にあてたこともあったが、特に冬は除雪車等驚いて突っ走る原因があちこちに転がっており、それを静めるために騎手がどかっと座り込み口を引っ張ってしまうので、「ほぐす」とは程遠い方向になりがちだった。そこで、調馬索運動を取り入れることも行った。ただしこれも北玲の環境に左右されやすい性格により中断しなければならないこともしばしばあった。天候（風の強い日や少し吹雪く日etc）や、他馬の影響で、北玲はいとも簡単にパニック状態に陥るのである。この性格には、一番手を焼いた。私は、北玲に精神的に凶太くなってほしかった。（これは大胆という意味で）それは後々の騎乗者のためにも私自身のためにも、最終的には北玲自身のためにもだった。試合の準備馬場で鎮静のために時間を割くような非能率的なことはしたくなかったのである。このために必要なことは先に述べた「メンタルなリード」だと思う。別の言い方をすれば「人に乗られるということがどういうことかを知っている馬にする」になるのではないだろうか。私自身、2年目、3年目の夏に、全日学の選手権（貸与馬形式）に出場できる機会を得、中央の大学の馬に乗せていただいたことがあるが、ほとんどの馬が跨って手綱を取ると、耳をこちらに向け、僅かな脚に反応して屈撓するのである。騎手の扶助を待つその態度は、決して無理強いされたものでなく、悟りきった感じだった。この経験をしてから、北玲にも機会あるごとにその旨を伝える努力をした。それは非常に低レベルな小さなことからだったけれども、その努力の甲斐あってか、（おそらく、北玲が様々な環境に慣れただけなのだろうが）今では、だいぶん落ち着いてきた。偶然に北玲の慣れが、私の気持ちに一致したにせよ、これは一年間乗ってきた中で一番うれしいことだった。

馬体がほぐれてからは、後肢を動かすことを重点においたフラットワークを行った。内容は巡回指導で村上捷治さんに教えて頂いたことを基にすることが多かった。「後肢をよく動かす」というのもよく村上さんに指摘されたことなのだ。村上さんには、一年間のうち4回、計8日間指導して頂いたのだが、いずれも、単独脚による柔軟運動と、それを元にした伸縮、良い飛越のための良い駆歩が基本になっていたと考える。こうして書いてみると、ごく当たり前で簡単な事のような気もするが、本当にこれらの

ことを確実にこなすのは、私には難しい事だった。北玲はもともと左後肢が両前肢の蹄跡の間に落ちるような歩き方をするために（恐らくこれは右後肢をかばって歩くためではないかと思う）左後肢の踏み込みと右後肢の踏み込みにかなり差がある。これを改善しなければならぬ騎手が、右脚を正確に使えず、それでも何とかやらせようという無茶苦茶な扶助が、例えば、左へ斜横歩をする場合に、頸を極度に右へ、しかも頸を引かないで傾けるような体勢にさせてしまうことが多かった。このように騎手の不正確な扶助による馬の不自然な動き——演技として好ましくない動き——は細かく見ていけば多々あったのだが、最終目標である総合の調教審査の項目を拾っていくことに絞っていたため、見逃していた事もあった。結局そんないい加減な、上っ面だけを拾う乗り方では真の演技ができないことは、全日学の調教審査で全て出た。

フラットワークを煮つめる日と、そのあと障害練習に移る日とがあったわけだが、一年間を通じて、障害練習が不足気味だったような気がする。またその内容に関しても、ステップを踏んだ向上性のあるものは少なく、その場限りで終わってしまうような不十分なものだった。これは、私の苦手意識に外ならない。このためシーズン中の試合でも、特に連続障害において完飛することは少なかった。普段は、ほとんどキャバレッティバーから始め、そのまま数を増やしてコンビネーションにしていくパターンで馬の障害飛越のリズムを中心に考えていた。しかし巾や高さに変化がなく、ワンパターンになっていた気がする。毎日高い障害を飛ぶ必要は全くないと思うが、時にはボリュームのある連続障害の練習もするべきだった。北玲にしてみれば、試合の度に、今までに飛んだこともないような連続障害に向わされ「?!」と思ったことだろう。しかし健気なまでに私の「飛びなさい」という脚に反応して勇敢に飛んでいてくれた。試合前の練習では、経路廻りや、苦手障害（特に乾藪やトラケネン）の馴致に努めた。

障害は、騎手の随伴の悪さや、踏み切り地点・追い出し地点を見る目がなかったことから、踏み切りはバラバラで、力んだ飛越になっていた。北玲が障害前に徐々にストライドを伸ばしピタリと踏み切りが合って楽な姿勢で飛越をしたのを感じたのは、全日学前に馬事公苑で練習していた時だった。今もってあの1回限りであるが、あの感じが本来求められる飛越なのだと思う。そういう飛越では、始めは騎手の介助が必要なのだろうが、経験を積むことによって馬自身が会得するような気もする。これは道自馬のM級Cに北玲と北皇子の二頭乗りをさせてもらった時にこの二頭を比較して感じたことだが……。最終的には、障害前で無理矢理追って、それまでの駆歩のリズムを崩してはならないのだから。このことが実感として、ぼんやりとしたものだったが、わかりかけたのが北日学の頃からだった。それまでは「行け」の脚に対してとにかく行けばよしとする——といった感が強くあり、クリアーよりもむしろ「通過」に近かった。苦手障害に対しても、そういった順序立てた積み重ねなくして「通過」を要求していたため、馬が覗きこんで飛んでおり、騎手に対する信頼感がなく、がむしゃらに突っ込んでいくような飛越だった。このことを馬場にいつも来られる長屋さんが指摘して下さったのは4月25日だったが、本当に実感として理解できたのは半年も後だったわけで、改めて、自分の感覚が研ぎ澄まされていないことを痛感した。

北大構内や馬場近辺への外乗は、冬期間は困難なものだった。北玲にとって馬術部敷地のみが安全圏で、それ以外の場所は全くダメだった。たとえ常歩で歩いていても頸を高く上げ落ち着きのないセカセカとした歩きでしかない。極度の興奮に達した場合、人が乗っているということも北玲の頭の中

にはないようだった。しかし雪がなくなるに従って、また北玲と私の関係が良くなるに従って、安全圏は拡張された。またシーズンに入ってから、他の馬場への馴致も機会あるごとに行ったので、環境の変化により、精神状態が混乱する回数も程度も少なくなっていた。

3. 試 合

次に乗り始めた頃の昭和61年9月から翌年10月までの各試合での簡単な状況を記す。

・昭和61年10月5日 国体選考会（於：百瀬ファーム）

中障レベルなので、まだ私には無理だと思い、長屋さんに乗って頂いた。一走目は乾擦・水擦で拒止したが、二走目は見事に満点でゴール。北玲の実力レベルをはっきりと見た試合だった。

・昭和61年11月9日 山下杯（於：酪農学園大学馬場）

中障に出場し、失権。全てにおいて思い上がっていたし、甘かった。準備運動も話にならないような内容。北玲と私のスタート地点となる試合であった。

・昭和62年5月5日 半沢杯（於：北大）

5月16～17日 国体選考会（於：百瀬ファーム）

学科の実習中、不注意で私が怪我をしたため、5月上旬は騎乗していなかった。この2つの試合も、出場できず、シーズン最初からこけてしまった。

・昭和62年6月27～28日 道自馬（於：百瀬ファーム）

三級馬場とM級Cに私がエントリーし、飛越回数に同輩の中野君が出場した。飛越回数が一番最初にあり、中野君と話し合いの上、大まかな準備運動は私がやることになった。シーズン最初となった試合の準備運動ということで、北玲も私も初めは落ち着かなかったが、比較的早く納まりがついた。飛越状態も、非常に切れのよい踏み切りをしたようなので、良かったのではないかとと思っている。本番でも、ペースやリズムも安定していた方だと思った。しかし、翌日のM級Cの準備運動は、前日のものと比べると今一つ足りない感じがした。馬以上に人が経験不足で、そのような状態でなす術を考える余裕がなかったため、「今一つ……」を引きずったまま本馬場へ。結果は一反二落。ダブルのAを大きく飛び、騎手がバランスを崩してしまい、あっという間にBが目の前にあったというお粗末な反抗のさせ方だった。前チーフの佐多姉からは、もう少し速いペースで良いのではないかとアドバイスを頂いた。騎手の上体が、かなり前後に振れるため、本人が思っているほど推せていないことを再び認識したが、これ以外の試合でも、ペースが遅いことによる数々の失敗があった。

馬場の試合は、北玲はこれが初めてだった。興奮気味の状態をだまされだまされ乗っていたような感じで消極的内容に留った。場数を踏むことで慣れるだろうと楽天的に考えられる要因もあったことは確かだが、姿勢が悪すぎることや推進不足は、大きな問題点として残った。

・昭和62年7月18～19日 公認（於：北星乗馬クラブ）

三級馬場、標準中障、石川弟が小障にエントリー。標準中障は、二落下でなんとかゴールし、2日目の中障害選手権にエントリーできることになる。選手権は一落下だった。落下の原因は、踏み切りが合っていなかったことと、着地時の騎手の起き上がりが早いことだと思う。選手権は、標準中障よりも10

cm上がると聞かされ、果たして無事にゴールできるかと多少不安になったが、標準中障の走行を終えた時点で「もう止まる（拒否）ことはないだろう」とかなりの確信があったので、落下はあっても必ずゴールする自信はあった。しかしこの2つの走行は、減点0で帰ってこれる範中にあったわけで、そういう意味では、非常に悔いが残った試合だった。

馬場は、道自馬の時よりも悪かった。試合後、多くの方々からアドバイスを頂いたが、共通していたのは「拳をいじりすぎている」であった。北日学前の試合だったので不安を感じたが、逆に悪い部分のはっきりとしたため、この後の練習内容を絞ることができた。伸縮と斜横歩、発進と停止の4つだけを目指した。

・昭和62年8月7～10日 北日学（於：北里大学馬場）

総合を目標としていたため、もともと二走に出るつもりはなかったのだが、公認の結果や、今年の一回路行（中障害）はそんなに高くないということで、両方にエントリーすることを決めた。

北玲が道外の馬場で試合に出るのは初めてだった。道自馬や公認は、言ってみれば慣れた土地での試合である。全く見知らぬ土地で北玲がどう変わるか、非常に気をもんだ。しかし着いた翌日からの曳き馬などでも、多少キョロキョロとするものの、北大の他の馬達と離れても平気で歩く。開き直ったようだなと思ったと同時に、「少しは私を信頼してくれているのかもしれない。」と内心嬉しかった。

中障害（二走）の一走目、準備運動での手応えは良かった。経路は、全日学のもと同じコース取りだった。1番、2番と6番の芝カマオクサーを見たが、それ以外は前進氣勢が感じられた。二走目は一走目よりも踏み切りが合わず、かなりバラバラだった。騎手が無理に踏み切りを合わせようとして、却ってその事が裏目に出ているとも言われた。しかし、馬のペースは、二走目の方が良かったようだった。馬体が小さいのだから、やはり多少勢いをつけて飛ばしてやらねばならないようだ。一走目は遅かったように思う。障害がそんなに高くなかったことが幸いして、二走行とも減点0。一度はあきらめかけた「北日で権利を取る」ことに手が伸びただけでなく、ジャンプ・オフにまで残ったのは、何とも言えぬ不思議な気持ちで、改めて北玲の実力に感服したのだった。

二回路行が終わった日の午後、2年目の仲村弟が三級馬場に出場した。これは仲村弟のためというよりも、結果的に見ると、北玲の馴致のためだったような気がする。障害飛越の後だったので、準備馬場でも北玲は興奮気味で、鎮静してゆっくりのペースで走らない。下乗りしていた私と、仲村弟に、審判員として来られていた小野さんがアドバイスを下さった。「内方脚は、もっと強く使う。後退前の停止は一呼吸おく。駆歩のシンプル・チェンジではきちんとハミを入れ替える。」の3点が主なものだった。

総合の調教審査は、前日の三級馬場の馬の状態があまりにも悪かったので、目標としたのは、鎮静・リズム・推進氣勢・従順——つまり総合観察の内容にした。日ごろのフラットワークの内容をメインに行い、経路内容の項目を1つ1つチェックしていくように心がけた。それまでの馬場では最も良い出来だった。しかし番大の柏星よりもよかったというのは、信じられなかった。耐久は、全体的に見るとリズムの良い走行だったが、スキージャンプと2回の川飛び込みでは躊躇が見られ、川飛び込みの1回は水窟のように飛んでしまったし、もう1回は止まってしまった。水の中に肢を突っ込むことかなりの抵抗があるようだった。飛んでしまった方の川は、幅が狭く、もともと北玲は飛び込むつもりがなかつ

たようだが、もう1つの川は、手前にドラム管が埋めてあり、どうすればよいかわからないと言った顔をしていた。要領を覚えれば今後は大丈夫だと思う。余力は、文字通り最後の力を振り絞っての走行だった。準備馬場でも前肢が上がらずに止まるのが2度あったので、本馬場では、勢いをつけるためスピード走行にした。少しフラットな飛越だったが、どうにかクリアした。

全てが上手く行きすぎて怖い遠征だった。

・昭和62年8月29～30日 道体（於：帯広畜産大学馬場）

総合にエントリーしていたが、北日後からずっと右後肢の跛行が治らないままだったので、調教審査のみに出場。三級馬場に2年目の湯浅妹が出場。湯浅妹はともかく、これで4度目の馬場を踏むというのに、北日の時を上回るところか、かなり下回る結果だった。

・昭和62年9月6日 市民大会（於：北星乗馬クラブ）

小障害に湯浅妹が、ジム・カーナに1年目の岡崎妹と小林妹が出場。北大の馬場以外で下級生を乗せても、安心になった頃だった。

・昭和62年9月18～20日 東日本（於：山梨県馬術競技場）

17日に『フレンドシップ』なる練習試合が行われた。『信玄橋』——太鼓橋の形をした箱障害の下にリバプール式に板が置いてある障害——で一反。これは覗き込ませた私が悪かった。中障害スピードアンドハンディネスでは4落下。標準中障害で2落下。中障害選手権も2落下だった。障害は、高さも幅も今までとはひと回り違った。それ故、踏み切りの合わなかった障害はほとんど落下してしまった。横浜からわざわざ応援に来て下さった名越兄にも、もう少しペースが早くても良いのではないかという事と、踏み切りの不安定さを指摘された。私自身も、踏み切りが読めず苦勞した試合だった。

・昭和62年9月29～10月4日 全日学（於：馬事公苑）

山梨での東日本終了後、ずっと馬事公苑に滞在できたため、試合開始日までに環境に慣れ多少リラックスもしたようだった。

二回走行の一走目は、4落。二走目は二落と人馬転倒。二走行とも最終障害をまともに飛べなかった。一走目は、やはりペースが遅かったことが一番の失敗原因であった。二走目は、一走目よりも良いスタートを切るが、最終障害の前のダブルで鑑がはずれ、斜三段飛越中に騎手がバランスを崩したのが原因で、着地と同時に人馬転。この後、北玲が障害に対して臆病になったり、人に不信感を抱くのではないかと不安になったが、何故かケロツとしていた。斜三段を飛びきれなかったのは、踏み切りの問題もあるが、日頃の幅障害の練習不足もあるのではないかと思う。

1日休みが入り、総合の調教審査。準備馬場のすぐ横で覆馬場の工事をしており、集中力に欠け、鎮静状態にならなかった。人も少し焦っており、全くダメだった。結局、本馬場内でもちょっとしたことに驚き、頭の中が混乱しきった私は経路違反をしてしまった。充分推進されておらず、北玲の状態は『中の下』だった。そんな状態でいくら演技をしてもボロが出るだけだった。鎮静にしろ何にしろ全ては推進に比例するのに、そのことを忘れて、小手先で何とかしようとしていた。耐久は、前半好調だったが、飛び上がりの石垣の手前で逃否され、脇の砂山に突っ込みかけ人馬転。ちょうどコースの半分のところだった。北玲も私もリズムを崩してしまい、その後も（これは私の体力不足が原因で）一落馬、一反抗に終わってしまった。前半、調子に乗ってスピードを上げすぎたのも失敗の一つである。北玲も気

持ちの余裕がなく、せき立てられるように飛んでいたため、目の前に暗い森が出現したとき恐怖感が走ったのではないかと。また、私自身も、もう少しゆっくりとしたペースであれば、躊躇に対処できたはずなのだ。でも一番感じたことは、情けないが「騎手の体力不足」であった。また、北玲にも、もっとスティープルに慣れて、楽に飛んでいくことが必要だと思った。余力——前日の無茶苦茶な耐久にもかかわらず、北日学の時ほど疲れている様ではなかった。総合の3日間のうちでは準備運動も落ち着いていた。もちろん疲れもあったろうが……結果は、トリプルのB（オクサー）を落とすだけで済んだ。二回走行でも、耐久でも、悲惨な目に遭わされていたのに、北玲は、本当に素直によく飛んでくれた。北玲の勇敢な態度と、その努力には、ひたすら頭が下がる思いである。そして北玲の実力を、肝腎の槍舞台で出しきってやれなかった自分の技量の無さが最も反省すべき点である。

4. これから

北玲に、もう1年乗ることになった。今までの1年間には、かなりの無駄使いがあった。「もっと早く〇〇に気付いていれば……もっと早く××していたら……と後悔した事は、数知れない。馬を変えていこう、良くしようと考えたとき、まずやらなければならない事は、私自身の頭の中が変わり、技術的に上手くなることだと思った。北大以外の場所で馬に乗るという経験は色々な意味でプラスになる。OBの水野さんの御紹介で、私も、昨年12月下旬の5日間、栗東トレセンの乗馬苑で乗せて頂く機会を得た。頭の前から足の先まで、基本姿勢の悪癖を指摘され、その改善を中心に練習することができた。また様々な話を聞く事ができ、それまでの私の知識の中で曖昧だった事のいくつかが明確になった。1つ脱皮できた5日間だった。

あと3ヶ月もすれば、またシーズンが始まる。半年後には北日学がある。昨年の失敗をどう生かすか。これまで私にアドバイスを下さった全ての人の意見、栗東での5日間の経験を元に、現在やっていることを書くことにする。

馬に求める事は「柔軟性とバランス」だと言われた。練習内容もその事を踏まえたものになろうと思う。頭頭の姿勢が形だけでなく本物になること。軽いコンタクト、口を閉じた泡をふくハミ受け——私の拳の固さから舌を出す癖がついたので——。頭が下がったら、次に馬体を起こすこと。そして軽いコンタクトを維持したまま、馬場の経路を踏んだり、障害を飛んだりできるようになること。総合馬として少しでも安定した馬になるために、馬場では、左右均等な屈撓を中心に、耐久・余力に向けて、瞬発力と持久力、踏み切りの安定、一定リズムの駆歩を目指す。具体的な方法は、これまで書いてきた中にある方法に、収穫した内容を折り返していきたくて考えている。

もう1つ「扱いやすい馬」にすること。色々な意味で、北玲に「いい馬」になって欲しい。現在、北玲が扱いにくい馬だという事ではない。今よりももっと良くなって欲しい。手入れの時、止むを得ずできたケガを治療するとき……まだ北玲から信用してもらっていない面がたくさんある。それらを少しでも埋めていきたいと思っている。十分な信頼が得られれば、それだけ騎乗時にもメリットが増えるはずだろうから。

5. おわりに

考えて書いてきたつもりでしたが、読み返すとくどいことに気付きました。締め切りを4回も延ばしてもらった以上、今さら書き直す事もできません。1～4まで常体で書いたのも、長くなることを予想したための事なので、御了承下さい。

最後になりましたが、岡田監督を初め、指導していただいた全ての方々に厚くお礼申し上げます。そして現役の皆さん、皆の力で、北大馬術部の馬達に一花咲かせましょう。人が馬に接する時全てが“調教”になっていることを忘れないで下さい。

飼い桶・水のみ桶・荒物一式

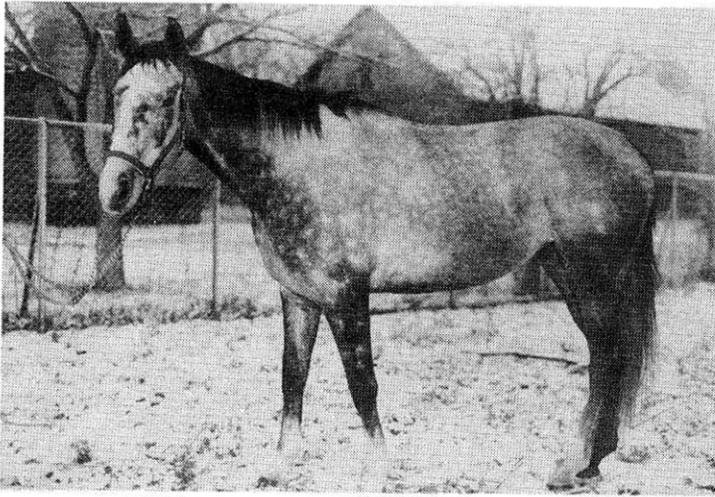
柳 橋 商 店

札幌競馬場内

☎ (店) 011-747-7706

(自宅) 011-644-3021

北 凜 号



牝 サラ 芦毛
昭和57年4月8日生
浦河郡浦河町産
父 ゼダーン
母 ヤマニンパペー
競走名 ヤマニンスプリング

スプリングは、何だかギャグをやってしまう。デビュー戦では、仮馬房で、隣の荷物置場に入り込み、飼料をむさぼり、荷物の上にポロをし、鞍に蹄の跡をつけていた。その日、彼女は飼を減らされた。しかし、そんなアクシデントもものともせず、堂々と彼女は帰ってきた。かまぼこをまたぎながら。試合って何なのかわかってないという話もある。しかし、試合でも大して平静と変わらない彼女は凄いと思う。これからが楽しみなスプリングです。がんばれ！スプリ！

服 部 雅 史

馬配を発表しようという日の前日に事故を起こして入院し、しばらく乗れないまま名前だけのチーフとして、前チーフの山田さん及び部員みんな、そして北凜には大きな迷惑をかけてしまった。クラブの馬としての北凜の調教者として、自分が成し得たことというのは、まだまだ不足していたと反省することが多い。

スプリングの素質は、素晴らしいものがあると思う。若干脚が弱く、怪我の直りが遅いことなどを除けば、将来的にも、ひいきめなしで非常に魅力的な馬である。脚に対しても銜に対してもバランスに対しても、全てに敏感な馬である。これはスプリングの持って生まれた良い素質の一つである。それだけに調教する人間には繊細さが要求される。さらに、物おじしないというのも、この馬の優れた素質の一つである。デビュー戦に備えて、何度か試合場に連れて行って準備馬場で乗ったりしたが、最初の半沢

杯のとき、準備馬場でビビってどうしても落ち着かなかったことを除けば、あとは、新馬にしては非常に落ち着いていた。図太くて気の強い馬である。

スプリングに乗り始めた頃、馬が既に教えられていたことを、自分ができるようになるまでには時間が必要だった。最初は、暗中模索という感じで、何が何だか良く分からなかった。何かやろうとする度に実に乗りにくい馬だと感じた。どうしたら馬は人の扶助を理解して覚えてくれるのか、一つのことを教えるのにどれくらい繰り返してどれくらいの日数かかるのか、そしてどこまで要求して良いのか。自分がいかに馬と言うものを知らず、いかに下手かということ思い知らされた。一年生に戻ったつもりで、最初からやり直すつもりでやることにした。やっとスプリングが自分にとって乗り易い馬になってきたと感じ始めたのは、4月も中頃のことであった。

馬に我が儘をさせないよう、しかし、さらにその上で馬に嫌気を起こさせないよう、——これが、この馬を調教する際にいつも念頭に置いていたことである。気が強く強情なところがあって、油断をすると我が儘を強引に押し通そうとすることがある。だからといって、これも駄目あれも駄目と、ただ押し付けるだけの態度では、馬の方も嫌気をもよおしてしまう。山田さんによく言われたのは、人の扶助におびえるような馬にするなということだ。これは大切なことだと思う。馬の気持ちに対してもっとも繊細になること。我が儘ではなく、人の言うことを聞かせた上で、馬をいい気分させてやることを考えていれば、馬は必ず良くなる。調教とは、一言で言えばこれに尽きると思う。

練習の始めには、必ず毎日20～30分程度シャンプーをつけて調馬索を回した。初期調教において、シャンプーをつけて調馬索で調教を始めた馬である。口が敏感で許容量が小さく、やや頭が高いので、もし、自分の拳ではどうしてもうまく行かずに悪くなる一方で、窮地に立たされたときは、シャンプーに戻ると良いと思う。

すぐに頭を上げる癖があって、これには少し手を焼いた。銜を前下方に持っていくことが良いことで、頭を上げて銜に突っ張ることは悪いことだということを馬の頭にたたき込まなければならない。頭を上げたとき強く持って、下げようとする瞬間に譲ってやる。一種のオペラント条件づけである。頸の形のみこだわって、無理矢理譲らせても、背中がくぼんでいれば、頸から背中にかけて筋肉の緊張を来たし、結局のところ、変に体のこわばったぎこちない動きしかさせられないだろう。頸を下げて、背中を伸ばして、リラックスした状態から、ゆっくりと銜を持って馬を起こしていくのが大原則である。お尻（後軀）が下がって来るまでには長い年月を要するのであろうから、焦って急ぎすぎないことが大切だと思う。拳の不安定な下級生が乗っても頸が安定している様な馬であるに越したことはないが、口の敏感さを犠牲にしない限り当分の間これは無理難題かもしれない。

口ばかりに気を取られて、脚に対する反応におろそかになっては本末転倒である。もともと脚に敏感な馬であるが、脚に敏感に反応しているかどうか、常にチェックしていなければならない。脚に反応しないときは、思いきり懲戒して良い。拍車や鞭に対する拒絶はないが、多用しない方が良いことは言うまでもないし、またその必要もないだろう。

左右の固さの片寄り、若干あるが大した差ではない。いま思うと、左右の片寄りというのは、馬の生まれつきのものばかりではなく、騎手の乗り方による影響がかなり大きいような気がする。ただこの馬の場合、直進安定性に欠けることが気になる。これについては、直線区間ではまっすぐに歩かせる、

回転ではお尻を外に振らせないで輪線上をきちんと歩かせる、といった基礎的なことを繰り返し徹底的にやるしかないだろう。

障害に対しては、今のところ、全くこだわりを持っていない。障害を飛ぶこと自体に対して、全く抵抗がない。これは、この馬の良い素質と、山田兄の初期調教の成功を証明していると言える。目新しい障害に躊躇することはあっても、膠着することはない。飛越自体は、上手いとは言えない。足捌きに不器用さを感じる。乗っていると、足をバラバラにして飛越しているような感覚がある。小さな障害を繰り返し飛ばせて練習を積むしかないだろう。日頃の練習で障害を飛ばすときは、普通、高さ60～80cm、2～4個程度のコンビネーションの前に踏み切り用のバーを置いたものから、次第に間隔を広げたり数を減らしたりして、馬自身が踏切を覚え、単一障害でも全く抵抗をなくする様心がけた。障害に向かうとやや頭を高くするが、これは特に問題はないと思う。

7月に北星乗馬クラブで行われた公認大会での新人新馬障害がこの馬にとって初めての試合となった。6月に北大主管で行った道自馬でデビューさせる予定だったが、このときは準備が十分に間に合わず、無理をして悪い印象を植え付けても困ると思って大事をとった。初めての試合はまあ順調に行った。準備馬場でも、本馬場でも、かなり落ち着いていて安心した。経路走行中、カマボコの前で減速したときにはもう駄目かと思ったが、脚を使い続けたらその場から飛んだ。馬のパワーが証明された一方、随伴できなかった騎手がお粗末だった。誘導ミスで落下があり、結局一落だった。走行は落ち着いていて、ペースも理想に近かったと思う。デビュー戦としてはまずまずの首尾だった。

8月初めの北里大での北日本は、3級馬場と新人新馬障害に出した。馬場は、反対駆歩など十分に出来る状態ではなかったが、試合でどこまでいけるか興味深かったし、試合慣れさせるためにも出した。馬場の試合に出て感じたことは、停止、発進、回転、移行、直進といった基本的な運動を、日頃からもっと丁寧に徹底にやらなければならないことだった。障害の方は、障害自体が小さかったこともあり、躊躇する気配もなく、ペースもまあまあ良く、至極良好だった。

8月末の帯広での道体は小障害に出た。この時は、カマボコで一反抗されてしまった。確かにカマボコを見て躊躇し、止まったのだが、あの時もっと押していたら、おっかなびっくりながらも飛んでいたのではないか、という気がして後悔された。2鞍目に大歳弟が満点でゴールしてくれたのが何よりも救いだった。

スプリングには、今後まだまだ教えなければならないことがたくさんある。また、その甲斐のある馬だとも思う。試合場の馴致は何度もしたが、水壕や乾壕、バンケットの馴致、野外の馴致などはまだ未開拓である。そしてフラットワークでは、伸縮、反対駆歩、ハーフパスなど、総合馬、或は障害馬としてさえ求められるべきことは多い。馬体的に、そして、図太い反面精神的にも、デリケートな馬だが、それだけに面白いし、また、将来的にも有望な馬だと思う。

スプリングには数多くの大切なことを教えられた。馬の調教というものは如何にしたら良いか、そして、試合での勝ち負けという問題を超えて、馬を調教するということが如何に面白いことかということ、を彼女から教わった。

スプリングに乗っているときは、本当に面白かった。日に日に変化していく馬に、調教の喜びを感じた。

本当は、スプリングは、2頭乗りとしてではなく、全力で本気で乗ってみたいと思った馬であった。2頭乗りなんてしないで済めばそれに越したことはないと思ってはいたのだが、その頃、部員は少なく馬が多く、かなり切迫していたし、1年間乗ってきたドンとならば何とかなるかもしれないという思いもあった。

しかし、正直言って2頭乗りというのは辛かった。後輩には絶対に勧めたくないと思う。上手い人というのは、跨った次の瞬間にはその馬を把握して心を開いてしまうのだろうけど、下手くそな自分などは、技術的な不足分を、熱意や思い入れ、気合いなどといったもので補うしかない。これは非常に大きなことだ。1頭の馬にそれぞれもっともっと構ってやれたらと歯痒かった。

スプリングに教わったことに比して、彼女にしてやれたことは、今になってみると、ほんのちっぽけなことの様に思われてならない。しかし、今後騎手にさえ恵まれれば、北稟は、これからの北大の看板馬になる可能性を十二分に備えた馬である。今後の活躍を願って止まない。

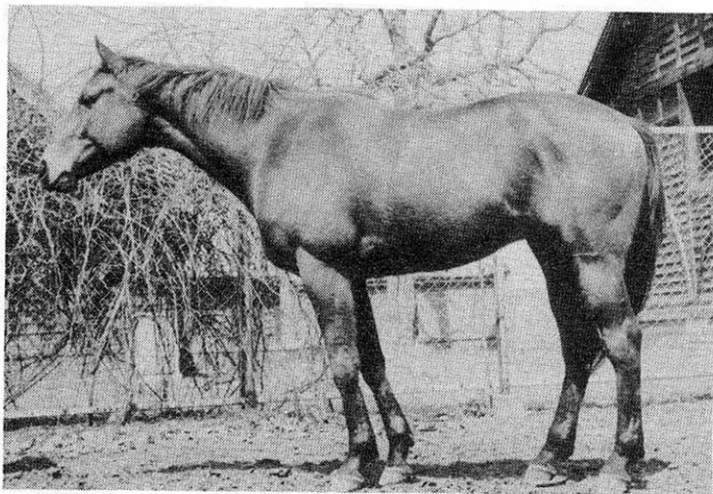


緑が私たちのカラーです。

GREEN SPIRIT, JRA.

日本中央競馬会 札幌競馬場

北 駿 号



騙 ア・ア種 鹿毛
昭和58年4月3日生
北海道三石郡三石町産
父 トップホース
母 プルコワヒメ
競走名 チャフルガイ

チアフルは北大の馬の中で、一番鼻づらのきれいな馬です。あの鼻をみると、ついなでてみたくなります。始めチアフルはえさをもらえと思ったのか、鼻を手のひらにくっつけますが、えさが無いと解かると、ブイッと顔をそむけます。そこで執拗に触ろうとすると、耳をぴたっと伏せ、今度は噛みついてきます。

マリナ、スーパーが抜けた現在、チアフルが一番の暴れん坊になってしまいましたが、キスをくれたりするととてもかわいい馬です。一部で若干の響聲を買った、ハートマークの無口も板に着いてきて、これからは、長屋さん、石川兄の超まじめ人間のお二人の力で急成長し、やがては北大馬術部の看板馬となり、バリバリ活躍すると確信しています。

長 屋 清 隆

北玲を調教した時は、すぐ使いものになる馬がほしいからと、1年で仕上げで現役と交代する約束で乗った。牝馬で手頃ではあったけれど、やや急ぎすぎたかなという気がしたし、フラットワークに関しては中途半ばな状態だった。

北駿は“エビ”という爆弾を抱えていて暫く様子を見ざるを得ず、また部馬にもやや余裕が出てきたから、どうせ乗るならエース候補にとの考えから、2年間騎乗する事で服部前主将の依頼を引き受けた。アラブレースでは抜群の成績を残した馬だそうで、おっとり構えているようで意外と強情な面もあり、馬格はさほどでもないが、駈歩で少しスピードを出すとその迫力はさすがと思わせるものがある。

個人的趣味から言って、不細工ではないが二枚目には1、2歩手前の顔。勝ち気という点では物足りない。

故障の予後の為、当初からシャンボン併用の調馬索運動を騎乗に優先した。

銜に支点を持ち、リラックスしてバランスよく運動させるのに充分効果があった。新馬にシャンボンを使用するのは非常に良いと思う。

現在はシャンボン使用の段階は卒業したとみなしている。

僕が学生の頃は逆鞭を使うなどして、とにかく馬は頭を下げて背を使って、というイメージが常に念頭にあって、それはそれでいいのだが、新馬の段階を過ぎてもそのままだと障害の経路走行では乗りづらい。むかしむかしのオリンピックみたいに、広い馬場にダブルもトリプルもない素朴な経路ならまだしも、回転がきつくて助走距離が短かったりすると、馬の体勢が低いままではボリュームのある障害はクリアするのに困難を伴う。

従って徐々に前駆を起揚させたいが、調馬索でそれをやる自信はないので騎乗し、必要以上に頭を下げすぎないようにすると共に、後駆の踏み込みにも注意を払う。

ただこれは、経路を“通過”ではなく“クリア”させるようにする為の下準備なわけで、学生も同じようにすべきかどうかとなると、甚だ疑問。

最上級生でさえ踏切はその都度バラバラ、必要最低限の随伴もおぼつかないのだから、そちらの方が、先決問題だ。

さて、調馬索運動に進歩がみられるようになった頃、平行して短時間ではあるが簡単な徒歩調教も試みた。馬の横に立って手綱の端を持ち、内方後肢を踏み出す直前に長鞭を使用して踏み込みを良くするなど。騎乗して同じ事を教えるよりも覚えが早く、効果的だったと思う。

障害の方は、器用とは言えない。左右の手前に得手不得手は全くないと言ってよく、無頓着でもないのだが、ぎりぎりを飛ばそうという省力意識がいつまでたっても頭に浮かばないらしい。

たかだか90cmの正オクサーを飛越するのに、M級B以上の随伴をせねばならなかった以前に比べれば多少の進歩はみられるものの、いつになったらムダに気づいてくれるのやら。

色々な障害物の馴致はこれからだが、今まで無茶をさせていないので、アプローチでコントロールミスしなければ問題はないと思っている。

先日、バーのみで構成したコンビネーションにいきなり部員のジャンパーをぶらさげて様子を見てみた。1回目はさすがにかなりビビったが、舌鼓と推進でなんとか通過したところを見ると、支配下にあると思っているうちは止まったり逃げたりという考えは浮かばないようだ。

学生の馬としてはいちおう合格。扶助をあれこれ教える以前に、こういう面を大事にしたい。

チアフルは、僕に対するのと部員に対するのとで態度を明確に使い分けているようだ。僕の前では、殆んど借りてきた猫になる。内心可笑しくて仕方がないのだが、これも彼なりに身につけた知恵なのだろうし、学生の傾向を反映しているのかどうか（ひょっとすると僕もその中に入っていたりして）。

それはともかく、馬の方は楽観視しているのに比べ、乗り手の側の展望はいささか暗い。

北玲の時よりも暗い。チアフルにとってのボスになってほしいんで、学年も男女も問わないが、技術は

別にして、1、2年目の中にそういう個性があるかどうか。

というわけで、以下は調教報告に関係なく勝手な事を書かせてもらう。

ライスボウルを沸かせた京大アメフト部に関する記事をあれこれ目にした。何年も前から興味を惹くものがあったのだが、同じマイナースポーツでありながら、馬術界の将来性のなさにつくづく腹が立ったのはこの際おいといて、今年も台風の目であったQB東海は、筋力をつける為にサンダルの後ろ半分を切り落として履いていたという。これは一例であろう。うんと我が強くて我儘な行動をとるらしい。「新人類」世代なのになかなかやるじゃないかと思ったが、そうじゃないと考え直した。

競技者として強くありたい者にとっては世代も何もなく、やるべき事をやるのは当然で、団体・個人を問わず、我が強くなきゃ競技選手なんてやってられない。

20歳代の若者は50～60歳代並に保守化しているという調査結果があるが、実感としても全くそのとおり。現役のOBその他に対する態度も、彼らなりの礼儀を保っているけれど、それは部生活での厳しさをベースにした謙虚さではなく、単なるへりくだりに映る。

目の前を物も言わずに通過ぎた下級生が、上級生の挨拶の一声によって、ふり返りざま「お早うございませーす！」と実に爽やかに言い放つ、これ即ちおうむ返しと言う。上級生の「号令」がある時は見事だが、それがないとタイミングが狂うのか不発に終わる。

ガキだなあと思う事はあっても若さを感じない。しかも男子にジジ臭いのが多い割には女子はそうでもないというのは、今の世の男と女のエネルギーの差、トレンドなのか。

話は変わって、馬場運動もしくはフラットワークを念入りに練習するのはいい事だ。障害しかやらない僕もその重要さは良く知っている。いや寧ろ、競技歴を重ねれば重ねるほど、フラットワークの必要性をいよいよ身にしみて感じていると言っている。道内のレベルではまだまだだが、オールジャパンや東日本クラスともなると決勝は満点でジャンプオフが当たり前、それも1秒単位の争いとなれば、回転の1歩の違いが直接響く。従って完璧なまでのコントロールが要求される。

だが学生のレベルはそうか？ 全日学二回走行でも、せいぜいこここの間を回ろうぐらいが関の山なんじゃないの？ 何歩で回らなければ負けるという状況までならない筈だ。

まして北大サンは昨年、障害に突っ込んだだのハデに落下したただでサヨウナラだったではないか。落下を防ぐ、反抗させない、そうすれば全日学でも勝負に参加できる。完璧にコントロールできなくても、北皇子や北玲ならば学生レベルでは満点馬に近いと言っている。

それなのにいまひとつパツとしないのは、随伴などのような基本的技術の問題に加え、寧ろ走行のリズムを掴みきれていない事、またメンタルな要素もネックになっているように思われる。

今やどんなスポーツでも、「メンタル・タフネス」は重要な課題とみなされている。団体競技とも個人競技ともいえないような馬術も例外ではない。

ところで、北大馬術部はよほどバランス感覚に恵まれない学生が集まる所とみえて、卒部以来、後輩のやる事を見ている、障害馬術を目指すとなるととことん障害練習ばかり、口向きもクソもあったものではないかと思うと、馬場運動に凝って障害練習もろくにせず競技に出る者がいたりする。そういう意味では、(学生レベルの)総合馬術への出場を目標に据えるのは妥当だと思う。

が、これとて力配分を誤れば同じ事。調教・耐久・余力の3つの課目をオールラウンドにこなす馬がなかなかいないのに似て、バランスをうまく保つのは難しい。

僕が学生の頃、全日学総合馬術に於ける関西の学生の、およそ野外走行とは思われないその騎乗ぶりを目の当たりにして、北日本の連中は失笑してしまったものだった。(勿論、今は違う筈) おどろおどろしいばかりの重装備、あまりにも長すぎる鎧、ショウジャンピングと同じ感覚の走行等によって、馬は可哀そうなほど酷使されて体力の限りを尽くし、人馬とも事故に遭ったりもする。聞けば関西では、学生には総合は危険すぎるとの指導陣の判断で、予選さえ行なわないとの事だった。そんな中で、立派な野外コースを備えた関東の有力私大や畜大が順当に上位を占めた。

昨今の北大も当時の関西と同じように、北日学がぶっつけ本番なのを何の疑いもなく当然と受けとめている。

だが極端な話、総合のナショナルチームクラスが、いくら調教審査のレベルが高い水準にあって、目をみはるような馬場を踏むからと言って、せいぜい障害馬場しかないような所で合宿を組んだりするだろうか。水準が高くなっているのは何も調教審査に止まらず、耐久審査もまた然り。飛越技術は勿論、各区間のペース配分や時計を使っての正確なスピード感覚も磨かねばならない。スタミナも必要だ。障害馬でさえトップクラスともなると、我々にしてみれば高度な馬場の運動、二蹄跡や踏歩変換など軽くこなすのが当たり前の時代なのだから、一部分だけに注目して上を見たらキリがない。

以前のように、野外走行の反抗や余力の落下で一発逆転できるからと言って、調教審査を投げ出したかと思うと、昨今のように馬場の順位が重要だからと野外騎乗未経験のまま競技に臨むなんていう、なんとも日和見主義な北大特有の山師的挙動はいいかげんにしろと言いたい。

調教審査のレベルが低いという事は、同じように耐久・余力のレベルも低いという事なのだ。

今や全く環境に恵まれない北大で、個々の課目の優劣を云々するのはナンセンス。

総合馬術は一見とつき易く、野外騎乗の醍醐味も格別のものがあるが、普段やっておくべき事柄は非常に多い。いくらあっても足りない時間、故障などの不慮の事態をも念頭において、最終的に3課目のバランスがとれるよう工夫せねば。

更に得意種目があれば心強いに違いないし、自信という心の余裕が生まれれば、競技でさえも楽しめるようになるかもしれない。もっとも、学生には無理な話だろうと思うけどね。

今週末までに原稿を書かないと、部報からカットするという。甘い！ そんな脅しに屈するほどヤワではない。やれるもんならやってみろ、と言いたい所だが、以前から書く書くと言っておいていまさら「じゃやめた」というのも大人げないので、決算期の疲れが残る体に鞭打ってここまで書いた次第。ここだけの話、部報編集者の小林女史は、大変なオオカミ少女である。今度こそ原稿を出していないのはあんだだけだ、というような嘘八百を平気で口にする。(南部さんはこの手にまんまとひっかかった。) いい根性してるが、大の大人にそんな見えすいた出まかせが通用するわけないだろ？

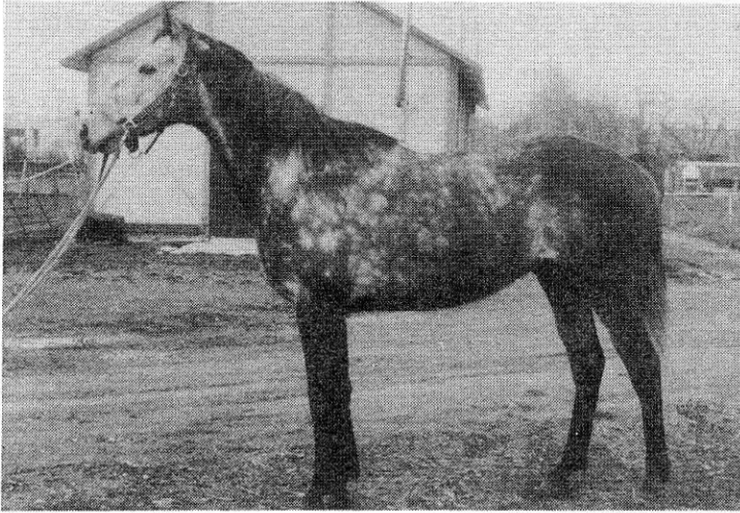
とは言っても、僕自身もなんのことはない、けっこうしたたかなオオカミ青年(?)でありました。

お互いさまです、ゴメンナサイ。

それはともかく、北駿に乗るのは1、2年目、おまえたちなんだぞ。しっかりせーよ！

水野さんの尽力で入厩した馬です。ええ馬にしまっせ、水野さん！

北 瑛 号



騙 サラ 芦毛
昭和55年4月18日生
北海道勇別郡鷓川町産
父 トレントム
母 ホクエイフブキ
競走名 ニューギャロップ

昨年入厩した芦毛の新馬です。北凛号よりも年上のくせして、全く芦毛馬とは思えない程の黒さで、部員の中には、こいつの毛色を見て「水墨画」などと言った者もいる位です。馬体は、他の馬とは2まわり位小さく、体も少し細身で非常に可愛らしい馬です。

可愛らしさに加え、またさみしがり屋さんでもあり、外厩裏のパドックを独占するはよしとしても、すぐ「ヒヒーン」と鳴き出します。そこがまた可愛らしい面でもあるのですが……。

馬体的な面からみると、四肢の蹄さが弱く、蹄サフランになりがちなので注意を要します。また腰も良くないので、太っている部員のダイエットも必要のようです。

まだ入って1年、これからの活躍が期待される馬です。

半 澤 道 郎

北瑛がニューギャロップの名で北大馬術部に入厩(61年8月17日)してから、既に1年半になります。昔の軍隊では新馬の調教は、調教専門の調教師が1年をかけて一通りの基礎調教をしていました。

競走馬として調教され、7才まで競馬をして来た馬を学生馬術用の乗馬に仕上げる仕事を自ら進んで引受けた手前、他人に笑われ乍ら老軀を顧みずに自分なりに努力をし、勉強もした心算ですが結果は諸君がご覧になる通りでなかなかうまく行きません。60年も乗馬をしたと自慢しても、新馬(真の新馬ではありませんが)調教をやったのは「北銀」と「北瑛」が初めてで、札幌競馬場で「オオカリヒメ」で調教の仕方の一部を庄内先生と萩野さんに教えて貰った位で、他は部報No.32に寄稿した「机上馬術」

流の自己流と60年に亘って体得した馬術感覚に基いてやるのですから、調教師としての資格の無い者が暗中模索でやるのですから時間のかかるのも無理からぬことであると自嘲している次第です。

さて、その苦心の過程と結果を部報に載せる光栄を有難いと考えて詳しく書こうと思いつた、何しろ暇が無く、調教日誌をつけていなかったのも、名馬術家が書いている様な調教報告にはならないのは誠に残念です。入厩してから昨年の4月頃までの基礎調教については部報No.32に極めて簡単に書きましたが、乗り始めたのが9月末で、乗馬、下馬を馬を動かさずにやる事、乗ってから前進の扶助を使うまでは鞍上で何をやっても完全に停止で直立を保つことから始め、前進、常歩、速歩の直行進、半停止の扶助による歩度の減却と停止、常歩、速歩での正しい偶角通過、輪乗りでの内方姿勢の要求、脚の扶助を教え、手の扶助、軟い口とのContact、体重(座骨)の扶助を段々に教え、輪乗りの開閉、前肢旋回、(内外両姿勢)、後肢旋回(内外両姿勢)横歩、常歩、速歩とする二蹄跡運動、常歩と速歩の歩度の伸縮などを繰り返して教えた。競走馬の駈歩を忘れさせる(直ぐにはやらない)ために12月の終りに雪の上で初めて駈歩運動を始めた。競走馬の駈歩発進のやり方を知らないで、先づ新馬向きの駈歩発進である外方側対扶助で発進することに決めて行い、次に外方斜対扶助での発進を練習、それが出来る様になってから内方側対扶助での発進に移った。発進はどうか出来るようになったが、落着いたbalanceの取れた駈歩や、反対駈歩はうまく出来ない。踏歩変換も速歩を入れたsimple changeをやる位までにならなかった。

障害飛越の調教の基礎にCavalletti 通過を始めた。

近眼、弱視の私は早朝の薄明りでは良く見えないので冬の間は部員諸君の練習の終了近い頃から乗り始め、単騎で乗ることが多かったが、春の到来と共に部員の練習と同じ時間に乗る様にした。部の馬を減らし練習馬が少なくなった上に、多数の新人部員を迎えたので「北英」も部員の練習に使い度い旨を服部君から云われ、私が乗って部班運動と一緒にやって慣らす様にした。最初は駈歩運動を他馬と一緒にやると興奮したが次第に落着く様になり、新人部員も乗れる様になった。

軀の小さい、気の小さい、こんな馬は部の練習馬にならないから離厩させると云うのを無理に引き止めて部員から取り上げて乗り始めてから約半年で部員が乗れる様になった事で私も一安心であった。

入厩当時は環境が変わったせいもあって何でも新しく見る物に驚く癖があって物見馴致に一苦労であった。スキーを持った赤いヤッケを着た学生、風にはたむく天幕、都ぞ弥生の黒い碑、建物に響く自分の足音等々。一番ひどい目に会ったのは、ノエルに先導して貰って北大構内外乗をして農学部のクラーク像の辺りまで出かけた時、ノエルは時間の約束があると云って先に馬場に帰って行った。その頃クラーク会館の前に居た、何処かの運動部の団体(白い袴か黒い袴に白い上着だったか)20人位が、クラーク像の前辺りに来て円陣をつくって何か急に大声を出したのに驚いて、急に飛び跳ねて走り出し、押えると跳ね廻って、前肢の片側のワンコはふっ飛ぶ、騎座変をして落馬寸前、愈々理学部の玄関前辺りで沈静、無事馬場に帰り着く様なこともあった。

雪が消えてから少し高度の馬場運動を始め、駈歩の8字乗り、駈歩の輪乗りの開閉、常歩を2、3歩入れた踏歩変換、蛇乗りでの反対駈歩、肩を内へ(shoulder-in) 腰を内へ(traverses) 腰を外へ(reverse) 短縮速歩、後退から駈歩前進、短縮駈歩などを教え、5月には初めて競技会で総合の馬場種目を実施した。

私が種々の用事で乗れない時には陣川君、中村君が手伝って呉れた。部員が乗る様になってからは、湯浅さんが担当して主に乗って居る。私が10月半頃から急に忙がしくなり乗れないで居る中に、体調を崩して、遂に調教を中止してしまった。卒業を間近に控えて学業に忙がしい陣川君が時々乗って呉れた。私は1月2日の初乗りに部員が北海道神宮参拝の留守に暫く振りで1時間20分位と翌々日に40分位乗って見たが教えた事は忘れていなかったのが安心した。3月に入ってから、出来るだけ乗ることにして、再び調教を始め二蹄跡運動を多くし、passade、passadeとreverse、駈歩での二蹄跡運動、flying change、正確なhalf-pass、正確な常歩でのpirouette、上手な後退、pas decole passage、piaffe、それから馬場馬術で最も難しいとされている駈歩のpirouette(別稿参照)、更にはfree styleの音楽付きの運動等、目標は可成り高度ですが実現は難しい事で、所詮は「机上馬術」に終ることと思うと、乗られる「北英」に申訳が無い、真に相済まない次第です。

札幌市指定第一種水道工事業者第198号
札幌市排水設備業者登録番号第209号
北海道職員互助会指定工事店

管工事業

日章冷熱株式会社

札幌市東区北19条東2丁目12番地88

電話代表 (742) 7273番

馬の顔写真



ドン・ホッパー



北 銀



北 皇子



ノエル

北
玲





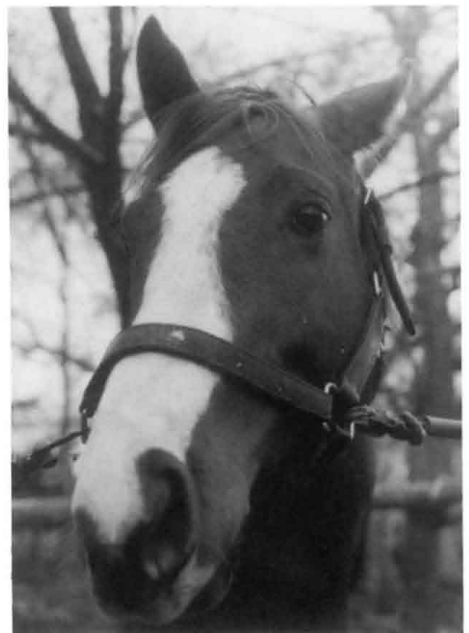
北 凜



北 駿



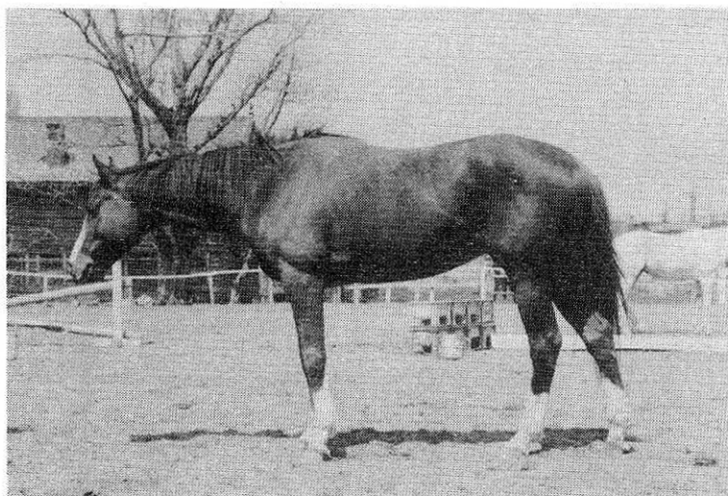
北 瑛



北 楡

新馬紹介

北 榆 号



騙 サラ 栗毛
昭和58年6月16日生
沙流郡門別町産
父 グレートセイカン
母 ミスポット
競走名 ポットチャンプ

7月29日に札幌競馬場より入厩した栗毛の流星四白です。高さはさほどありませんが、長さが割とあり、骨太で身のこなしの柔らかい馬なので、将来戦力として期待できると信じています。

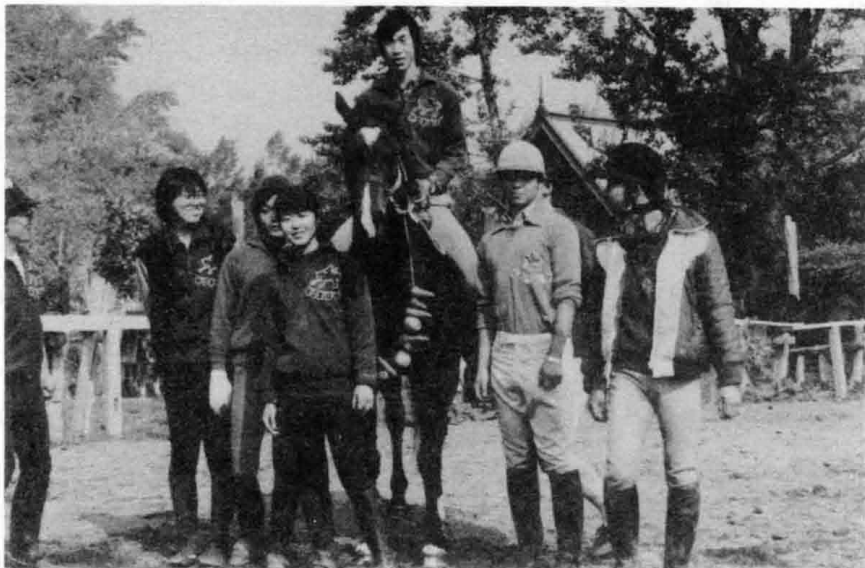
3年目の先輩を中心として騎乗開始後しばらくして左前肢を跛行するようになり、来札された本城さんに注射を打って頂きましたが、さほど良くなりず、そのまま去勢手術(10/6)となりました。この去勢手術で今度は右前肢管の骨瘤を刺激してしまい、少し大きくなってしまいました。その後骨瘤が落ちつき始めてから調馬索運動を始め、11月中頃より騎乗調教へと進んでいます。

手入れをする者として馬体を良くするだけでなく、厩にも気を配ろうとしましたが、割と素直で扱いやすい馬で咬んだり蹴ったりということはありませんでした。しかし、あのものすごい食欲と、幼さと運動不足からくる強情さには苦勞させられました。神経質ではなさそうですが、車を少し怖がるようです。

右前の長白がもう少し短かかったら、今年のダービーを制したメリーナイスそのものという感じで、出走時の馬体重もほぼ同じでした。ダービーは駄目だったけれど、乗馬として大成して、馬事公苑でそのうさばらしをしてもらいたいものです。

離 厩 報 告

北 姫 号



大 歳 正 明

北姫号は、52年に入厩して以来、約10年間北大でミヨコと呼ばれ、親しまれてきましたが、去年の5月に折橋さんが引き取って下さることになり、離厩しました。ところが、去年の10月25日の夜、馬房の穴に寝返りをうったかなにかの拍子で、足を入れてしまい、無理に立とうとして暴れたのか、左後肢の飛節を骨折する事故を起こしてしまいました。回復の見込みもなく、苦しむ前に、ということで、福島姉の一周忌を2日前にした10月30日に殺処分となりました。

すべては、冬のあいだの運動の計画の甘さ、人間の甘さが原因でした。私程度の技術しかなくとも、頭を使えば、もっと上手く出来たはずです。それを、いつまでも、「上手くできない。」と言いながら同じことをくり返していました。そして左後肢の調子が良くないのを必要以上に気にしすぎ、障害もあまり飛んでいませんでした。ところが、半沢杯を目前にすると人間の方があせってしまい、突然大きな障害を飛んだり、乾濠を無理やりに飛ばしたりして、馬に恐怖感を植えつけ、また人間の方も、いつ止まるかわからないという不安を残しました。人が馬を信じてやれなかったのです。そんな人を馬が信頼するわけがありません。結局、半沢杯の複合で、2番を1反、6番のかまぼこを2反と、ゴールを切らせることが出来ず、離厩が決まってしまうました。

北大の厩舎から出てしまえば、すぐに肉にならなくとも、その馬の運命なんて、どうなるかまったくわからないのです。そのことを改めて考え直し、ミヨコの犠牲を他馬に活かさねばなりません。

おやすみ、ミヨコ

北姫号調教報告に代えて

長 屋 清 隆

ミヨと福島を見ていた関係で、昨年度の部報では亡くなった福島に代わってミヨの調教報告を書く事になっていた。あいつは最終的にどう考え、何を書くつもりだったろうか、なんて考えていっこうに先へ進まないでいるうちに、何の断りもなしに未掲載のまま部報は出されてしまった。非常に腹が立ったものの、今年度こそと思っていたら、ミヨは死んでしまった。

入厩は僕が4年目の夏で、競馬場から離厩馬の連絡があり、岡田監督に電話で御相談の上、水産馬術部の藤原君と一緒に見に行ったところ、いるもいないもなく渡されてしまい、洗い衛と競走用の赤い面をつけて2人曳きで連れてきた。

キャピキャピのギャルそのもので、後にも先にも北大の馬であんなにはちきれそうな若々しさを感じた馬はいない。とても可愛がられていたようで、人なつこくて好奇心旺盛。

岡田監督のお気に入りの馬となって御指導の下、同期の山川女史が初期調教に携わった。障害を飛ぶ写真が札幌の広報誌の表紙を飾った事もある。チーフ2代目の国枝君が頑張って全日学へ行った頃は、「第2のスターライト」の呼び声が高かったのだが、その後鳴かず飛ばずだったのは何とも残念。

だがバネは抜群だったのと、部員に人気があったおかげで永く在籍できたのは、ミヨにとっては良かったのかもしれない。後年、競馬会の厩舎の人にまだいるのかとあきれられたくらい。

ミヨと福島のコンビを見る事になって、久し振りと言うよりは初めてじっくりとミヨに接してみても、入厩時のイメージががらりと変わっていて、人への不信感をあらわにするのを見た時は、永年使われて仕方ない事とはいえ、残念で悲しくもあった。内心、部員の手におえる状態ではないと思っていたのだが、福島は非常な闘志と頑張りを見せてくれ、道大会の総合などでは僕も予想できなかったほどの反響が関係者からあり、ガッツを讃える言葉を耳にした。ミヨが福島と共に咲かせた最後の華といえるだろう。福島が亡くなった冬、放牧中の三角地で、他の馬が大人しいのにミヨだけが何の前触れもなく突然興奮し始め、立ち上がった様子を見て、何とも不思議な感情に囚われたのも1つの前兆だったような気がする。

北大を離厩後半年、10月25日だったか、十勝清水の川俣女史(旧姓折橋)から、事故が起きて処置のしようがなく、殺処分予定との連絡を受けた。福島のお母さんと一緒に別れを告げに帯広へ向かうつもりだったが、早朝に屠殺場へ運ぶ上に、哀れな姿を見せたくなさそうな素振りも感じられたので、結局断念。まるで福島の一周年忌に間に合わせるかのように、2日前の10月30日、あわただしく逝ってしまった。

川俣さんがミヨを引き取ってくれたのも、福島の心中を思っただけの事で、あまりにも劇的で可哀そうな最期だったとはいえ、因縁を感じる。ミヨの最初と最後に関わり、いつも気にかけていた者として、川俣女史には紙上を借りて心からお礼を言います。

ミヨが死に、ドベも死んで、福島の周囲はいちだんとにぎやかになっているようだ。

調教報告書かなかったのは悪かったけど、おまえ、あんまりたくさん連れてくなよな。

S 5 2	7. 1	競馬場大久保厩舎より入厩									
S 5 3	8. 19~20	道	体	小	障	山川	恵	8 位			
S 5 4	5. 30	酪	農	戦	小	障	国枝	保幸	2 位		
	6. 2~3	道	自	馬	新	馬	国枝	保幸	5 位		
						パルクールドシャス	国枝	保幸			
	8. 2~8	北	日	学	中	障	国枝	保幸	10 位		
					総	合	国枝	保幸	6 位		
	8. 25~26	道	体		成	年・総	合	国枝	保幸	13 位	
					成	年・障	碍	国枝	保幸	7 位	
	9. 15~16	道地区馬術大会			標	準・中	障	国枝	保幸	5 位	
						パルクールドシャス	国枝	保幸	9 位		
	11. 13	全	日	学	二	走	国枝	保幸	失 権		
	17~19				総	合	国枝	保幸	失 権		
S 5 5	5. 31	山	下	杯	複	合	篠田	聖児	失 権		
	6. 7~8	道	自	馬	パルクールドシャス		篠田	聖児	失 権		
	8. 5~11	北	日	学	二	走	篠田	聖児	失 権		
					総	合	篠田	聖児	15 位		
	8. 16~17	道	体		成	年・総	合	篠田	聖児	失 権	
S 5 6	5. 23~24	道	自	馬	複	合	今	由美子	失 権		
					婦	人	今	由美子	失 権		
	5. 31	山	下	杯	中	障	B	今	由美子	6 位	
	7. 31~8. 4	北	日	学	総	合	井上	京	11 位		
	10. 3~4	公		認	中	障	B	今	由美子	失 権	
					内	国	産	馬	今	由美子	失 権
S 5 7	5. 3	半	沢	杯	複	合	町田	雅人	失 権		
					小	障	町田	雅人	11 位		
	5. 16	山	下	杯	複	合	町田	雅人	失 権		
	6. 5	道	自	馬	小	障	町田	雅人	21 位		
S 5 8	5. 5	半	沢	杯	小	障	町田	雅人	7 位		
	6. 4~5	道乗馬大会			中	障	町田	雅人			
	6. 25~26	道	自	馬	中	障	B	町田	雅人	11 位	
	7. 23~24	公		認	ハンティングB		町田	雅人	失 権		
					標	準	中	障	町田	雅人	失 権
	8. 5~8	北	日	学	二	走	町田	雅人	失 権		
					総	合	町田	雅人	失 権		
	8. 13~14	道馬術大会			成	年	障	害	町田	雅人	失 権

	1 1.	1 3	山 下 杯	複 合	障 碍	谷山豊三郎	2 位
S 5 9	6.	2 3 ~ 2 4	道 自 馬	複 合	障 碍	谷山豊三郎	失 権
	8.	5 ~ 8	北 日 学	L 級 一 般	走 行	谷山豊三郎	失 権
	8.	2 5 ~ 2 6	道 体	総 合	障 碍	谷山豊三郎	失 権
S 6 0	8.	2 ~ 5	北 日 学	新 人	障 碍	中村 康利	1 3 位
		2 4 ~ 2 5	道 体	L 級 一 般	障 碍	中村 康利	失 権
S 6 1	5.	5	半 沢 杯	複 合	障 碍	福島 光絵	7 位
	7.	1 9 ~ 2 0	公 認	標 準 中 障	碍	福島 光絵	失 権
	8.	8 ~ 1 1	北 日 学	一 般 小 障	碍	大歳 正明	失 権
	8.	2 3 ~ 2 4	セ レ ク シ ョ ン	総 合	障 碍	福島 光絵	失 権
				L 級 婦 人	障 碍	福島 光絵	1 8 位
				L 級 婦 人	障 碍	荒井 陸美	失 権
	1 1.	9	山 下 杯	L 級	障 碍	中野 兼一	1 位
S 6 2	5.	5	半 沢 杯	複 合	障 碍	大歳 正明	失 権
	6.	2 7 ~ 2 8	道 自 馬	L 級	障 碍	大歳 正明	失 権

乗馬用品・婦人バッグ・ポシェット・サイフ・小物・旅行カバン・ベルト各種

SOMÈS
HORSE RIDING EQUIPMENT MANUFACTURE

ソメスサドル 株式会社
ソメス 有限会社

■本 社 / 〒073-03 北海道歌志内市神威264
☎ (012542) 代 2152 FAX (012542) 6716
■東京営業所 / 〒111 東京都台東区浅草橋5-12-6 明治堂ビル
☎ (03) 代 866-2131 FAX (03) 863-4652

北 紫 雲 号



金 田 克 己

5月27日、ライラックの香りがシーズンの訪れを感じさせる頃、北紫雲は北姫とともに住みなれた厩舎を後にしました。現在、帯広畜産大学のすぐ近くの山田牧場で柏友会のザ・シルバーとともに暮らしています。

馬体的にはまったく問題はなく、馬の頭数が調教者の絶対数を上回り2頭乗りを余儀なくされているという冬からの問題を憂え、シーズンに向けて戦力の集中が必要との主将判断による選択でした。

この馬の離厩に際し、多くの事を考え、悩み、もっていき場のない怒りをもてあまし、随分と多くの人に迷惑をかけたことと思います。そして結局いきつくところは、あれだけ好きだった馬に自分が費いやせたものはあれが限度だったのかという悔悟の念でした。一失敗だらけの調教報告でも大きな意味があるとは思いますが誌面の関係と一番大きな反省という意味で少し偉そうな事を書いてみます。

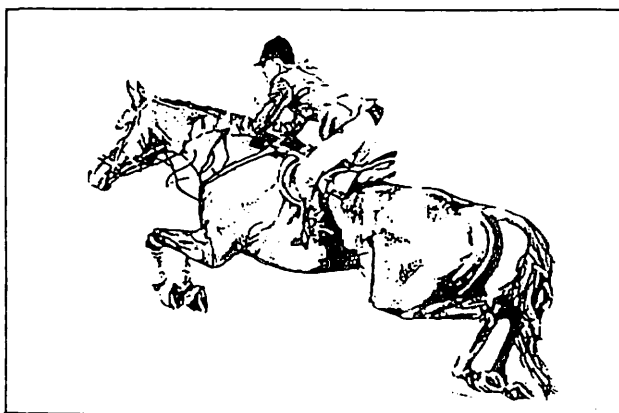
馬歴2年少々で“調教”など口に出すのも痴がましい。だけど何はともあれ馬を動かさなくてはならないとしたら必要となるのは、馬に1つ1つ働きかけることができる自信と、それに対する馬からの反応を感じとれる余裕ではないだろうか、という事です。自信ということの中には、自分の姿勢、扶助に気後れしない（勿論謙虚に直していかなければそこ止りだが）そして余裕ということには馬と同じレベルにならないということも含んでのことです。自分でできなかったことをこれ以上言うのはやめますが、いくらいい条件の出先きでも北大で活躍するのが馬にとって一番の幸せなんだということは肝に命じておくべきです。

今まで調教に携わってきた方々、そしてなにより多くの人達が夢を託したその才能を花開かせることができずに終わらせてしまった北紫雲に報いる唯一の方法は、10数冊の騎乗日誌と9ヶ月間北紫雲から学んだことを精いっぱい今の馬達に生かしていくことだと思っています。

S 5 7	9. 1 8 ~ 1 9	道 内 親 善	小 新	障 馬	井上 京	失 權
S 5 8	5. 5	半 沢 杯	小	障	井上 京 平山 復志	失 權 2 位
	6. 2 5 ~ 2 6	道 自 馬	小	障	井上 京 平山 復志	失 權 失 權
	1 1. 1 3	酪 農 戦	小	障	平山 復志	失 權
S 5 9	5. 1 3	半 沢 杯	小	障	平山 復志	
	6. 2 3	道 自 馬	複 新 人 新	合 馬	平山 復志	失 權
	7. 2 8 ~ 2 9	公 認	L 新 新	級 馬 馬	平山 復志 平山 復志 平石 復生	失 權 失 權 失 權
	8. 5 ~ 8	北 日 学	総	合	平山 復志	失 權
	8. 2 5 ~ 2 6	道 体	一	般	平山 復志	
S 6 0	5. 5	半 沢 杯	複 小 中	合 障	野中 道夫 高田 敏江	1 1 位 1 4 位
	6. 2 2 ~ 2 3	道 自 馬	ハンディ ング	障	野中 道夫	4 位
			L 級 B		高田 敏江	7 位
			M 級 C		高田 敏江	1 5 位
	7. 2 0 ~ 2 1	公 認	標 準 中	障	野中 道夫	失 權
			2 段 階 競 技		野中 道夫	2 0 位
			小 障 一 般		高田 敏江	失 權
	8. 2 ~ 5	北 日 学	中 障	B	高田 敏江	8 位
	8. 2 4 ~ 2 5	道 体	成 年 総 合	級	野中 道夫	2 位
			L		高田 敏江	失 權
					佐多 康子	1 5 位
	9. 8	市 民 大 会	中	障	高田 敏江	1 6 位
	1 0 6	セ レ ク シ ョ ン	小	障	高田 敏江	5 位
	1 0. 1 3	山 下 杯	中	障	高田 敏江	5 位
S 6 1	6. 2 8	道 自 馬	M 級 新	C 人	高田 敏江 中野 兼一	失 權 3 位

	7.	19~20	公 認	一 般 小 障	高田 敏江	24位
	9.	6~7	道 内 親 善	L 級	金田 克己	10位
	9.	28	市 民 大 会	L 級	金田 克己	11位
	10.	4~5	セ レ ク シ ョ ン	障 害	高田 敏江	失 権
	11.	9	山 下 杯	M 級 C	金田 克己	3 位
S 6 2	4.	5~6	半 沢 杯	複 合	金田 克己	15位

習得しませんか 本格的乗馬技術



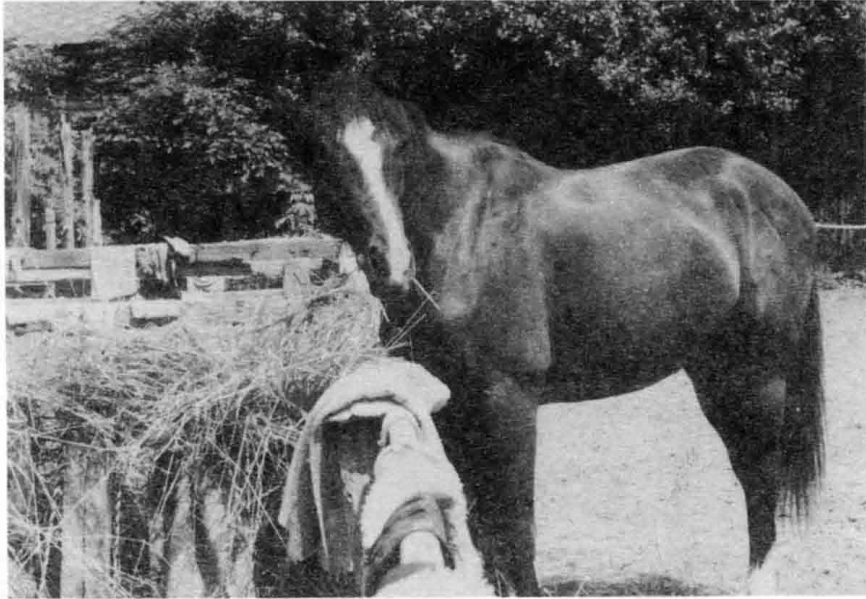
素晴らしい馬達と共に…

北星乗馬クラブ

●銀鞍会 ●少年騎馬隊 会長松岡靖雄

札幌市南区白川1814-3 TEL (011) 596-2407

スーパーボーイ号



化石人間の繰り言又は一つの事例としての スーパーボーイ離厩に際しての雑感

南部 孝一

ここ数年の部報を見ると活動費を得る為のアルバイト収入が総収入の50%位になっている様である。又、赤字の年度もあった。昨年現役部員にアルバイト量について質したところ「自分達の乗る馬の為に多少の難は厭わない」というのが意見としての大勢ということであった。又ここ数年の離厩馬については仲介者より放出先の紹介を受け、仲介者を通して生きたままもらわれて行くのが大半ということである。何等放出先と直接交渉（生かす為の条件等）することなく。さらに金銭を得た場合も仲介者より受取った最高額は5万円程という事であった。

〔雑感その1〕


“多少の難は厭わない”結構な事である。それではなくてはいけない。我意を強くした。……いやしかしちょっと待てよ……多少の難というのは現在のアルバイト量と合致するのか？過重負担とはなっていないのか？部活としてのアルバイトの出来ない学生を排除することを結果として招来してはいいのか？もし減らせるものなら減らした方が良いのでは、いや減らすべきではないのか？

〔雑感その2〕

馬を手許から出す時点でただ生きてそのまま出せば良いというのは、生物を飼っている者としての責任を本当に果たした事になるのだろうか。

〔繰り言〕

前述の2点を主たる考慮の内容として、主将にはスーパーボーイを屠場に出す様に進言した。抵抗があるなら自分が運ぶ意志があると提言した。さらに屠場に直接出す事に拒否反応があるのなら、自分が買取るかたちにしたい旨申し出た。金額は8月に主将が問合わせたところ屠場の返答は25万円ということであった。主将は理解した様であった。3年目は頑強に反対したとの事であった。結局主将が折れた。スーパーは仲介者の紹介先の個人にもらわれて行った。その後仲介者の手に渡ったという事である。事実とすればただ取られである。「間抜けな奴らめ」と考えるのは我独りであろうか。



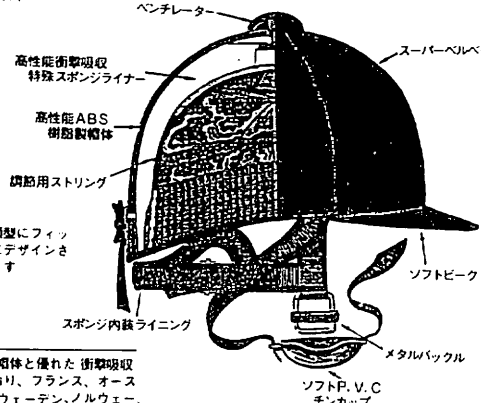
1987年"Spoga"(西独) 乗馬部門
「インターナショナル・ベスト
プロダクト金賞」受賞

ウエンブレワールドキャップ

Wembley

THE WORLD APPROVED SAFETY CAP

「
確
か
さ
の
証
明」



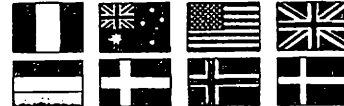
ベンチレータ
スーパーベレベト
高性能衝撃吸収
特殊スポンジライナー
高性能ABS
樹脂製帽体
調整用ストリング
ソフトピーク
メタルバックル
ソフトP.V.C
テンナップ
スポンジ内装ライニング

定価
¥16,000

・日本人の顔型にフィットする様にデザインされております

世界に駆ける…ウエンブレ

WEMBLEY WORLD CAP は高性能ABS 樹脂製帽体と優れた 衝撃吸収機能を特許特殊スポンジライナーを使用しており、フランス、オーストラリア、アメリカ、イギリス、西ドイツ、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、すべての安全基準テストに合格した、世界唯一のライディングキャップです。




国内総販売元

カバロ株式会社

□カバロ神戸 神戸市中央区磯上通5丁目1-17 〒651
ウエンブレビル1F TEL:(078)251-6620F

□カバロ大阪 大阪市北区梅田1丁目2番2-200号 〒530
大塚駅前ビル2F TEL:(06)344-0070

□カバロ東京 東京都世田谷区上用賀2丁目3-1106 〒158
パンフィック馬事公苑 TEL:(03)425-8844



CAVALLO

北大水産学部活動報告

北川知子

今年1年、報告できるだけの行事はしておりませんので、時間を追っての行事報告は次の機会にまとめて、ということにさせて頂きたいと思います。

北水馬術部も上本兄が再建してもう何年もたつわけですが、恥ずかしいことに足踏み状態でこれといった進歩がみられません。

部員を勧誘してもなかなか集まりません。

「馬には乗ってみたい。でも朝早く起きてまでは…」というのが多くの人の理由です。でも何よりも眠い目をこすりながら、朝早く起きてまでも馬に乗ることがどれだけ価値のあることかを教えてあげられない自分の努力不足が原因です。学生馬術という強みは、こちらでは通用しません。時間的制約など多くの妨げの中から、いかに馬とうまくつきあうかが勝負です。だから、せめて毎朝馬に乗ることが最低条件だと思って心がけてはいるのですが、完全に実行することができないのであるから偉そうなことは言えない訳です。

私が函館に移行してもう1年半がたちました。結局部員は私1人になってしまいました。という私も休部をしていたという不良部員で、これを読まれる皆様から、お怒りの声があちこちから聞こえてきそうです。

「たとえ1人であってもクラブだということを忘れてはいけない。」と上本兄に教えて頂きました。自分では常にそれを心がけているつもりだったのですが、『休部』という身勝手な行動は、『クラブ』という意識を失っていました。

休部中、多くの方々に御迷惑をおかけ致しました。御迷惑おかけしました分、これから努力致します。

朝クラブに行って、一人で戸をあけ、馬にあいさつを交わし、作業開始…。誰が見ているわけでもなく、単なる自己満足にすぎないのかも知れません。さぼろうと思えば、いくらでもさぼれるわけだから…。確かに、空虚で淋しいことかもしれません。しかし、そうであっても馬に乗れるのであれば、それは意義のあることだという気がしてきました。

何か偉そうなことをつらつらと書き並べてしまい、「活動報告」と呼べるものとは程遠いものとなってしまったことを、お許し下さい。

この場をかりまして、東山乗馬クラブの先生方、上本兄を始めとする多くのOBの方々、そして北大馬術部の皆様にお礼を申し上げたいと思います。本当に有難うございます。これからまだまだお世話になること、御迷惑をおかけすることが多々あると思います。御協力、宜しくお願い致します。

これから来る移行生の為にも、1つでも多く進歩できればと考えております。頼りない部員ではありますが、できる限りの努力はするつもりですのでどうか宜しくお願いします。

東京OB会便り

行事報告

○ 観桜会・春の乗馬会（昭和62年4月26日 於 馬事公苑）

今にも降りだしそうな曇り空の下、何とか乗馬会まで天気はもったものの、懇親会に入りビールで乾杯したところで雨となってしまいました。千葉次長の御配慮でジンギスカンパーティーは事務所二階のバルコニーに会場を変更し、その後も会議室をお借りして歓談を続けることができました。

生憎の天気にもかかわらず御家族を含めると五十余名の出席で盛会でした。観桜会は東園会長差し入れの御料牧場産ラム肉が呼び物となっています。これまで唯一の弱点は、たれが市販で味がいまひとつのものしか用意できないということでしたが、今回は那須は千本松農場自家製のたれを手に入れることができました。また生ビールも30リットル入りの樽を据え付け、いずれも好評でした。次回は快晴でさえあれば鬼に金棒なのですが……………。

○ 現役部員との懇親会（昭和62年10月3日 於 馬事公苑）

全日本学生馬術大会に遠征中の現役部員諸君を迎えて苑内職員食堂をお借りして懇親会を行いました。十六名の部員諸君が大挙して上京し、部馬の世話とともに会に出席して下さったこと感謝いたします。出席の十七名のOBにとっては部員の元気な顔を眺めながらの楽しい酒でした。

○ 63年総会・新年会（昭和63年2月6日 於 参宮橋 新日鉄・新山谷寮）

ほんのちょっぴりの時間を割いての総会の後は、遅ればせながらの新年会を二十四名の出席により賑やかにとり行いました。樋口幹事長の、来年は東京OB会が発足して三十周年になるとの発言を受けて、それでは記念行事として馬のライブラリーを現役諸君に寄贈しようではないかとの声があがり、いや、それよりも馬も洗えれば人も洗える温水シャワーがいいんじゃないか、などという珍妙(?)な意見も飛び出して、とどのつまりは酔いが醒めた後の冴えた頭で改めて考えてみようというところに落ちつきました。部員諸君は大いに楽しみにしておいて下さい。

新年会には若いOB諸君が大挙して出席してくれたこともあって活気に溢れた会となりました。

事務局より

東京OB会は上記三つの会合を中心に活動を行っています。それぞれがおもむきの異なる会合となっております。東京近在のOBの方で都合のつく方はどの会合からでも結構ですので御気軽に出席くださるようお願いいたします。

なお、景山の事務局担当は63年総会・新年会をもって交代となります。三年弱の事務局担当でしたが、この間、東園会長、加藤前幹事長、樋口現幹事長、千葉馬事公苑次長を始め、多くの方々に御指導、

助言をいただきました。また若手OBの人達にはいつも積極的にお手伝いしていただき感謝にたえません。紙面を借りてお礼申し上げます。

次回、観桜会・乗馬会からは本村氏（昭和51年卒）が事務局担当となります。会の活動がより活発になるのではと大いに期待しております。
（事務局 景山）



恒例の大集合写真（観桜会）

中古車と整備

民間車検工場

株式会社 **北大モータース**

札幌市北区北18条西5丁目 ☎726-1526



恒例の“馬スキー”の話をする本田副会長（現役部員との懇親会）



恒例の長口舌に東園会長から“制限タイム三分”の声がかかり、一同爆笑（新年会）

卒部にあたって

服部 雅史

最近になって、やっとこの4年間の充実していたんだと思えるようになってきた。今まで、充実しているのかどうか何てことを考える余裕さえなかったというのが正直なところだと思う。楽しいことよりも辛いことの方がよっぽど多かった4年間だったが、それだけに得られたものも多かったのだと思う。下級生の頃は、一時期このクラブで得るものより失うものの大きさを感ずて退部を考えたりしたこともあったが、こうして無事4年間続けられたことは、今では自分にとって本当に良かったと思っている。

馬術部生活を思い起こすとき、やはりドンのことを避けることはできない。初めて馬を任されることになったとき、実はドン・ホッパーは乗りたくない3頭の馬の中に入っていた。ピーターとミヨコは自分とは相性が良くないと思っていたし、ドンは年寄りだからなんとなく嫌だった。ところがどういふわけか、暫くするとドンを中心に自分の世界が回り始めていた。初めはギャランに乗りたかった筈であった。

3年目のときは、4年目に負けてたまるかと思ってやっていた。ギャランは一転して敵になった。ドン・ホッパーを全日学に連れて行くのは俺しかない自分と言いつけていた。全日学の権利でギャランに勝ったときは嬉しかった。今思うと恥しいが、クラブ全体など見えず自分のことの方が大きかった。

4年目のときは複雑だった。部員が少ない故の2頭乗りもかなりの負担であった。新馬調教の面白さを知ってしまったことも大きなことだった。ドンの体にも老化の影が更に大きく迫り寄っていた。苦しくて、とにかく自分が情けなかった。

やはり自分は人の上に立つような器ではなかったのだと思う。そのために、多くのみんなに迷惑をかけてしまった。無理なことを、頑張ればできると思って始めて、後で苦しむという悪い癖があるようだ。自分にできることとできないことをはっきりと見通せなければならぬと痛感する。

どうしても忘れられないものがもう一つある。酒である。コンパには思い出が多い。しかしこれについては何も書かない。1年目の頃はコンパが怖かった。今となっては、あの頃の、「最後まで生き残れたものだけが先輩のシビアな馬の話の聞ける」というコンパが懐かしい。コンパをみると、やはり時代の流れを一番感じさせられる。これも仕方ないことだ。

4年目のときの北日本は忘れられないものとなった。念願の全日学二走団体出場を、それもドン・ホッパー抜きで後輩達は果たしてくれた。一方、ドンは、馬体からみて、もう無理かと思われたステイブルを無過失でゴールしたにもかかわらず、騎手の馬鹿なミスでそれに見合った成績を与えてやれなかった。オープンで出た余力審査は、成績には出なかったドンの素晴らしさを皆に見てもらいたいという思いだけで走った。自分が全日学に行かれないことなどどうでも良かった。ただ、自分自身がクラブを上げられなかったことが皆に申し訳ないという思いで一杯だった。この時ほど自らの主将という立場を恨んだことはなかった。皆と顔を合わせるのが辛かった。そして、北日本のレセプションで他大学の4年目と集まって飲んだときには、4年間のこの日のためにあっても良かったと思わせられた。

この4年間に、多くの馬達が、そして多くの人達が、多くの思い出を作ってくれた。今は、この馬術部での大学生活による無形の財産に、ただ感謝するのみである。

自己紹介・他己紹介

☆4年目



左より北凜、服部、ドン・ホッパー



村井、北川

服部 雅史（前主将・文学部行動科学科）

自分のできることを以上のことを、一人でやっしまおうとして苦しめられたりした。

結局、いまだに自分というものがわからないでいる。

情ない。

クラブを離れた今、支点を失ったコンパスのようにゆらゆらしながら、新しい何かを求めている。

人は自我の支えなしで生きていくことはできないという。

自由からの逃走、という言葉が、心に引っかかりはじめている今日此頃である。

☆ ☆ ☆

ボンボンと肩をたたかかれて軽く振り返ると、そこには服部兄の人差し指があった。

いつも深刻な顔で何かを考えているようで近寄り難い感じもするのですが、実は、そういう時は何も考えてなく、家でじっくりとあれこれ深く考えているという事実を、私のみならず皆知っているのです。

一年間、部の運営を全て一人でやってこられたすごい兄は、これからはパートナーの女性をみつけて僕らに自慢してくれることでしょう。

部班のときよくどなられた。「もっと脚を使え！」「真っすぐ歩かせろ！」馬場ではとても厳しい人

です。だけどコンパのときは、クラブのことを全く知らない一年生のクラブに対する不満を快よく聞いてくれます。ただ一人の最上級生で大変だ、ということをよく聞きますが、そのようなそぶりは見たことがありません。ただ一つ悔やまれるのは、北日学で全日学への権利をとれなかったことです。大変なことなのだろうと思いますが、とってほしかったです。四年間御苦労さまでした。

☆ 3年目



左より北川、中野、加藤、大歳、金田、高野

大 歳 正 明 (会計・理Ⅱ系)

自分の生き方を他人に決めてもらい、それに何の不満も持たず、他人の顔色を窺いながら、他人の思いを満たそうと努力し、「自分の本当にやりたい事をするのは、悪いことである。」という錯覚に陥り、他人に隠れながらこそそとやる。そんな、どこかの金持ちの愛玩犬に生きる活力なんて、湧いてくるはずはない。どうやってその金持ちから逃げ出すか？ それが問題である。しかし、野良犬となって生きる自信なんてない。

☆

☆

☆

3年半は部活動に燃え、卒部後、学部で一生懸命勉強しようという考えは、彼の性格を見事に表わし

ています。悪友達に足を引っ張られながらも、足を引っ張っている悪友達が先に行くのを認めてくれる寛大な人なのであります。又、普段は1年生と一緒にしゃぎまわっている全くの子供です。

流水押しよせるオホーツク。丹頂鶴の舞う釧路の空。

神秘に満ちた阿寒、摩周、屈斜路。雲上にみだれる大雪の花鳥。

広がる草原、エゾリス、キタキツネ。

すべての誘惑を振り払って、部に尽くす兄の姿は、弥勒菩薩の半迦思惟像とでもいいでしょうか。

腹の立つ事もありましょう、疲れる事もありましょう、それでも兄の笑顔は変わりません。

まるですべての煩惱から解脱したかのように。

只、ケーキとパフェの誘惑には、決して勝てないおとしせんばいでありました。

加 藤 ゆ う こ（馬匹・農学部畜産学科）

他人を圧倒させるくらい傲慢だが、あきれられるくらい弱い。黙っていようと思っても、浪速育ちの気の短かさか、言葉は、つい口を突いて出てしまう。おそらく口をつぐんでいれば傷つける数も傷つく数も減るだろう。でも、癡りない私は、今日も声を大にして言うのである。「あと先を考えない」「脳天気」とは、私のことを言う。

☆

☆

☆

あれはたしか4月の終り、もうすぐ半沢杯。夕当の作業中、『加藤が豚に足をかまれた!!』という奇妙な知らせが入った。事実だった。笑った。涙の出るほど。彼女は本当に動物好きなので、雄豚が彼女を好きになったのだらう。心憎い愛情表現で豚くんは彼女にその愛を告白したのだった。試合にも、出れず、彼女は豚くんをさぞかしうらんだであらう。いや、この豚くんの愛をきっと明日への糧にしようとしたにちがいない。鮮やかな牙の跡を太ももに残し、彼女は頑張った。

『私はやる。この傷に替って!!』

そんな決意を胸に抱いて彼女は来シーズンに向けてはばたくのであった。

「悩みがあったら、いつでもこの加藤先輩に相談しなさい。なんでも、まっかせなさい!!」と胸をたたいて言ってくれそうなパワフルパワフルゆーこ姉。練習中は男子の先輩顔負けの厳しさだけど、練習を離れると下級生ともおおいに盛り上がり周囲を大笑いさせてくれます。強さとたくましさや優しさと、ひそかに実はクラブで一番女らしいのではとうわさされる要素をあわせもつスーパーウーマン。お嬢にまたがって活躍する姿に「加藤せんばーい♡ かっこいー!!」とまっきいろな声援を送ってしまいたいそうになるのは絶対私一人ではないはずです。ねっ、みなさん!!

金 田 克 己（主務・農学部林産学科）

“面白いことしかやらねえ”なんていいながら、目の前にあることすべてに没頭してしまう。

“俺、自分一人で生きていくんだ”なんて思いながら、みんなの優しさが身にしみて、やっと這い上がれる。つくづく単細胞。

この1年間で変わってしまった点——年齢、学年、目つき、親の信頼度、生活時間帯、後悔心の欠如、馬歴、キノコにつく青カビに対する感情。

☆ ☆ ☆

林産学科の中で、念願のきのこ研究の講座に入れた彼は、いつ出てくるとも知らぬきのこのために、真夜中も学部へ行く。そして、学部のワープロを卒論のためと、そして、ちゃっかりと主務の仕事のために駆使して（マニュアルと格闘して）いる。そのうち彼は、飼料庫のとなりのポロ山で、マッシュルームでも作り始めるかもしれない。

兄は馬が好きです——ノエルを愛しています。

兄は鳥が好きです——鳥の名前を沢山知っていて、北村牧場の鏡池に行くと目をきらきらさせて僕らに語りかけてくれます。

兄は料理が好きです——好きかどうかは僕の知るところではないけれど、得意であることは確かです。1度でいいから兄の作った料理を食べてみたいものです。

兄はお酒が好きです——泊まりの時、ウィスキーのオンザロックをたしなんでひとり上手しています。兄は勉強も好きです——毎日、林産学科で遅くまで頑張っています。今度、きのこ通りの実習の時に部にマツタケでも持って帰って来て下さい。

そして、兄はこの馬術部が大好きです。主務としていつも馬術部のことを考えてくれている頼りになる兄です。

高 野 薫（副将・農学部農業工学科〈機械〉）

留年して一年間暇な生活を送ってきた私は、どういう訳か学部移行後もそれ程忙しくない生活を送っています。しかし暇な生活も3月までで、4月からは非常に忙しくなるという話。忙しいのはいいのですが、あっという間に月日が経ってしまうのがこわいような気がする。一年の頃は早くOBになりたいなどと、つまらないことを考えたこともあったが、今は少しでも長く現役でやりたい思いで、かえってあせってしまう。あと一年、力を出し悔しまず精一杯やろう。

☆ ☆ ☆

1年間、トラクターの腕にみぎをかけてきた彼は、それでもたりず、ついに農機に移行してしまった。農機では近年稀にみる優等生になるだろう。クラブの方でも、今年はとうとう北銀を全日学につれ

ていった。1年生の時から夢で、これをしなければ親に言いわけができないと言っていたNHKの全日学テレビ放送出演を来年は必ずや実現させてくれるであろう。

たくさん食べては、おなかをこわし、治ったところにまたたくさん食べておなかをこわす。背を丸め、おなかをさすり、「はらがいてーよー」と、のたまろ兄にすれ違ったのが何回あったことか。兄がケーキやほかほかおにぎりの誘惑に勝てるのはいつでしょう。

今年は念願の農学部移行と全日学出場を果たされ、おめでとうございました。来年は絶対、馬事公苑のスティープルを駆ける兄とギンちゃんを見たいっ！と思ってます。

中 野 兼 一（主将・農学部農業経済学科）

『まだ燃えつきていない。まだ……』

だからなんにも言わず、まっ白な灰になるまでやらせてくれや。』

もう後がない。今年の敗北、屈辱が無駄にならぬよう、俺はみんなとやるしかないのだ。

☆

☆

☆

彼ほど、根性で事を成し遂げられる男は、そうざらにはいない。類稀なその根性に、無数の強運がついてくる。強運をよぶ彼の努力も並大抵のものではない。それは、彼のこけてしまった頬を見ればわかる。試行錯誤せずにはいられない、わからない時は前へ突き進むしかない——そういう男なんだ。

そして彼は、謙虚である。奥深い思慮を持つことを隠さんがため、口下手を装っている。全く、ニクイ奴なんだ。

ハッター男と人は言う、軽い男と人は言う。しかし、このハッターと軽さが、彼の底知れないパワーを生み出す源となっている。彼を甘く見てはいけない。彼の執念深さは、SS仕込みなんだから……。

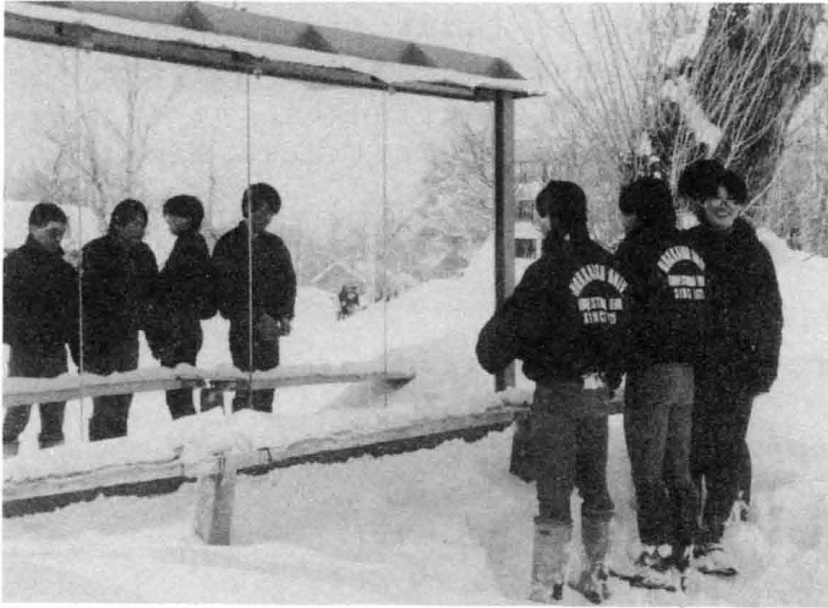
Dragons 命、カラオケ命、コンパ命の兄。

ディスコでは、一風変わった渋い踊りを見せてくれる。

無責任な態度に対しては厳しいが、ふだんは寛大。

部員の自主性によって部全体が活動できることをめざしているようだ。

☆ 2年目



左より前田、石川、湯浅、仲村

石川 信 行（作業・文Ⅱ系）

人生の歯車に一つ予定外のが入って、全て逆まわりにまわりだしてしまった。

「自分に厳しく、他人に厳しく」をモットーにしていたのがうまくいかない。他人にいくらでも厳しくできる分だけ自分にはいくらでも甘くできてしまう。自分のことしか考えていないからだろう。

天から与えられたこの一年、自分に厳しくなり飛躍の年としたいものである。

☆ ☆ ☆

石川先生と言えば、部室と答える。安住の地。

学校行かないし、石狩に行くし、努力家といえます。

作業隊長だし、長岡さん用員だし、クラブの鏡です。

理想のクラブは、近くて遠い。

兄は1年目女子部員にとって、馬術部の歩く壁です。今まで何人の女子部員が泣かされてきたことか。それでも、まじめで厳しい兄に惹かれてか、兄の名前が話題に上ると上らないのとは、話の盛り上

がり方まで違ってしまうのです。兄の1年目に対する影響力にはすごいものがあり、じわじわと石川兄論に洗脳されていく1年目が急増しつつあります。石川兄語の伝染にも恐ろしいものがあり、気づかぬうちに、肯定にも否定にも“いや”をつけてしまう病に、部全体が冒されてしまっているのです。何時にも冷静で冷たささえも感じてしまう、そんな兄も、チアフルのサブパーティの際の小樽ドライブでも名ゼリフ、“こんな広々とした海を見ていると、人間関係のしがらみが、他愛ないちっぽけなもののように思えてくる。”で、らしからぬ一面を覗かせて下さいました。これも“イメージチェンジ”の賜物でありましょう。なさけない我々を見て思いやられるなんて言わずに、厳しいままで、がんばって下さい。

仲 村 秀 喜（副務・教育学部教育学科）

同じことを繰り返すな。成功も失敗も。常に欲ばり、新しいことを目ざせ。

自分を追いつめる、限界まで。怠惰は敵だ。

……と偉そうなことを言っている有言不実行の仲村です。

☆

☆

☆

つかみどころのない、それでも形だけは保っているコンニャクのような兄でしたが、最近は厚揚げになりました。かめばかむほど味の出るすめいかになるのはいつでしょうか。僕はその日を心待ちにしているのです。

以前、仲村さんと一緒にバイトに行ったことがある。突然入ったバイトだったので、偶然いた人にあたった。乾草バイトはつかれるものだ。バイトの帰り、仲村さんの運転を見ていると、まるでポールポジション（アーケードゲームの一種）をやっているように思えた。ハンドルさばきとか、画面が似ているとかいうのではない。「このヤロー！」「突然入ってくんな！」「なめんなよ！」とかいった罵声がまるでゲームをしているようだったのである。やけに御機嫌ななめな仲村さんでした。

前 田 武 己（飼料・理Ⅲ系）

最近、やっとまともに生きようという気持が芽生えてきました。O兄、I兄の次にひまな人間として馬に、〇〇に努力したいと思っています。来年は絶対に移行を果たし、H兄、O兄の跡を次いで3代目にならぬようにしたいと思うこのごろですが、現実は何？

☆

☆

☆

春に劇的なカムバックを果たしました。出戻りということと、持って生まれた口の悪さで苦難の連続

のように見うけられましたが、やはり他の世界を見ながらもやっぱり馬しかないと思ってもどってきただけに気合の入りが違います。弱体2年目の大いなる刺激となりました。

ひんやりと押し黙り、眉根などこころもちひそめつつ、退廃的な表情あくまでほの暗く、マイルドセブンの紫煙、ため息とともにそっと吐きだす午後一時。といった風情はなぜか兄には似合いません。

湯 浅 真 美（記録・理学部生物学科〈植物〉）

毎日が楽しければええじゃないか。

人生なんて、どうせバクチやし。やりたいように、生きてゆきまひょ。

☆ ☆ ☆

彼女は、何も考えていない振りをして日夜明るく振るまっている。理屈をこねくり回すのが好きな、現2年目の中で唯一の感覚派なのだ。そして彼女は強い。自転車の2人乗りは必ず彼女がこいでいるし、あの銀もきちんと前に出す。その強さを馬事公苑まで持っていってくれ。あの「冬」はもういらぬ。

夕当の時や朝練の後とかよくアハハハという笑い声が聞こえる。よく笑う人だなあと不思議にも思う。湯浅姉が笑うと緊張した場面でも普通に聞こえる。何故だろう。だけどホッとする。二年生の女子一人になってしまったけど、いつもの湯浅姉でがんばって下さい。

☆1年目

伊 藤 顕 治（飼料・理Ⅲ系）

いったい自分は何で馬術部に入ったんだろう。そんな事も考える間もなく今まで過ごして来た。そして今となって、自分は今まで何をしていたのかを考える。入部の動機は何かときかれても、明確に答える自信はない。むしろ考えれば考えるほどそれが何だったかわからなくなって来る。しかし現にここに自分がある。これはまぎれもない事実。今まで何度真剣にやめようと思ったか。それは1回や2回どころではないのだ。それなのに現実に自分はまだここにいる。これはどうしてか。別に自分の意志が強かったわけではない。意志が強ければもうここにはいないだろう。つまりはその程度の悩みでしかなかったのだ。秋も深まり、悩みも増えつつけるばかり。考えれば考えるほど情けない自分が見えてくる今日この頃。とりあえず今出た結論は、何まで何をしてきたか、ではなく、今何をなすべきかを考えるようにしようということ。まずは気合いを入れなければ……。

☆ ☆ ☆

クラブに対する姿勢は真面目な部類に入るだろう。性格も真面目のようだ。しかし“裸踊り”や“スーダラ節”を歌い出す精神構造の謎は誰にもわからない。ひと昔前のタイプだと思う。そう、彼のこと“若年寄”などと言ってはいけない。

一見クールに見えて実はクールなんではないかい？どんな時でもあわてず騒がず冷静で、いとも優雅におちついて客観的判断を下し、時にその観察力を発揮し鋭い指摘をする彼は、私のようなボーッとした人間には、ただただ感嘆するばかりなのです。



左より岸本、美口、小林、真鍋、岡崎、岩田、中戸川、西田、堀崎、伊藤、福庄
平井、林、根井、島田

岩 田 春 美（文化・理Ⅲ系）

運動神経が旅立っているのに、何故か入部してしまってボー然としている今日この頃…。力がなくて皆に迷惑かけるし、今だに飛び乗りに苦しんでいるし…。でも少しは進歩したと思うんだ。だって、ねえほら、見てよ！この腕を！ねっ、筋肉がポッコリ……☆

☆ ☆ ☆

色白。めちゃめちゃガリ子。小さい。

こんな子が大丈夫なのかしら、とよく思ったものだが、今だに頑張ってる。

おじょうが怖い怖いと言いつつ、OB戦ではヘルメットをふっ飛ばし、すさまじいスピードで帰ってきて、ジムカーナ上位入選。実は度胸がよかったりする。

しかし、あれ、どこにいるのかなと思わせる彼女。よく見渡すと、ちょこんと立っていたりする。

はるちゃん、馬術部はパワーですよ。これから、もっともっと鍛えて、そのガリガリをもりもりにして下さい。

もし彼女に出あったら、からかって見ましょう。そしたら必ず「ユルシェーン」または「ユルシェン」といった後、牛の鳴き声のまねをすることでしょう。たまには牛の鳴き声が最初にくる時もあるようなのでご注意ください。また、それほど牛の好きな彼女は牧場出身の先輩にあこがれている様子です。

その強力なキャラクターを生かし、浮気な先輩にもめげずに今後もがんばって活躍して下さい。

岡崎文香（馬具備品・文Ⅱ系）

わがままと気まぐれだけで成りたってるコ。「予定は未定」がモットーで、「ま、そんなもんだ」が口ぐせで、いつでも楽しくほけほけ笑ってられればそれで幸せ、なんてあんまりにも進歩とゆーものがないのだった。笑いじょうご・泣き虫・寂しがりや・甘えん坊・いじわる——うーんっ、みなさん、いっつつもめーわくぼっかかけてごめんね!! P.S けどねいくら部室のコタツを愛してて文系だからって、そんなに年がら年中ヒマなわけじゃないんだってば。

☆

☆

☆

「えっ?! 枝豆って大豆だったんですか?」の発言以来、2年目のMに目をつけられ、からかわれている彼女です。「うち、文系なもんで無知なんです。」と、可愛い顔で笑っている。大きな声では言えないが私も割と最近まで枝豆=大豆だということ知らなかった。実はみんなそんなもんである。

キャピキャピのギャルしてるなァと思っていたら、最近はや地でも馬を動かそうという気迫が感じられるようになってきたようである。

大きな目をくるくる回しながら話す彼女。

酒が入れば、体は小さくても気はとてつもなく大きくなる。

大好きな馬供の名を呼ぶ時、一オクターブ

声が高くなり、おろおろしながらもギャランに

ブラシを当て続ける……。

どうだい? 馬に乗って、普段見えない所が

見えるってことは、気持ちがいいもんだよなっ!

岸 本 真 理（部報・理Ⅱ系）

大学に入ったら、英会話の学校に通い、スイミングスクールにも行き、各種免許をとりまくり、そして小学校からの念願だったあのウルトラクイズにでて成田でじゃんけんするんだ……。

と、希望にみちた3月を送った私は4月からこれまた“アカシアの好きな馬”を読んで以来憧れの馬術部員になりました。希望はどこかにふっとびました。でもまあいいや。今はとにかくとにかくうまくなりたい。楽しんでいたい。多少の苦しさはがまんするから。

☆

☆

☆

馬術講習会の受付をしていた僕のところに1人の可愛い女の子が申し込みにやってきた。「こんな可愛い子が馬術部に入ってくればいいな。」という僕の期待通り彼女は入部を決めてくれました。そして今、彼女は僕の予想に反して元気に馬術部員を続けています。このまま頑張っていて、普通の女の子でも馬術部をやれるという証明になってほしいものです。

彼女はマリちゃんと呼ばれている。何のことはない、ただそういう名前なのだ。にもかかわらずその愛称は彼女にいかにもぴったり。そのキャラクターは天真爛漫といった感じ。悩めるときも健やかなる時も、さりげなく笑っているのだ。でもやっぱりいやな事があればそういう顔つきになるようだ。

彼女はさりげなく笑わせてくれる。ある日長靴を試着しぬげなくなって、4人に手伝ってもらって脱いだと思ったら、今度は馬上で長靴が脱げたこともあった。最近皮肉を言ってもめげなくなって、ひらき直ってしまうようになった。そうしてある一つの社会にどっぷりとつかってしまうこととなった。

辛い時にはノエルに相談していた彼女、根性出して頑張っている。と言いたい。

小 林 佐 代（部報・理Ⅲ系）

自分にプレッシャーをかけたくないの、自分の決心は人に言いたくない。不言実行がかっこよいと思っただけです。でも、そろそろ、プレッシャーをかけてでもやらなきゃいけないのかな……。

☆

☆

☆

自宅生というのは家に帰ればご飯はあるし、洗濯をしなくていいし、いいなと思っていたのだが、自宅生の部員をみていて、やはり自宅生はたいへんなのだと思いはじめ、つづけられる自宅生が特殊なんだと思いはじめたところに入部してきたのが彼女。勝つという確信のもとに半年もつかどうかの賭をしたのだが、秋に馬場の横に部屋を借りると聞いて勝負をあきらめた。お母さんが馬術部のOGということを知っていたのが大きな敗因である。

どことなくK姉に似ている雰囲気に加えて、“部報”という役職、もう彼女には頭が上がらない。

亀屋萬年堂がお菓子のホームラン王であるように、彼女も我が一年目の期待の星なのである。

ガンバレ!

島 田 季 一 (車輛管理・理Ⅲ系)

北海道生まれの東京育ち。

そして、また北海道へ。

これが「シャケ」と呼ばれたる由縁。

今はまだ「カンバックサーモン」なれど、

いつの日か「キングサーモン」になりし日を夢見て、

日々、馬とたわむれる。

☆

☆

☆

ボク島田です。シャケと呼ばれています。よく先輩やOBの方から、ドンホッパーに乗っていらした増田大先輩にソックリだと言われますが、お会いしたことがないので、自分では何とも言えません。

人づきあいがうまいので、けっこうサボっているのですが目立たずすんでいます。これからはしっかりやろうと思いますのでどしどし言って下さい。ガンバリマス。

以上島田君の自己紹介でした。

「まじめな顔をしているが、

実はすれちがっただけで妊娠するといわれている。別名ジャミラ。)(FMCパンフより)

彼はシャケ、H兄の腰巾着、等々、様々な異名を持つ明るい青年である。四歳まで小樽にいたそうだが、何を思ったか、再び北海道に舞い戻って、馬術部に入ってしまったのが、彼のお肌の曲がり角、あるわあるわ、再試、再々試、再々々試、何処まで続くの再試地獄。いい加減にしろさいね。本当に。甘い物好きなクセに下手に隠そうとしたりする。女の子が食べに行くのに便乗して、パフェをほおぼろなんざあ邪道である。まだまだ修業が足りない。早く開きなおって、某先輩方の後継者となり、次代の担い手となるのだ?!

中戸川 周 子 (レシート・衛生 札教大<家庭>)

空っぽの自分からぬけ出たくて、過去の記憶から本気になれた自分を探し出そうとした。なんてバカな奴と思われても、これしかないと思った。そう思ったら、B型でしし座の私には、前しか見えなかった。周りへのめいわくを考えなかった訳ではなかった。でも、大学で馬に乗るChanceは、自分で作らなければいけなかった。今しか恥はかけないと思った。

いつか、たてまえの話になるかもしれないが、とりあえず今は、馬や人から離れられないので、許される限り、がんばっていききたい。

☆

☆

☆

遠く「愛の里」まで自転車で通っていた根性者である。朝練が終わるとダッシュで教育大へと向かう。しかし、そんな生活ではやはり体がもたないと、今は18条に小林との愛の巣をつくっているそうであります。

彼女の中でどういう心鏡の変化が起きているのかよくわからないが、髪の毛は段々短くなっていく。このままのペースでいくと、部報が発行される頃には丸坊主になっているのではないだろうか。男子の一部で流行している丸坊主をうらやましいとでも思ったのだろうか。彼女の明日に期待しよう。

彼女には部室でしか会えない。北大構内で見かけることはまずない。(以前、教養食堂で見かけたことがあったが。)住まいも本当の学校より、馬場に近所に移してしまった。こうなったら、来年は北大を受験して晴れて北大馬術部員となるべきである。

西 田 美 春 (記録・医短 看護)

よく食べ、よく笑い、よく遊び、よくは学んでいない。

自分がどこまでやれるか試してみたいと思いつつ、能力に限りがあるとは思いたくないという、なんともわがままな考え方をしている。

体力がないとは口が裂けても言えないけれど、もっと超人的な体力がほしい。だって1日は24時間しかないのに、やるべきことが多すぎるんだもん。誰か抗睡眠薬を科学的に研究開発してくれないかなあ……。できれば副作用のないのがいい。

☆

☆

☆

あの好色のチアフル君と○□×すると断言した妹ですが、その後の経過はいかがでしょうか。二世誕生かと期待しましたが、相手が相手なのでどうなることかと思えます。本当に残念です。

「馬に乗れる看護婦になりたい。」と言って入部した。彼女は医短生。医短での生活は忙しいらしい。それとこのクラブとを両立させているということは、とてもがんばり屋なのだろう。彼女はとてもよく笑う。大きな口を開けて笑う。とても気持ちよく笑う。それは普通の女性のと違う。女水戸黄門と呼びたいところだ。この明るさが彼女を支えているのだろう。また彼女はチアフルを愛する。最初にサブについた馬ということもあるだろうか、このチアフル一筋という気持ちになれるところが彼女の強さだと思う。この強さを持ち続けるならば必ず「馬に乗れる看護婦」になれるだろう。がんばれ医短生。がんばれ馬術部員。

根 井 智（文化・水産系）

自分の性格を分析してみたの結論は、とにかく俺は、「甘ちゃん」だ、という事である。自分に対してはもちろん、他人にもそして馬に対しても甘すぎるのだ。もう少し厳しさのある人間に、つまり辛さも甘さもそなえた「中辛」の人間になりたいと思う。

☆

☆

☆

「いやー、僕感激しました。」と常に新しいことを発見する一年目期待の水産学部生。無感動・無関心の新人類馬術部員には是非とも見習ってほしいものである。酔うと説教をしだすという得意技をもつがこれも一年目の将来のことを考えてのことであろう。「優柔不断」という欠点をもつが自分が正しいと思うと上級生にも意見をしてくるなかなか気骨のあるやつである。その純粋さを忘れずにこれからも頑張ってもらいたいものである。

5月5日、半澤杯レセプションにて——「先輩ノ俺、本当にお酒ダメなんです。」

数カ月後、彼の正体は判明しました。

「お酒が飲めない」なんてウソウソ。実は「まなやん」よりも飲めるのでした。ただ飲んだその日その時に吐けば楽になるのに、次の日になってから必死になってから吐くからつらいのだよ。来年は、競馬場での放馬止バイトの時に吐くなんてことをやめて、もう少し吐き方を研究して上手く吐けるようになって下さい。

でも、こんな「根井チャン」も人柄の良さで馬術部には欠かせない存在です。水産系で来年秋には函館に行くことになる(?)けど、私としては——悪いけど留年してもう1年居て欲しいものです。

林 憲 吾（作業・理Ⅲ系）

真空パックのナンセンス ～銀のロードマンの青年編～

なんてたって、銀色に光ったロードマンだ。昨夜ピカピカに磨いておいたボディに朝日が光る。

フレッシュマンになったら銀のロードマンと決めていた。ミヤタサイクルがなんだ！ヨコタミニサイクルがなんだ！！原付バイクがなんだ！！

黒の革ジャンにリーバイスのジーンズ。靴はもちろんリーガルのデッキシューズ。

シャカシャカシャカ…… チェーンの調子も快調快調。

シャカシャカシャカシャカ…… 札幌新道を渡る。

対向車線から女子大生のピチピチGALが原付をとばしてくる。すれ違いざまに一瞥されたって、「ラッキー、島倉千代子」ってなもんだ。おーっと危ない、ダンプのおっちゃん。クラクションぐらい鳴らしてね。なにせ僕の「マシン」は敏感だから、小石一つが命とり。ゴロンと転がりゃ横を走ってる

トラックの下じき、はい、それまでえよぉー」。鼻歌も、これまた快調。う～ん、我ながらほれほれするようなハンドルさばき。

僕は心底こいつに「ホの字」だ。しかし人間が人間じゃなくて「もの」にこんなに心を奪われてんだからすでに人間繁栄の時代は終わったよな。だいたい日本の繁栄なんてものはペリーが来航した、あの時に終わってしまったんだってゆーのが僕の十八番の持論だ。この間、友人のタルシェフ（彼は偽善者だ）の奴が、

「そうは言うが日本の経済成長はめざましかったし、GNPだって世界第何位までいったじゃないか。」なんて、あこがれのロリちゃんの前だからって気取りやがった。

「あいにく僕はそういう知識にうとくてね、ハハハ……。」

と一応あいつをたてておいたが内心、「そんな次元の問題じゃないんだよ、タコ！」とってしまった。あーゆーアメリカシー欠如型の人間が多くなったのも、やっぱりペリー来航のあとだと思うしね。

シャカシャカシャカ…… おととと、頭がちょっと寄り道。思わず自己陶醉しちゃった。

シャカシャカシャカシャカ…… 赤信号もなんのその。

それにしても近頃は時がたつのが速い速い。歳をとるごとに加速度的に速くなる。「いま」が走り去って行くことへの不安、と云うより恐怖は病のように僕をさいなんている。あ～あ、空しいなあ。

また、最近、一週間前のことが一ヶ月前のことのよう、一ヶ月前のことが一年前のことのよう、一年前のことが十年前のことのよう思えることがある。ひょっとしたら一年前も十年前も同じなのかもしれない。同様に一年後も十年後も同じなのかもしれない。あ～あ、虚しいなあ。

やっと18条の通りが見えてきた。ここを右にまがって、信号を渡れば……。

シャカシャカシャカ…… キーッ。とーちゃーく。

ちょっと革ジャンがほこりっぱいかな。まあいいか。

さあ、今日も一日、馬と勉強に「精を出す」ぞー！ 帰りまでここでおとなしく待ってろよ。

「ガッテンダ……。」(ロードマン)

……ふ・ふ・ふ……ういやつ……

☆

☆

☆

何もすることがなく、ひとりて茫然としてしまう時……そんな時が誰にでもあるでしょう。そんな時こそ思い出してやってほしい人物が彼なのです。キャラメル箱が、あ～らあ～ら亀さんに、ちょっとした木片は、バツ君に早変わり。「ひとりぼっちも寂しくなんかいいですよ」と言いたげな顔で、もくもくと創作に励んでいる。その後ろ姿には、常に孤独が漂う——哀れな子羊に神のお恵みを——いい加減、根性入れて、練習に來い!!

得体の知れぬ料理をいくつも食した経験のある彼。

その器用さは「作業」の名にふさわしい。

飲むとすぐ赤くなるが、ゆかいなアクションで楽しませてくれる。

「猫より犬の方が好き」と言いつつ猫を飼うほどの動物好きで、また、「絵本」を集めていたりもする。

彼の馬術における流義は厳格で、「駟歩」より「速歩」を重んじる。

したがって、彼は“ハヤアシ”と呼ばれるのである。

平 井 浩 二（車輛管理・理Ⅰ系）

先輩にこのように言われた、「お前ももっと人と話をしなければだめだ。お前がこのクラブで望むものがあるのなら、それを言わなければだめだ。そうしないとお前の考えはこのクラブに反映されず、お前はこのクラブが楽しくなくなるだろう。」と。子供の頃からそうだった。じっと心の中に押さえ込んでしまう。それを変えなければならぬときが来た。

☆ ☆ ☆

馬術部の歴史を彼は変えた。一年の前期における所得単位数とその成績点において……
もう何も言うことはあるまい。彼には。

“男というものは……ただひたすら黙って……行動するだけだ。”
なんだよな！平井！

かつては3時に曳き馬に行き、授業は週22コマのうち、2コマくらいしか顔を出さず、テストもほとんど受けず……。そんな彼も最近は改心した様子。「一講目がありますので」という言葉だけで、みんなを笑いのウズにまきこむ平井先生。——2年後は2年生になってね。

福 庄 亮 逸（コンパ・文Ⅱ系）

「僕の夢は、大平原で馬に乗ってつっ走ること」だった。その夢は、大平原ではないが日高でサクラシンやオトソウ達がかなえてくれた。今度は北大の馬で日高で走りたい。あんまり書くことがないので失礼します。

☆ ☆ ☆

新人類の多い、一年目の中で、数少ない、旧世代の性格をもつ一人である。何をやるにも、別に目立つわけでなく、地味であるが、一步一步やっていく。京都という土地がそうなのか？それとも、阪神ファンの負けても負けても、甲子園へと押しかける、あの関西人の気質のためか？とにかく、そういう良い意味での泥くささのある彼である。

彼に初めて会った時、“職人”という言葉が頭に浮かんできた。彼はその外見とおりの内面を持つ人である。とにかく誠実、実直な人なのです。隠れファンは数知れず。多数の女子部員が、「福庄君大好き！」と日夜叫んでいる。不言実行型だったはずの彼が変わったのは、コンパ係になってからでしょう。

彼は、コンパを盛り上げるため、「勝って勝って」と叫び、力強く六甲おろしを歌い、同じ調子で与作も歌う。彼の司会によるコンパは、ほのぼのとした雰囲気漂う。そんな彼が私も大好きです。

堀 崎 敬 史（副務・理Ⅱ系）

—ONE FOR ALL

ALL FOR ONE—

RUGBY SPIRITを示す言葉である。私はこの言葉が好きだ。

この言葉、RUGBYのみならずどの競技にもあてはまるはずだ。そう、馬術にもこれから先、このSPIRITを大切に頑張りたい。馬たちのためにも、部のためにも……

☆ ☆ ☆

なにかも太いばかりかと思っていたら最近細やかな面をよく見せる様になってきた。特にその書道の腕まえを武器に副務という雑務をこなす姿には目をみはるものがある。電話の対応もキラリと光るところがあるが、彼女に電話をかけるのに馬術部の名前はなるべく使わない方がいいと思う。ただでさえまとまりにくいことが予想される1年目の中で、要となるかネックとなるか注目される1年目の1人。

昔は30条あたりに住んでいたそうだが、秋に18条の西5とかにあるという、高い建物の7階に引越したそう。前の日の勉強時間と、学習内容と睡眠時間と家からの所要距離を報告してくれる。その話によると、勉強家ようだ。彼は酪農大との交渉を個人的に深めてくれた。ミーティング中に電話をかけて、ひんしゅくをかったのは有名な話である。山下杯では、誰かに勝つと公言した。そして約束は守られた。彼は律儀な奴である。仲村兄の下で副務の仕事に励むべく、郵便受けにせせと毎日通うのであった。

真 鍋 いづみ（薬品・理Ⅲ系）

好きなもの：おみあげ 部室 時館のパフェ

きらいなもの：きれいな毛虫 いぼいぼ軍手

好きなものは好き。嫌いなものは大嫌い。あまりにも感情的に生きてきました。もうちょっとだけ大人にならなければ、と思う今日このごろ…。

☆ ☆ ☆

いうまでもありません。コンパの花！

キャピキャピにみせといて、実は根性もち。薬品のこわーいお姉さんです。

コンパの時、彼女は変身上手な女の子。ある時は松田聖子、またある時は森昌子…。彼女は場を盛り上げてくれる唯一の一年女子で、コンパには、かくし味どころか欠かせないコです。きっと悩んでいる事、多いと思うな。それでもいつも明るく振舞って、持ち前の気さくさでみんなからうらやましい位親しまれています。おっと、ここで忘れてならないのは、Powerfulな大食漢/時館のチョコパとマロパは彼女にとって、切っても切れない縁となってしまったし、チャン大だって、彼女ならケラケラ笑っている内に、軽く(?)食べてしまう事でしょう。食事の誘いは絶対に断れない内気な女の子なのよネ♡ たっくさん食べて、いつもステキな笑顔をふりまいてください。

美 口 博 子 (馬具備品・理Ⅱ系)

馬術部に入って得したこと。①馬と身近な関係になる。②自分の物は自分の物、他人の物は自分の物、という姿勢に拍車がかかる。③人の履いた靴下だろうが何だろうが、平気で身につけられる、強靱な神経になる。④そうそう、SSのとっぷり染み込んだお布団にだって寝られます。⑤長年来の憧れの地、札幌競馬場に足を踏み入れることに成功!(あの高い塀が、妙に、いたいけな女子高生の好奇心をそそったものだ。) こうやって物言の良い面ばかり見て、人生を前向きに生きて行こうと。

☆

☆

☆

地元、札幌出身の彼女、何か不思議な魅力というのを感じる。普段はへらへらしているようでも、何か、ここぞという時の彼女の顔にはそれなりの(おっと失礼!)輝きがある。

お茶もやり、家庭教師もやり、はたまた薬局の店番までやってしまう。いろいろと忙しそうであるが、持ち前の根性で、家は遠いけど頑張ってクラブを続けるんだよ。

ぷつんと切った髪の毛、えへらと笑った口もと。くすりやのみぐみぐは、数少ない自宅生。なんとときどき自分でおべんとうを作り、なんと/ときどき自分で縫ったかわいー服を着てくる女らしい娘に育ちました。いつ嫁にだしても安心です。でも虫がつくとこまるから、モスノーでもつけましょうか。

編 集 後 記

例年どおり、3月31日発行を目標としてきましたが、やはり例年どおり遅れての発行となりました。部報責任者として反省し、お詫び申し上げます。

今回の部報では、内容・形式をあまり変えず、読みやすさを重視する方針をとりました。例えば、戦績報告の部分では、見開きになるべく一試合をまとめ、北大選手を太字にしたこと（そのため試合が順序どおりになっていません）、また、自己他己紹介の部分では、学年ごとに写真を分散したことなどがあげられます。

最後になりましたが、小池先生、斎藤先生、岡田監督、半澤先生をはじめとする原稿をお寄せ下さった方々に御礼申し上げます。

編集責任者 岸本、小林

部 報 第 3 3 号

昭和63年7月 発行

発行者 北海道大学馬術部

札幌市北区北17条西7丁目

北大体育会内

TEL(011)716-2111 内線5597

TEL(011)737-1626 (直通)

編集者 部報編集委員

印刷所 北大生協 **北大印刷**

表紙 大歳正明



電灯電力設備
電気通信設備 の設計・施工
信号保安設備

協信電気工業株式会社

取締役社長 加藤 弘

本社 ☎060 札幌市中央区北13条西15丁目
電話 011(736)8311(代)

岩城弘侑法律事務所

弁護士 岩城 弘侑

事務所／札幌市中央区南1条西10丁目南大通ビルアネックス6階
☎241-0797・251-2470

SAPPORO DRIVING SCHOOL



親切指導が人気です！

4月1日より自動二輪の教習が始まります。
お申し込みは生協カウンターにてお早めに。

札幌自動車学園

〒064 札幌市中央区南7条西1丁目
☎(011) 511-0138(代)



ボリューム満点 コンパ200人までOK!

やきとり 居酒屋 きよた

当日誕生日の方に粗品進呈 新歓コンパ 受付中!!
宴会・御商談にご利用下さい。
札幌市北区北17条西5丁目北向 電話 747-7000

Florist

葉花園

〒001 札幌市北区北18条西4丁目
TEL 737-6241
夜間 (011) 737-6724

四季おりおりの花を
美しいデザインで
お届けいたします。

慶弔用花籠・二段スタンド
ノーブル・アレンジメント
花束・ブーケ・コサージュ
手造りのアートフラワー
花材一式etc

有限会社 菅原写真商会

パスポート写真
カメラ・カラープリント
3分間写真
各種証明写真

北22条西4丁目 ☎ 716-2662



大衆中華

札幌で
2番目に美味しい店



宝来

札幌市北区北24条西3丁目
TEL 758-5105

高橋時計店

学生の皆さん、販売、修理を割引
致して居りますからどうぞ。

札幌市北区北十八条西四丁目南向
北十八条地下鉄駅前
TEL 七四七-七八四六

北大前の旅館

あけぼの旅館

札幌市北区北13条西4丁目 TEL(代) (011) 747-1225

合コンコース

¥2,500

飲み放題

(ウイスキー・酎ハイ・ジュース)

満ぶく料理 6品

(ラムステーキ・中華料理・ピラフ
ミックスフライ・ピザバイ
サラダ)

 セントラルパーク

札幌市中央区南5条西3丁目 東宝公衆会館7階

入学コース

¥2,000

飲み放題

(ウイスキー・酎ハイ・ジュース)

おまかせ料理 4品

(肉料理・湯物料理・ピザバイ・ピラフ)

年中無休

営業時間

●平日 PM 5:00~PM 11:00 ●土・日・祭日 PM 3:00~PM 11:00
☎(011) 531-2882

医薬品、動物用医薬品、化粧品

山本保善堂薬局

〒060 札幌市中央区北4条西15丁目

TEL **611-4553**
641-4178



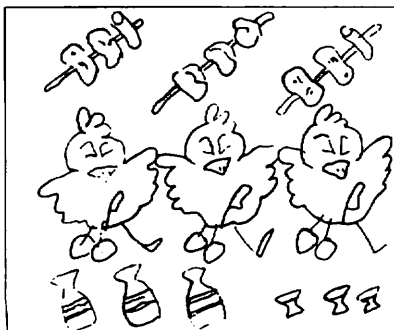
2F ESTABLISH 1987

パブBAR
時館倶楽部
N16W4 758-7660

おさむら旅館

合宿・コンパに

札幌市北区北12条西4丁目 TEL (747) 0251 (716) 3938



焼鳥 みねちゃん

札幌市北区北17条西4丁目
カネサビル1F TEL 746-0717

医 薬 品 卸
IBM コンピュータ販売



ホシ伊藤株式会社

代表取締役社長 伊藤 太郎

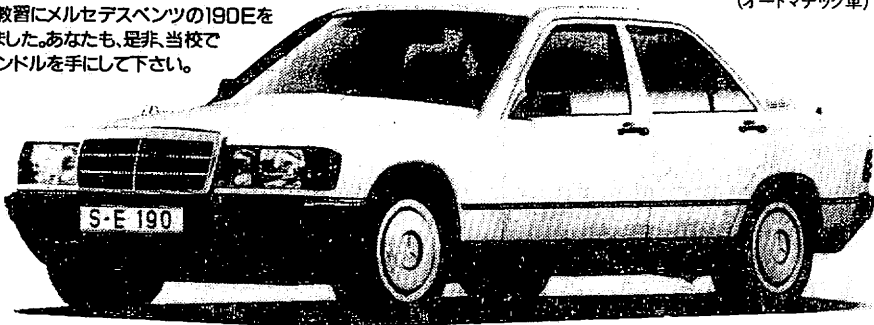
本社 札幌市中央区南 8 条西14丁目1397番地
電話 大代表<011>561-6111

支店 札幌中央・札幌北・札幌西・札幌東・帯
広・釧路・北見・函館・函館東・旭川・
旭川南・空知・室蘭・苫小牧・岩見沢・
小樽・千歳・江別・伊達・八雲・網走・
遠紋・留萌・名士・根室・後志・日高・
稚内・東京

『紳士・淑女は…麻生で、ベンツ』

麻生自動車学校では、このたび卒業生のアフター
レッスン、ペーパードライバー教習、高速教習
などの自由教習にメルセデスベンツの190Eを
採用いたしました。あなたも、是非、当校で
ベンツのハンドルを手にして下さい。

Mercedes-Benz 190E
(オートマチック車)



市内無料送迎バス運行中!!

A 麻生自動車学校
札幌市北区北36条西5丁目PHONE (011)726-5251#0

●各種コンパ・宴会承ります 数名様から50名様まで
クラシックを聞きながらのめる

居酒屋 塩野屋

北区北18条西4丁目18条ハイツ地下 TEL 726-1759

よりよき生活と平和のために

北海道大学生生活協同組合

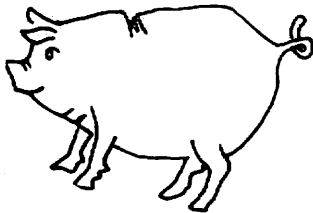
TEL 746-6215

ポ ル カ
軽食・喫茶 **歩留可**

札幌市北区北18条西5丁目18条ビル2F

TEL 747-5336

ポリューム満点



味のとん子

とん子

北区北18条西5丁目 ☎ 747-5809

高血圧症に伴うどうき、息切れ、
手足のしびれに

牛黄清心元

東急薬局

札幌市中央区北4条西2丁目
さっぽろ東急百貨店1階
電話(011)212-2447番

ラーメンなら

北龍

営業時間 / 午前11時〜午前2時

北18条西6丁目
☎747-11376

お客様とのふれあいを大切に…!
食卓に豊かさと話題をおとどけ
します。

LIQUOR&FOODS

K よこやま
北22条

■営業時間■ あさ10:00〜よる1:00
北22条西5丁目 ☎716-3593 年内無休



どぶろく
とちってくだらぬ。

札幌市中央区狸小路六丁目
北国の味のみやげ処

屯田舎
☎11-0533

もしも
241-2700
札幌その他お電話にどうぞ!!

北国の郷土料理の店

屯田舎



・午後5時から
午後11時まで
(年中無休)

大自然の価値ある休日

乗馬・テニス・ペンション

FRONTIER HOLIDAY RANCH

フロンティアホリデイランチ

〒061-33 北海道厚田村しっぶ165の3

TEL (0133)66-3858

北大生協価格

ソフトコンタクトレンズ (18,000)→12,000円 ハードコンタクトレンズ(15,000)→10,400円

酸素透過性ハード (19,000)→13,600円 普及型ハードコンタクト(14,000) 8,000円

健康保険証を御持参下さい。

この他、各種取り揃えております。()内はメーカー希望小売価格です。

◎札幌駅前コンタクト

札幌市中央区北4条西3丁目(北海道銀行駅前支店ビル内)

(011) 222-2122 営業時間/月~土曜日 AM10:00~PM6:00

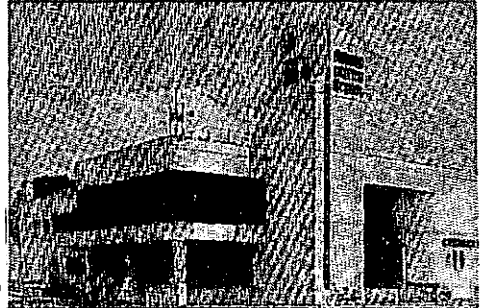
北海道知事認可・北海道公安委員会指定

札幌篠路自動車学校

札幌市北区篠路1条8丁目6番30号 ☎771-2224(代)

- 普通自動車
- 大型特殊
- 身障者科
- 自動二輪(中型・小型)

北海道大学専用スクールバスが運行しております。



24:00

☎716-2575

食品、酒類、塩、たばこ

つちの

電動工具・アルミサッシ・流し台
暮しの日用品・家庭金物・大工道具
建築金物・燃料・暖房器具・合カギ

田宮金物店

札幌市北区北二十一条西四丁目
電話 (七四六) 四一八七番
三四四九番

食料品・雑貨

山本商店

札幌市北区北十九条西七丁目
TEL 七四六—六二八五

(有)北洋給食センター

給食弁当、仕出し、お寿し、オードブル
多少にかかわらず注文うけたまわります。

東区北22条東1丁目304番地
TEL 722-5665



春だから ホクも あなたも

行動派へのパスポート



北大生協指定

北25条1
副都心沿い

只今、新入生、大歓迎募集中！
711-3344

北海道公安委員会指定・技能試験免除

北海道中央自動車学校

明るく親切で教習抜群の指定校

教習時間

8時～21時

- 北大生協加盟(割引をしています)
- 料金は全員安心コースを適用します。(入校時は割引料金のみで補習あれば一定額で打ち切り)
- 短期養成コースがあります。(1日2時限教習)
- 無料送迎バス運転中。(6系統)(徒歩でも至近路離)
- 普通車、自動2輪セットは料金格安です。(同時教習します)

公安委員会指定
技能試験免除
普通車・自動2輪

桑園自動車学校

札幌市中央区北8条西14丁目 ☎271-7511

産地直結、高級タオルのデパート

(株) 竹又タオル 札幌店

札幌市中央区南大通り西10石山通り西向

電話 241-7406・231-6009



有限会社 東京稲毛屋

代表取締役 広山二郎

東京都渋谷区神宮前6-11-4

☎03-400-5929

(社)日本ベストコントロール協会 (社)日本しろあり対策協会 会員

建築物ねずみこん虫等防除業 北海道知事登録

株式会社

北海道防疫サービス



ネズミ・害虫など有害生物の防除、殺菌消毒・除草の施工・管理請負

本社 札幌市北区新琴似6条11丁目9-20
札幌営業所 ☎001 ☎(011) 761-2658

苫小牧営業所

苫小牧市桜木町4丁目15-10
☎053 ☎(0144) 73-3970

腕旗附カバトメタ手記記出
 ・幕属ブッフダオ念世
 ・章織品楯チイルル拭品章兜

各種製造販売元

山禮式国旗掲揚器発売元

株式会社



〒060 札幌市中央区南1条西7丁目
 札幌(011)大代表241-1641番
 受信略号「サッポロ」ヤマレイ
 取引銀行 拓 銀 本 店
 振替口座 小 樽 2 9 0 9 番

- 各ストーブメーカー
 - 家庭用品
 - プラスチック用品
 - カーペット
 - ファンシーグッズ
 - 厨房用品
- 各種とりそろえてあります。

株式会社 **平田金物店**

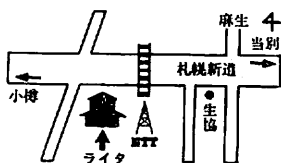
札幌市北区北18条西4丁目
 TEL 716-7536
 747-7616



馬具 shop

REITER

ライタ



札幌市北区北32条西9丁目
 TEL 716-5779

学生さんには
 ネタもシヤリもジャンボ
 とにかくジャンボ
 ネダンと同じ

舌鼓 **鯨の正本**

コンパは30名様までと
 40名様まで

11:30~12:00

北16西4北向

☎746-4231



土木・建築・設計施行
造園・塗装・設計施行

道協建設株式会社

代表取締役 美馬 久之

札幌市中央区北16条西16丁目
札幌競馬場中央通用門前

電話 716-6455
726-6756・6752

金属板加工専門

株式会社 石川金属製作所

札幌市西区発寒1086(第2鉄工団地)

☎(011) 663-1714(代)

●全種コンピュータ加工

- 早い、安い、正確!
- 全種の金型(特殊金型含む)を取り揃えております。

[金型料金当社負担]

- 多少にかかわらず、ご相談に応じます。

十周年記念 特別感謝祭

■期間 2/20日(金)~11/30日(日)まで

■営業時間 / PM 2:00~

オール飲み放題!! **2,500円** (鍋料理他5品付)

てんぐの鼻のような(てつかい)海老3本、鶏の丸焼!!

ご予約・お問い合わせ

☎(011) 221-9009

札幌

てんぐ道場

札幌市中央区南3条西5丁目(北向)TEL 231-3145



北海道大学生生活協同組合

文集、論文、文献、サークル誌、機関誌、新聞、学会抄録、学会講演集、記念誌、業績集、部会報、テキスト、大会プログラム、はがき、名刺、XELOX、製本等

活版/オフセット/タイプオフセット
写真印刷

北大印刷

札幌市北8条西8丁目 T(学内)2084.3282 直通(747)8886

Enjoy horse country life at
Hidaka Kentucky Farm.



北海道沙流郡門別町字福満128番地

☎(01456) 2-0811・2-2192



レストラン



ロッジ



乗馬



テニス



釣り



アーチェリー



キャンプ



総合運動場



馬車

〈広告主へ感謝のことば〉

このたび、昭和62年度北大馬術部部報発行に際し絶大なる御援助をいただきました諸社・諸店に対し、厚く御礼申し上げるとともに諸社・諸店の御繁栄を礼り、ここに深く感謝致します。

(北大馬術部)

